

* 0004442000 *

0004442-000

A 28 - 1

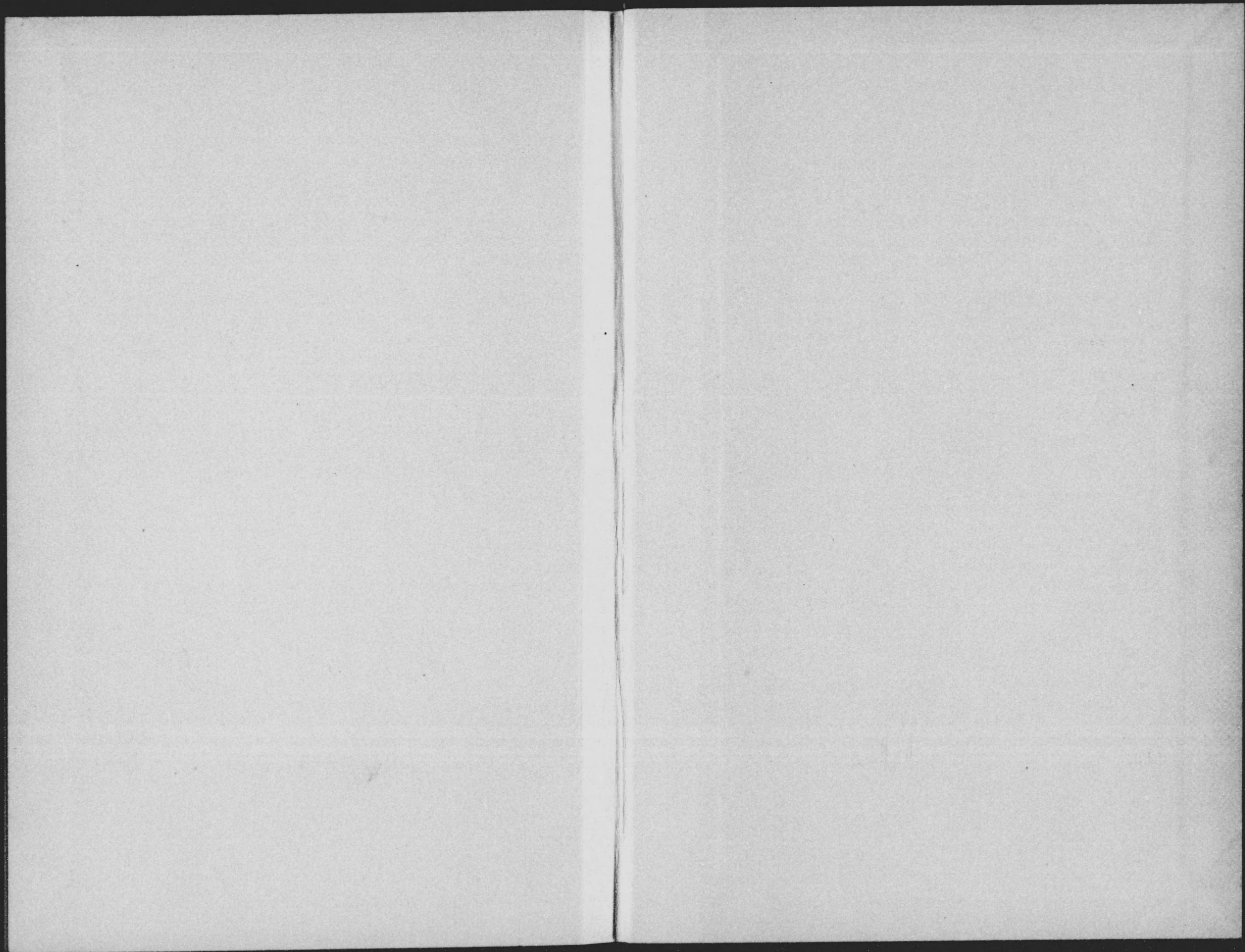
帝國主義研究

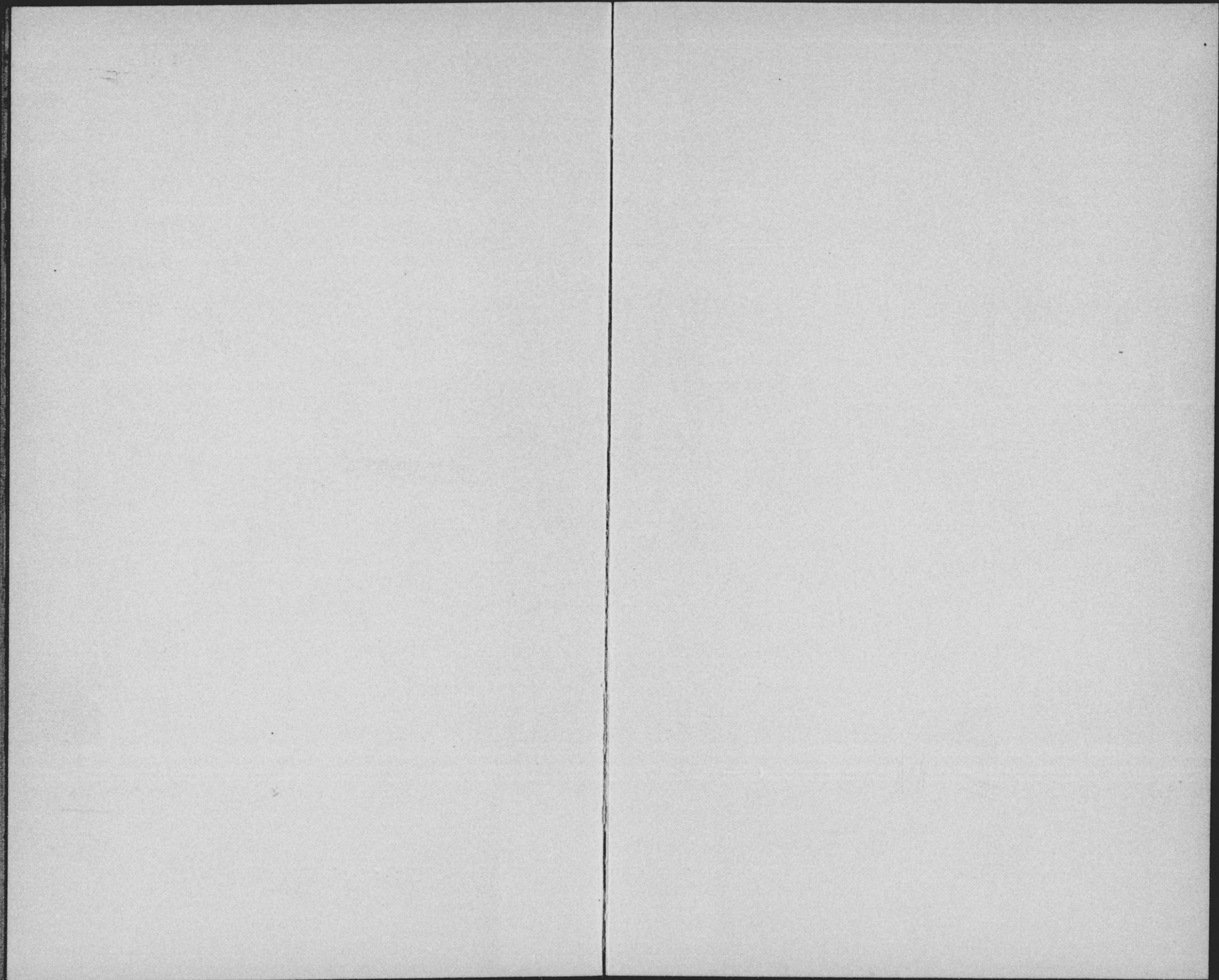
猪俣津南雄・著

改造社

1928

ABB





32 N-52

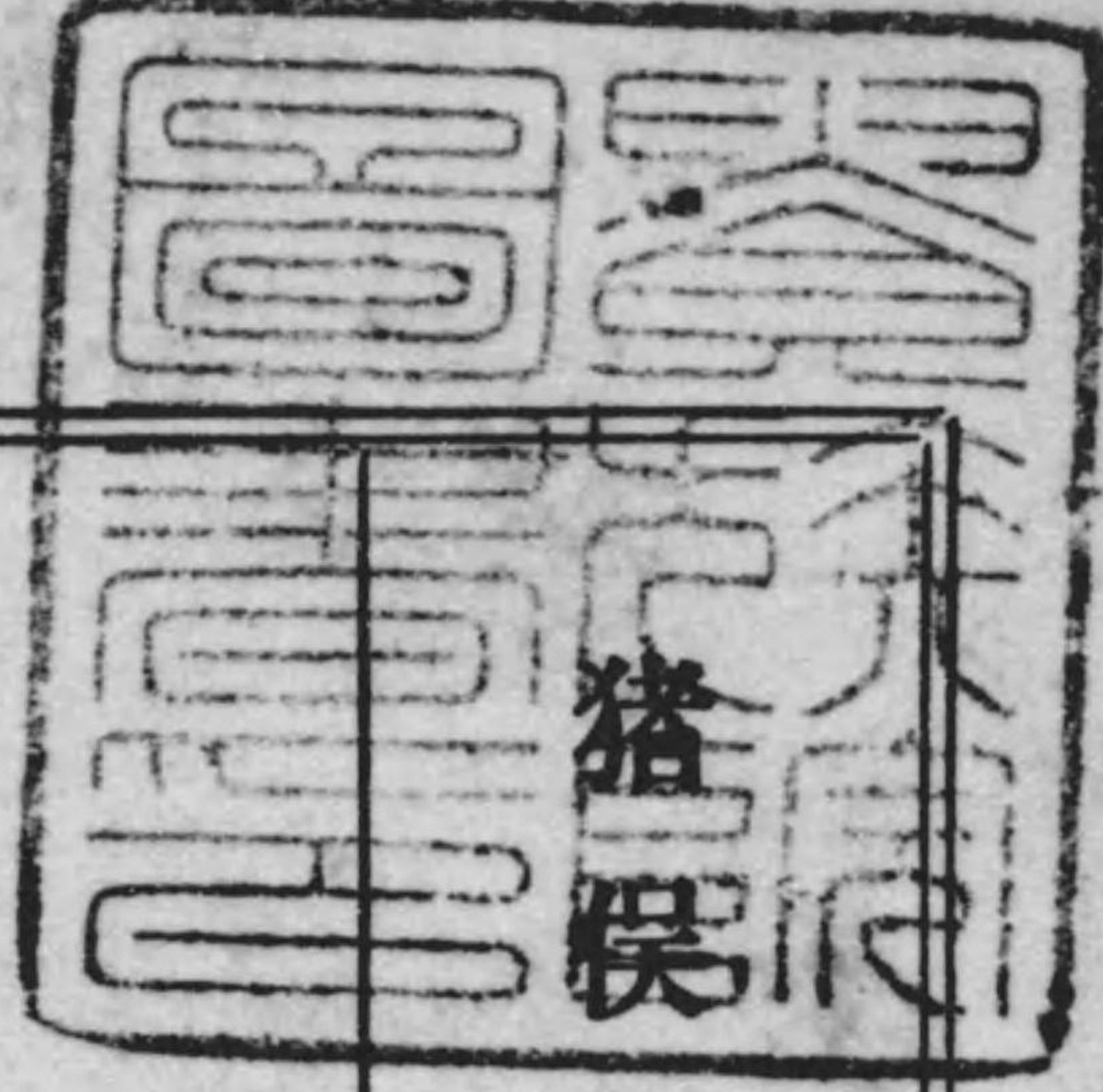


猪侯津南雄著

帝國主義研究

改造社版

貴族院
函311
号
册



猪侯

津南雄著

帝國主義研究

改造社版

A28
1



758101

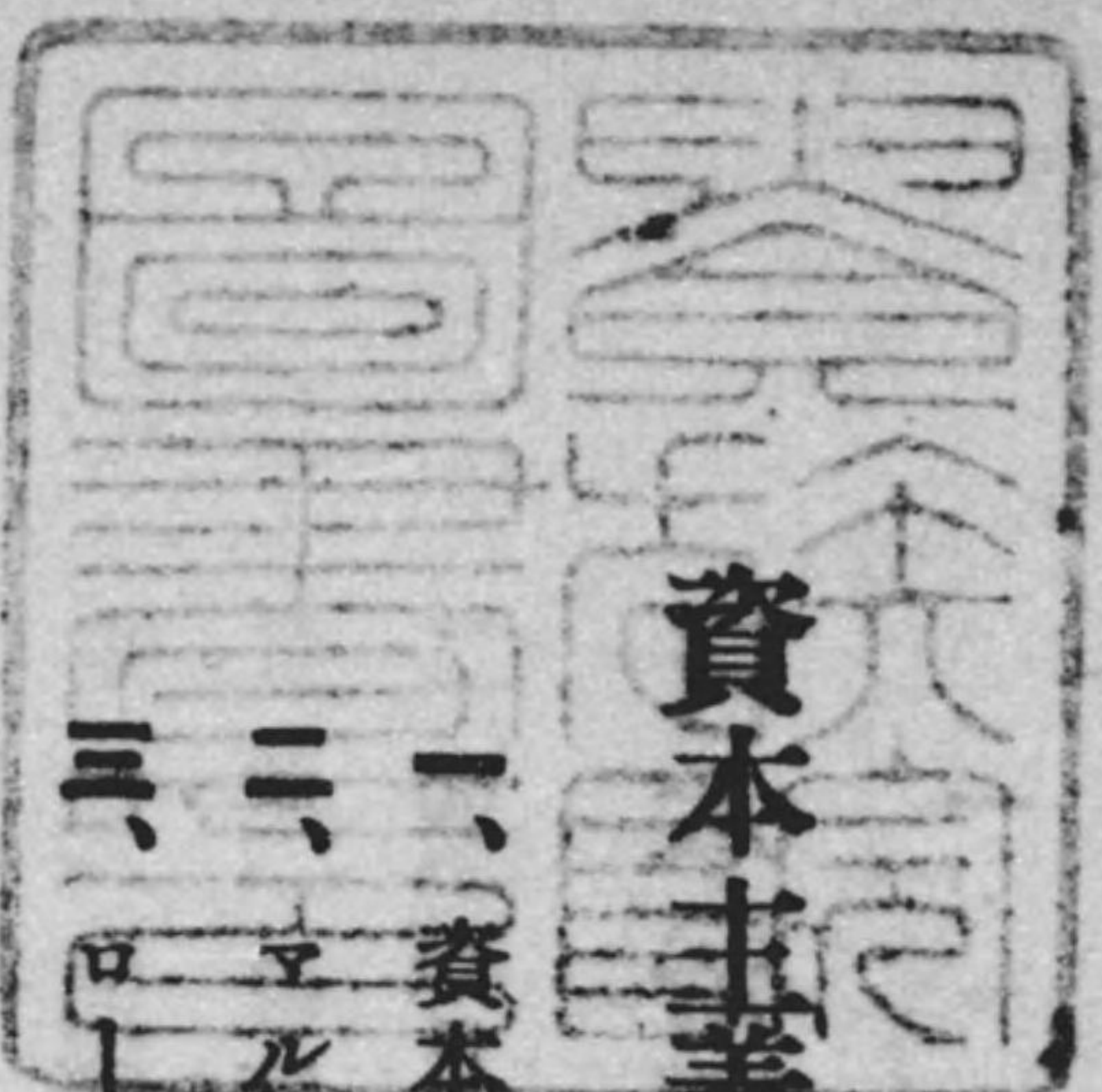
序

本書は、著者が最近に「改造」及び「社会科学」に発表した帝国主義に関する論文を集めたものである。最後の一篇だけは、新たに加へられた。これらの論文において著者の企てた所は、既成の帝国主義理論の紹介または解説ではない、最初の二篇では、マルクスの資本主義の崩壊の理論に即して帝国主義の理論を展開し、他の四篇では、日本帝国主義の特質に関する問題を論じた。一篇を除く外はみなボレミックとして書かれ、従つて体系的な一全體はなさないが、それ故に却つて多くの示唆を投げるかも知れない。尙ほ、論文の由来及び性質は、各篇の冒頭にも略記してある。

昭和二年十二月

猪俣 津南雄

目次



資本主義崩壊の理論的根據

一、資本主義崩壊の必然性に関する論争……………一六四

二、マルクスの資本蓄積理論……………一六

三、ローザ・ルクセンブルク及び河上博士の資本蓄積不可能論
と其誤謬……………三五

四、資本主義の發展は如何にして其の崩壊となるか……………五四

帝國主義の必然性……………六五—一二

一、問題の範圍……………六七

二、資本蓄積の條件……………六九

三、市場と恐慌……………七五

四、生産力の發展と矛盾の展開……………八六

五、金融資本主義への發展……………九二

六、帝國主義の段階……………九八

七、没落の過程……………一〇六

資本主義日本の帝國主義……………一三—一六三

一、問題の重要性……………一二五

二、問題は如何に提起されたか……………一二〇

三、我國資本主義の現段階……………一二七

四、「日本は帝國主義國ではない」か？……………一四四

日本帝國主義の新段階の問題……………一六五—二二一

一、マルキストは何故に、また如何に、現段階を分析するか……………一六七

二、究明さるべき「現段階」とは何か—戰略及び戰術との關係……………一七四

三、日本帝國主義の新段階の問題……………一八一

泥沼に陥没した「プチ・帝國主義」者……………二二—二四六

一、何が「駁論の駁論」か……………二二五

二、高橋氏は何故泥を投げたか……………二二八

三、「プチ・帝國主義者」の諸幻想……………二三九

四、人口問題の陥穽……………二三九

泥沼に陥没した「プチ・帝國主義」者（續稿）……………二四七—四〇二

一、序 説……………二四九

二、レーニンの定義と其の適用……………二五九

三、「悲喜劇の一幕」……………二七三

四、帝國主義國とは何か……………三〇四

五、高橋氏の反問（！）……………三一九

四

六、高橋氏は如何に屈服したか……………三三七

七、日露戦争の問題……………三四一

八、「プチ・帝國主義國論」の本質……………三六三

九、日本は「被搾取國の仲間」か?!……………三八一

十、プチ・帝國主義者の全意圖……………三九二

(了)

資本主義崩壊の理論的根據

此の一篇は、もと、同じ標題の下に、雑誌「改造」(大正十五年正月號)に發表したものである。主題は、資本主義の崩壊に関する問題であり、形式は、福田博士、河上博士、及び高田保馬博士の所論に對するボレミークになつてはゐるが、内容とする所は、直ちに次の論稿「帝國主義の必然性」を準備する。私の立場からは、資本主義崩壊の抽象的一般的理論は、之れを歴史的特殊的な見地において發展せしめれば、帝國主義の理論とならねばならない。本稿を本書に収めるに當り、その後半に少なからず筆を加へたことによつて、次稿との結びつきは一層緊密になつてゐる。

一、資本主義崩壊の必然性に關する論争

(1) 資本主義の「行詰り」と社會運動

この數年のあひだに日本人が經驗したところの全く新奇な、ひどく「世間を騒がした」いくつかの大事件——米騒動、大罷業、ロシア革命、未曾有の産業恐慌、軍縮問題、農村階級闘争、共産黨事件、震災騒動、普選、失業、底を知らない不景氣、青島上海の總ストライキに現れた凄じい民族運動、軍教運動と反軍教運動、無産政黨の樹立とその解散、等、等が、打重つて來るうちに何時とはなく人々の心に刻み込まれてしまつたのは、資本主義の行詰りといふ考である。行詰つたのだと信ずると否とは別として、その信念に立つて動くとは別として——それは別としても、「行詰り」といふ考その物に力強く働きかけられて來たことだけは拒めない。肯定するか否定するか、それとも出來るだけ問題を回避するか、何れかの態度に出づべく強ひられることは事實である。「思想界の混亂」とか、『人心歸趨を知らず』とかいふ言葉の表はすものの底を叩くと、それになる。ひろく無産階級の運動は、多かれ少かれ其の肯定に基礎づけられてゐるだけに、その否定を目指す「思想善導」の運動と、強權を振かざしての威嚇とは、有産者階級側の退つ引ならぬ必要となつて來

た。そして、ラヂオや、「體育」や、シネマやが、意識的無意識的な多数の回避派の心の糧として役立つてゐることは、多くの思想家達がしばしば指摘した所でもある。

これらの事態は、互に作用し反作用しつつ、いよいよ展開して行くであらう。その展開の各段階の様相を見究めることは、いよいよ緊急なる實踐上の要求となつて來た。が、私が此の小論文に於ける考察の發足點として特に注意を喚び起したのは、『資本主義の行詰り』といふ思想それ自體が、無産階級の陣營の内部に於て、乃至はその外圍に於て、どのやうに受取られ、如何に作用し、發展してゐるかの點である。無産階級運動を日に日に大衆化して行くものは、大衆のその日その日の生活上の促進であるが、全運動の指導的精神を決定する大いなる一要素は、資本主義の命數と健康とに關する見解である。資本主義は必然的に行詰るかどうか？ その必然的行詰りの時代は未だ來ないのか、既に來てゐるのか？ 來て居るとすれば、何を以て行詰りであるとするのか？ とうしてそれが如何に打開されるといふのか？ これらの一々に對する解答の如何によつて、運動の形態と方向と實質とに多大の變化を來たすべき事は多くを語らずとも明かであらう。近來の謂はゆる『右傾』か『左傾』かの問題が何よりも雄辯にそれを物語る。そして、此の問題にからまる右翼と左翼との激しい鬭争は、思想的には何を中心として行はれつゝあるか？ すくなくとも其一つは、資本主義の發展が到達せる現階段の性質に關する見解の相違であると見られる。しかも私は、それが單

なる争ひで終るとは信じられない。否、私は此の思想的鬭争によつてこそ、正しき『行詰りの理論』は展開し出でねばならぬと信ずる。

(2) 福田博士の資本主義恒久論

だが、吾々は、一つの組織としての資本主義は理論上永久に行詰らぬものだと論ずる者のある事も亦た忘れてはならぬ。日本に於て、此種の理論が最も大仕掛けに、最も能辯に紹介されたのは、福田博士に依つてである。博士の論文は、さきに『改造』にあらはれ、今は著書『社會政策と階級鬭争』に收められてゐる所の『資本増殖の理法と資本主義の崩壊』と題するものであつて、當時すくなからざる反響を喚起し、小泉教授はそれを評して近來の我が經濟界で最も注意すべき産物であるとされた。(河上博士の誌す所による)。然るに、河上博士はそれを批評する爲に長大な論文を草して福田博士と正反對の立場に立つ理論を發表し、『福田博士の新説』は、露西亞の經濟學者ツガン・ペラノウスキーが二十年前に唱へ出した舊説と全く符合するものであることを指摘された。

然らば、福田博士は如何に論じたか？ 博士によれば――

『唯物史觀の立場から云へば、資本主義崩壊の必然性、社會主義經濟成立の不可避性を立證する爲には、資本の擴張再生産(補註、資本の蓄積または累積と同様)に立脚する現在の資本主

義経済組織が、或る發展階段に達する時、經濟上その存続が最早不可能となることを十分に説明せねばならぬ。¹⁾ 然るにマルクスの資本蓄積の理論に立脚してツガン・バラノウスキーが作った數字表は、「資本制生産に於ける資本の形成と生産の擴張とは、直接消費の大小とは獨立に行はれ得る事を示すものである。そしてそれこそは、資本制生産の本質を示すものであり、マルクスの蓄積理論は、『バラノウスキーの下した推論に於て論理上其の當然の歸結を見出すものである』²⁾。かくて資本家階級は、各産業部門間の生産の權衡さへ保たれる限り、無産大衆の消費力が貸銀制度の爲めに如何に限定され低下されても、毫もそれに依て販路の拘束を受けることなく、自由に無限に其の生産を擴張し其の資本を増殖して行けるのである。即ち、理論上、資本主義生産は永久に行詰らぬことになる。マルクスは、他方に於て資本制生産の下に於ける社會の生産力と社會の消費との間の矛盾を認め、特に資本論第三卷に於て資本主義内在矛盾論を立て、此の矛盾は資本主義の發達と共にますます展開して遂に組織を崩壊に導くと説いてゐる。だが、これは彼れの蓄積の理論と兩立せざるのみならず、後者をばその正しき結論に導く前に『俄かに論歩を間道に踏入れ』たものに過ぎない。³⁾ といふのである。

- 1) 「社會政策と階級闘争」459頁。
- 2) 同上、501頁。
- 3) 同上、500—514頁。

(3) 河上博士の「行詰り」必然論

河上博士は之れに對し、

「私から見ると、それに實に隙だらけの議論で何處からでも切り込める』ものであるとなし、『ツガンの數字表による論證なるものは、一つの兒戯に外ならない』とされる。それは、福田博士の言ふが如く『マルクスの再生産理論に立脚し』た推算ではなくて、實は「マルクスの再生産理論」の誤解「に立脚し」た推算に過ぎない。¹⁾ 何故といふに、マルクスによれば、資本蓄積の前提たる剰餘價値の實現は、各種生産事業間の權衡によつて制限されるのみならず、同時に又た社會の消費力によつても制限される。然るにツガンは、其の數字表の組立に於て、此の第二の條件を無視してゐる。之を無視して、そして唯だ計算上都合よいやうに數字の辻褄を合はせてゐるものに過ぎない。

ところで、『マルクスの擴張再生産の表式そのものは、實は生産物が社會の消費力の不足のため、必ず「一部分しか賣られぬ」状態にあることを明瞭に指示するものである』²⁾ 擴張複生産即ち資本の蓄積が行はれる爲めには、他の條件は暫くおくも、資本家階級はすくなくともその剰餘價値の一部分を自身の消費の爲めに費すことを止め、該部分を代表する生産物を賣つて貨

- 1) 「社會組織と社會革命」193—104頁。
- 2) 同上、176頁。

幣に換へ、之を賃銀に充て、ヨリ多くの労働者を雇入れねばならぬ。茲に於て、擴張と共に新らたに雇傭さるべき労働者に依つて消費される生活資料分の生産に従事する資本家等は、脱け出すことの出来ぬディレンマに陥らざるを得ない。彼等は、賃銀に充つべき貨幣を得んが爲めに自己の剰餘生産物を賣らうとする。が、その買手たる労働者は未だ賃銀を得てをらない。マルクスの表式に剰餘價值實現の二條件を適用して解釋する時には、該表式が斯くの如く解決し難い「問題を含んでゐるといふ點に、(私は正に)、資本家的擴張復生産——資本の増殖——それ自體に内在するところの本來的、根本的の矛盾を見出すのである。」「しからば、此の如き根本的の矛盾があるに拘らず、事實に於て資本の増殖が次第に行はれて今日に及んだのは何故であるか?」³⁾

マルクスは、復生産の研究、從て復生産の表式に於て、研究の必要上、最も抽象的な、純粹な資本主義の社會(資本家階級と賃労働者階級のみから成る社會)を假定してゐるが、かかる社會は未だ曾て存在したことがない。「實際の社會には、資本家階級(又はその附屬物)にも屬せず、労働者階級(又はその附屬物)にも屬せざるところの「單なる商品生産者」(補註、例へば小農や獨立手工業者)がゐて、その商品を賣ると同時に……純粹な資本主義社會では(擴張復生産に際して)到底賣れずして残るべき筈のものを買ひ取るのである。」「かくして、資本家階級は先

3) 同上、184頁。
4) 同上、188頁。

づ自己の剰餘生産物を貨幣化し、之を賃銀として支拂ふことが出来る。そして、資本主義的組織の外にゐる單なる商品生産者等は、組織内にある賃労働者の需要に應ずべき實質を具へた消費資料を生産し、賃労働者等がそれを買ひ取るといふ關係になつてゐる。かやうに、「その組織の外圍と一定分量の消費資料の交換をなすといふこと、この事は、資本主義的組織の下に於て擴張復生産が圓滑に行はれて行くための必須條件である。」「此の資本主義的發展の必須の條件たる取引を可能ならしめる所の「外圍」乃至は「領外の顧客」は、一國內に於ける單なる商品生産者のみならず又た海外に於ける同種の生産者をも含む。即ち未だ資本主義化せざる未開國や半開國をも含む。ところで、資本主義は、「その領外と交通を始めると、間もなく其の領域を資本主義化して、之をその領内に引き入れる。資本主義はその觸るところのものを皆なおのれに同化し、「自己の影象にかたどつて」全世界を資本主義化する。かくて資本主義の領内はその發展に應じて日日擴張せられ、領外の顧客を要することは益々甚しくなるけれども、之と同時に、その要求の増進と正に逆比例して、領外の地域は日々にせばまる。地球の面積に限りがあり、世界の住民に限りがあるからである。斯様にして資本主義は、益々發展するにつれて、益々その内在的矛盾を彌縫するの手段を失ふ。限りなき資本の増殖、限りなき生産の擴張、これを実現し得て、全世界を資本主義の領域内に包含しつくす時、その時資本主義の發展は極度に

5) 同上、195頁。

達すると同時に、その領外に属する外被を全く失ふことによつて、資本の復生産は絶対に行き詰つてしまふ。⁶⁾『之を要するに、マルクスの資本復生産の表式は、資本主義的生産が到底行き詰らざるを得ざる必然性を有する所以を、數學的の確さを以て吾々に指示するものである』⁷⁾

(4) 兩氏の論争は如何に歸着したか

此の河上博士の批評に對し、福田博士は如何に答へられたか？ 少くとも私の知る限りでは未だそれらしいものを見ない。ただ僅かに博士が、『改造』所載の論文『リープクネヒト獄中遺稿、マルクス價值論批評』の初めに於て、リープクネヒトの無二の同志ローザ・ルクセンブルクのことと言及し、

彼女の『學問上の遺業』としては『資本の蓄積』一卷がある。此書は一九一三年に刊行され、一九二一年には同じルクセンブルグが獄中にあつて起草した、同書の批評に對する反駁書……を遺稿から編纂して附録として添えた重刷本が出てゐる。此の附録は、河上博士が私の『資本増殖の理法と資本主義の崩壊』を批評せられるに方りて右書の第二卷なりと稱して引いて居られるもの其れである。同博士が、トウガン・バラノフスキー説を攻撃せられた論旨は、殆ど皆な此の附録と本文とから取られたもので、其悪口雜言に至るまでルクセンブルグから借用せ

6) 同上、220頁。

7) 同上、222頁。

られた……云々』

といふ言葉が見當るだけである。かくて福田博士は、沈黙を守られたに近い。が、他方において吾々は、河上博士の所論に對する部分的批評をば、福本和夫氏(『マルクス主義』第一卷第八號『經濟學批判のうち』に於けるマルクス資本論の範圍を論ず)、及び高田保馬博士(『改造』一三年一二月號『剩餘價格第三論』の後半)から聞くことが出來た。然るに河上博士は、『社會問題研究』(第五十八冊)に於て、『擴張再生産の必然的行詰り……に就ての私の見解の大體は、嘗つて福田博士の論争を批評するため、既に本誌に掲載したところで』あり、『私には今、あれ以上の見解を陳述する用意が出來てゐない』と述べ、且つ高田博士及び福本氏の批評に言及して『私は是等の批評をよく吟味して、自分の考の未熟な點は之を訂正發展せしめて行き度いと思ふ』と言はれたに止まるやうである。かくして、『資本主義の行詰り』の理論に關する論争は未解決のままに残されてある。

(5) 吾々はかく批判する

私が此の論文に於ける問題の範圍たらしめようとする所は、大體、右に引用し紹介した福田、河上兩博士の論争に於て問題とされてゐる諸點に外ならない。福田博士と河上博士との論ずる所は、いづれも資本主義の行詰りに關するもので、理論上その必然性を立證し得るか否かの點にある。私

も、問題の重點の一つをそれに置くであらう。次に、其の行詰りとは、畢竟、資本家階級の資本蓄積——擴張復生産——の過程において生ずる或る事態であると見る點に於て兩氏は一致する。

マルクスは、『資本家的生産の直接に關する所は、使用價值ではなくて、交換價值わけでも剩餘價値の増殖である』¹⁾といひ、また、『此の剩餘價値の生産こそは、資本家的生産の直接の目的であり、その強制的な動機である。そして剩餘價値の一部分を資本に再轉化すること、即ち蓄積は、此の剩餘價値の生産の必要缺く可からざる部分をなすものである』²⁾と述べてゐる。資本家による生産の擴張、從つて謂はゆる資本主義的發展は、資本蓄積に俟つ外はないのであるから、資本主義の行詰りなるものが資本の蓄積に關しての何等かの否定的状態を意味すると見る限りに於ては、私も兩氏と所見を一にする。但し、私がそれを如何なる、特定の、否定的状態と見るかは自づから別問題である。

福田博士と河上博士とが一致するいま一つの點は、マルクスの崩壊必然論に關する或る周知の一點——即ちその理論が、資本制生産に内在する矛盾に出發し、資本蓄積過程の進行につれて生ずる矛盾の展開に崩壊の原因を見出してゐる事を認むる所にある、河上博士は、行詰りの必然を主張され、その主張はマルクスの蓄積理論——乃至はその正しき解釋に基づくものとされる。此の河上博士の解釋と論證とを吟味し、そのいづれもが遺憾ながら誤謬に過ぎないことを示し、そして博士の

崩壊論はマルクスの崩壊論でないことを明かにすること、——私はそれを、本論における仕事の一つとするであらう。

福田博士は河上博士と反對に、崩壊の必然性を否定される。博士の議論を一口に言へば斯うである。——内在矛盾の展開によつて崩壊するといふマルクスの理論は、成立たない。何故なら、ツガン・バラノウスキーはそんな矛盾のない事を證明した。ツガンの證明は間違つて居らぬばかりか、また實にマルクスの蓄積理論その物に立脚する推論である。ツガンの推論の方が正しいのだから、之と相容れない内在矛盾崩壊論は誤りである、と、即ち、福田博士は、ツガンによつてマルクスを修正し、此の修正に依てマルクスの崩壊論を否定するものである。河上博士は、そこで『ツガンの推論』に對して攻撃の砲火を集中された。が、私から見ると、河上博士の射撃は稍々あせり氣味の體で手許が狂ひ、敵にはカスリ傷を負はせた位であるのに、自分は何時しか敵の術中に陥つてゐるのを氣づかず居られたとしか思はれない。ツガンを撃つに急なるの餘り、博士自身も亦た不知不識マルクスを修正するの結果に陥つたと見るより外はない。河上博士は、ツガンの修正を評して、『資本論第二卷と第三卷の間に當然架けられねばならぬ橋が、(原著者マルクスが病魔に襲はれた爲めに)完成されずに終つてゐる』のに乗じて企てられた蓄積理論の逆用であるとされる。そして、博士みづから其の橋を架けることに依つて新しき行詰りの理論を編みあげたつもりでをられる。だ

1) 「剩餘價値説史」第二卷第二分冊、266頁

2) 「資本論」第三卷第十五章、225頁。ハンプルク1919年版——(意譯)

が、私は此の論文に於て、博士の架けられた橋が極めて危険な橋であることを明かにするであらう。否な、博士が架けたと信ぜられる橋は、實是一片の錯覺であつて、人の渡れる本物の橋は既にマルクス其人によつて架けられてあつたことを示すであらう。

(6) 河上博士が據れるローザ・ルクセンブルクの『資本の蓄積』

順序として私は先づ、河上博士が據られたローザ・ルクセンブルクの理論の検討から始めねばならぬ。

河上博士は、ツガンの數字表を以てマルクスの誤解に立脚するものとされ、またマルクス自身の擴張複生産の表式のうちに資本制生産の本來的、根本的矛盾を見出されたのは、何によつてあるか？ それは、擴張複生産に於ては剩餘價値の實現が不可能であるとの議論による。しかるに此の議論は、ローザ・ルクセンブルクの著『資本の蓄積』——帝國主義の經濟的説明への一寄與』の中に、一層十分に説かれてゐる。

一八二二年十二月の日附ある同書の序文には、先づ、著者が此の書物を書くに至つた意味深き経路が次のやうに述べてある。——彼女は以前から、マルクス經濟學を通俗化した入門書を書くべく

心掛けてゐたが、黨の學校での仕事や、運動の爲めやで果さず、一九二二年の一月に至つて再び入門書の著作に取りかかつたところが、思ひ設けぬ困難に逢着した。といふのは、『具體的關係に於ての資本制生産の總行程並びに其の客觀的歴史的境界を明瞭に叙説することが私には出来かねたのである。そこで一層詳しい考察の結果、私は斯ういふ見解に達した。即ち、茲には、單に叙説の問題だけでなく、マルクスの『資本論』第二巻の内容と理論的關聯し、且つ同時に今日の帝國主義的政策及び其經濟的根柢と結びついた一つの問題が横はると言ふことこれである。此の問題を科學的に精確に把握しようといふ私の企てが若し成功してゐるならば、本書は、純理的興味の外に尙ほ、帝國主義に對する吾々の實際の闘争にとつて若干の意義を有つものであらうと思ふ。』

かくて、その頃既にインタナショナルイズムを捨て、無産階級的性質を喪失せんとしてゐたドイツの社會民主黨運動をば、リーブクネヒト等と共にマルキシズムの本道に引戻すべく闘つてゐたローザ・ルクセンブルクは、此の著作に於て帝國主義の歴史の必然性と、資本主義的崩壊のそれとを理論づけようとしたのであつた。『帝國主義は資本蓄積行程の政治的表現』であると共に又た『資本の生存を長らへんが爲めの歴史的方法』である。¹⁾ 資本主義がその最後の發展階段に入つたといふ客觀的事實は、之に應ずべきマルクス主義理論の發展を要求した。ローザの勞作は、正に此の要求を充たさんとする企てである點に於て、そして其企てに於て資本の複生産過程と其の理論との重要性

1) 「資本の蓄積」ローザ・ルクセンブルク全集第六卷、381頁

を明かにし、且つ資本の『現實過程』——わけでも資本主義と非資本主義的外圍との關係に於けるそれに注意をむけた點に於て、疑ひもなくマルキシズムに對する一大貢獻である。『資本の蓄積』は、その論證に於て決して間然する所なきものではない。それにも拘らず、全篇に亘る説得力ある論理的連鎖と、問題の發見に於ける天才的洞察力の現はれとは、相俟つて、『資本の蓄積』を最も勝れた理論的著作の一つにする。河上博士が此の書物にたよられたとしても敢て不思議とするに足らないのである。

さて、私は私の課題へ急がねばならぬ。——ところで、資本家的蓄積に於ける剩餘價值實現の不可能に關するローザ・ルクセンブルクの論證は、マルクスの擴張複生産の理論、特にその方式の吟味と共に進展する。そして私が河上博士及びローザの所論に向つて加へようとする批判の内容は、マルクスの蓄積理論の構成と性質、從てその一成分としての『表式』の特殊の役割に關する解釋の問題に歸着するのである。であるから、批判への前提として、一應、マルクスの理論そのものの輪廓を見究めて置く必要がある。

一、マルクスの資本蓄積理論

(1) マルクスの方法

周知のことであるが、マルクスほど資本主義社會の矛盾を深く見抜いたものはない。が、そのことが餘りに強く印象される所からして却つて屢々忘れられ勝ちな一事は、最も鋭い矛盾の觀察者であつたマルクスこそは又た、同時に、資本主義生産社會の有機體性を最も明確に掴んでゐた者だといふことである。資本主義社會は、階級對立の社會であり、その生産は無政府的であつて、組織そのものに内在する多くの、飽くまでも現實なる、矛盾を有する。が、それにも拘らず其れは統一體をなし、それ自身、新陳代謝と生長發展とを營むものである。生長發展し得るが故にこそ、其の最後の段階に於て自身に取つて代るべき次の社會を、自身の胎内にはらみ得もする。とはいへ、謂ふ所の生長發展は、機械的、自動的なそれではない。内在的な矛盾を有つただからである。彼れにあつての生長發展は、常に、矛盾の展開とその克服の過程であり、その克服によつてのみ、可能な過程である。矛盾の克服とは、平衡の獲得である。平衡は獲得される。が、それは絶對的、永久的な平衡ではなく、相對的、一時的なそれである。相對的、一時的なそれではあるが、平衡が獲得されるが故に、其の範圍内に於て新陳代謝と生長發展との可能はある。平衡はそれだから、動的平衡である。動的平衡に即しての生長發展は如何なる形をとらねばならぬか？ 一面に於てそれは、徐々に自身の胎内に於いて次ぎの社會を準備して行く。が、他面に於て、矛盾克服の爲めに資本主義社會が使用し得る手段は何處までも階級的な性質を有つ所からして、一定階段に於ける矛盾の克

服は、次の階段への生長發展を可能ならしめると同時に、常に、次階段に於ける矛盾をば、ヨリ大いなる規模に於て展開させるやうな仕方になされる。恐慌その他の形をとつて現はれる此の矛盾の周期的擴大的展開を含む發展過程から、資本主義社會が完全に解放され得るのは、自身の組織に固有なる階級的對立と生産無政府その他から完全に解放された時、即ち、自身を完全に否定した時に限られる。そして、生長と發展との最後の段階——轉形期——の性質を決定するものも亦た、かの『矛盾の擴張復生産』の過程である。

これは、資本主義社會が併せ有する矛盾性と有機體性、及び其の双方に制約される資本主義的發展の辨證法的性質を、最も抽象的な言葉で綴つて見ただけであるが、吾々はこれだけのことを頭に置いて、資本論第二卷第三篇の擴張復生産の理論を調べるであらう。ツガン・バラノウスキー及び福田博士の誤謬はもとより、ローザ・ルクセンブルク及び河上博士の誤謬もまた、マルクスがその獨自の方法によつて把握し得たる此の資本主義的發展の特質を認識し得ないことから生じた。詳しくは後段——

擴張復生産の理論は、すくなくとも其の志向に於ては、當然に、資本主義的發展相を對象とするものでなければならぬ。何故といふに、資本主義的發展乃至生長とは、資本家による生産の擴張であり、その遞増的擴張であり、即ち資本の蓄積だからである。そして、其れ以外のものではあり得ない、何故なら、『蓄積を其の必要缺くべからざる一部分とする所の、剩餘價値の生産』こそは、『資本家的生産の直接の目的であり、強制的な動機』だからである。發展相の考察が茲に發足するのであるが、それは理論的考察であるのだから、マルクスが自身に向つて提起した問題は、先づ最も單純な、根本的且つ一般的な問題でなければならなかつた、曰く、擴張復生産——資本蓄積——は、如何にして行はれるか？ が茲での擴張復生産は、資本主義社會のそれである。従てこの問題に對しては、當の社會の有機體性に即しての解答と、矛盾性に即しての解答とが同時に豫想される。そして更に、二ツの解答の動的結合が豫想される。何故なら、發展相の考察を志向とするからである。ところで、矛盾性と有機體性とは、離れくものものでないといへ、その事實を忘れない限り、暫く一方を度外視して考察の焦點を他の一方のみに集注する事は可能であり、また必要でもある。茲に於てマルクスの問題は一段と限定されねばならなくなつて來た。そしてマルクスが選んだのは、先づ有機體性の方に觀察の力點を置く方法であつた。『擴張復生産は如何にして可能であるか？ 可能なる爲めの條件は何々か？』——かやうに先づ問題は提起されたのである。

もちろん、反對に斯う問ふことも出來た——『擴張復生産を困難ならしめる諸條件は何か？』此の場合には、取り敢えず矛盾性の方に重きが置かれる。がしかし、有機體性といひ矛盾性といつても、元來が同一過程に於ける肯定相と否定相に過ぎないのだから、『可能ならしめる條件は？』と

尋ねて行けば自づから「困難ならしめる条件」の発見となり、その逆も亦た真だといふことは、問題と対象との性質の然らしめる所である。何故といつて、「可能ならしめる条件」が見出された時、當の条件の部分的乃至は相對的排除は直ちに「困難」を意味するし、その全部的乃至絕對的排除は「不可能」に外ならないからである。之を要するに、マルクスが提起した問題は資本主義的擴張復生産を可能ならしめる条件（平衡要件）を求めるといふ形で問題を提起してゐるとはいへ、問題を裏に返へせば直ちにそれを困難ならしめる条件（矛盾相）の追求であり、それを辨證法的に展開せしめることによつてやがては「不可能」（崩壊相、行詰り）の考察に到り得るものであつたことを悟れば足るのである。

剰餘價値の増殖は資本家的生産の直接の目的である。が、剰餘價値の増殖は、蓄積を経てのみ遂行される。だが、増殖に奉仕する意味での蓄積は、さし當り剰餘價値の生産と實現（貨幣化）とに制約される。此の意味での蓄積は、飽くまでも階級的——資本家的——見地からのもので、階級的要求に極大限の重みが與へられてゐる。茲では對立相が際立つ。ところで、蓄積を制約し、従つて剰餘價値増殖を制約する所の、剰餘價値の實現は、常態的には、何によつて制約されるかといふに、生産社會の新陳代謝の要求によつて制約されるのである。賣れるものを生産せねばならぬといふ意味の大半は茲にある。そして茲では反對に、調和相、有機體相が前景に浮び出て来る。資本制

生産は明かに階級的生産であるが、同時に社會的生産でもある。が、飽くまでも階級的生産ではあるのだから、階級的動機が優越して来る毎に——そして絶えず優越する傾向がある所から——社會的新陳代謝の要求の方が今度は脅かされる。で、蓄積行程に於ける剰餘價値實現の問題は、對立的、階級的立場からと、調和的、社會的立場からとどちらからも見ることが出来、どちらからも見なければならぬのだから、特に一方から眺め乍らも他方を没却しない用意が要るといふ點に於て、前段に述べた場合と變らない。剰餘價値の實現を制約する事情としては、尙ほ、流通手段の數量のことがあり、テクニカルな問題としてのそれがあることを序でながら注意して置く。

(2) 資本の單純復生産の條件

それでは、資本主義的擴張復生産が可能なる爲の條件は何か？

ところで、求むる所の平衡の條件を、最も根本的な形に於て見出すには、問題を更に限定して「擴張復生産が故障なく行はれ得る爲めの條件は何か？」と問はねばならぬ。（斯く問ふことはまた、問題を裏に返して困難を見る場合に最もハッキリとそれを指摘し得る所以でもある。）

一社會の擴張再生産にあつては社會全體の資本が一回毎に増大し、従て生産も増大する。此の過程は、在來資本の更新と、新らたなる資本の追加とから成る。問題を簡單ならしむる爲めに先づ在

來資本の更新のみに就いて見よう。即ち、「單なる複生産」を見るであらう。これにあつては、唯だ
 在來の資本が毎回更新されるだけであるから、毎回生産される價值の量にも變化はない。それにし
 ても、生産は労働の過程である。そこで一定量の價值で表はされる所の社會全體の資本は、労働力
 に放下される部分（勞賃）と、労働の要具（例へば機械）及び労働の對象（原料）に放下される部
 分とから成る。いま、労働力に放下される資本部分を可變資本と呼んで之を α で表はし、後者即
 ち生産手段に放下される部分を不變資本と呼んで之を β で表はすなら、社會全體の資本は、 $\alpha + \beta$
 に等しいであらう。ところで、資本制生産に於いては、資本家に買ひ取られた労働力は剩餘價值を
 生産し、資本家がそれを收得する。いま、剩餘價值を γ であらはすならば、一社會に於て年々生
 産される價值の總量は、 $\alpha + \beta + \gamma$ を加へた $\alpha + \beta + \gamma$ に均しい。（價值の増殖の行はれない單なる
 複生産なるものは一つの抽象であつて、資本主義社會の複生産は擴張複生産なのであるが、いま後
 者を調べる準備として單なる複生産を想定してゐるのだから、生産される價值の總量中に γ を含
 ませて差支ない。）

$\alpha + \beta + \gamma$ であらはされる價值總量は、もちろん、凡百の生産物に體現されてゐるのである。いま
 生産物に即して見ると、 α が更新されるといふことは、消耗された原料や機械が更新される事なの
 だから、 α 分に相當する價值は、それらの生産手段を代表することになる。次に、 β 分の價值は勞
 働階級が消費する消費資料を代表する。何故といふに、 β が更新されるといふことは、消耗された
 労働力が更新されることを意味し、労働力は労働者の消費生活（衣食住）を経なければ更新されな
 いからである。最後に m 分價值は、資本家階級が「身分相應」(1)の生活をする爲に消費する消
 費資料を代表する。何故といふに資本家は、實際の物質的生産の一要素をなさぬとはいへ、資本制
 生産、階級的生産に於いて搾取者としての役割を演ずるものであつて、此の搾取者階級がそれ自身
 を複生産して搾取を續行し得る爲には、矢張り様々な消費資料を必要とするものだからである。か
 やうに、生産手段と消費資料とが生産され消耗され複生産されて、労働者の労働と機械の運轉と資
 本家の搾取との續行を可能ならしめて行く過程が、即ち資本主義社會の社會的新陳代謝の過程であ
 る。

此の新陳代謝が故障なく行はれゆく爲めには、如何なる條件が充たされねばならぬか？ 此の問
 題を一般的に解すれば、多數の條件が考へ得られる。が、その多くは既に資本論第一卷及び二卷の
 前半に於て扱はれてある。茲では、研究は既に資本主義の發展相のそれにまで進んでをり、問題は
 此の研究階段に特殊なるそれである。そこでマルクスは答へて、その充たされねばならぬ條件とは、
 生産手段の生産と、消費資料の生産との間に或る平衡が保たれることであるとした。

社會全體の生産物を生産手段と消費資料との二群に大別し、各群に屬する生産物全體の價值を其

の構成部分に就いて見るならば、どちらも $c+v+m$ で表はし得ることは、社會全體の生産物の場合と同様である。いま生産手段 (Pm) の方を大文字で表はし、消費資料 (Km) の方を小文字で表はせば次の如くなる。

$$I \quad C+V+M=Pm$$

$$II \quad c+v+m=Km$$

資本制生産は、商品生産であり、従つて分業生産であるから、凡百の生産物の生産は凡百の産業部門に分かれる。いま生産物のうちで生産手段 (原料機械等) に属する物を生産する産業諸部門を一括して第一部門と名づけ、消費資料に属する物を生産する諸部門を第二部門と呼ぶことにするならば、マルクスは即ち此の第一部門の生産と第二部門の生産との間に、或る平衡が保たれねばならぬといふのである。何故であるか？ 例へば第一部門の産業たる製鐵業に於ける労働者と資本家とが、それ／＼の所得たる賃銀 (V) と、利潤即ち剩餘價值 (M) とを生活資料に換えようとしても、自己の産業の生産物たる鐵をはじめ、自餘の第一部門諸産業の生産物たる各種の原料機械の類は、何づれも其の目的に役立たぬ物ばかりであつて、是非とも第二部門産業の生産物にそれを求めねばならない。反對に、消費資料を生産する産業例へば製靴事業の資本家は、所要の原料や機械は之れを第一部門産業に求むるより外はない。

いま、此の種の依存關係乃至は交換關係を、前掲の方式に就いて單に詳しく調べて見よう。第一部門で生産される價值の總量を表はす所の $C+V+M$ は、之れを生産物として見れば悉く生産手段 (Pm) であるが、之れを貨幣價值として見れば、M は資本家の所得、V は労働者の所得もしくは資本家の可變資本、C は資本家の不變資本である。V と M 即ち $(V+M)$ なる貨幣價值を與へて買ひ取る所の生産物は、いま言ふ通り、第二部門から供給される。が、C の方は、各資本家が不變資本として放下し回收する部分の價值であるから、之を以て買取られる各種の生産物はみな生産手段 (原料機械等) であつて第一部門から供給される。だから、此の部分に就ては、第一部門に属する各資本家は同じ部門の他の資本家から所要の生産物の供給を受ける。言ひ換へれば彼等相互間の取引で足るのである。一方、第二部門の $c+v+m$ は、之れを生産物として見ればすべて消費資料 (Km) である。従て、貨幣價值としての $v+m$ (労働者及び資本家の所得) を以て買ひ取られる生産物は、同部門内の資本家等が供給する。が、しかし、 c (不變資本) の部分に就ては、所要の生産物を第一部門資本家の供給に俟たねばならぬこと既述の通りである。

すると、二群に大別された兩生産部門間の交換關係は、 $C+M$ と、 c との關係であることが知れる。茲で調べてゐるのは『單なる複生産』の場合であつて、在來資本の更新が行はれるだけで何等新資本の増投がない。資本家によつて收得される剩餘價值は、少しも資本化されずに、總て彼等の

個人的消費に充てられるのである。然る時は、第一部門が第二部門に對して有つ需要は、丁度 $V+M$ 額の價値になり、第二部門の第一部門に對する需要は正に c 額の價値になる。従つてもし、第一部門が第二部門に供給すべく生産する生産手段の部分が丁度 c の價値のものであると同時に、第二部門が第一部門に供給すべく生産する消費資料が丁度 $V+M$ の價値のものであるならば、兩部門間の取引は少しの過不足もなく、完全にバランスが取れる。即ち、價値相から見ても品目相から見ても

$$c = V + M$$

である時にのみ、生産手段を生産する産業部門と、消費資料を生産する産業部門との間の生産の平衡が得られる事になる。そして、 $c = V + M$ なる平衡は、同時に他の二種の平衡を意味するものである。何故といふに、 $c + V + M = P_m$ なる時に $c = V + M$ ならば、 $c + c = P_m$ である。即ち生産手段を生産する第一部門の生産物全體が、價値に於ても品目に於ても、第一部門並びに第二部門の要する不變資本全體と一致する。又た、 $c + v + m = K_m$ なる時に、 $c = V + M$ ならば、 $V + M + v + m = K_m$ である。即ち、消費資料を生産する第二部門の生産物全體が、價値に於ても品目に於ても、第一部門並びに第二部門の資本家及び労働者の個人的消費を代表する所の可變資本及び剩餘價値全體と一致する。即ち、これらの平衡が得られる時にのみ、社會的生產全體の新陳代謝が故障なく續行され得ることになる。これがマルクスの解答であつた。

いま、數字を用ひて此の關係を示せば、 $c = V + M$ である爲には、例へば次の如くでなければならぬ。

$$I \quad 4000C + 1000V + 1000M = 6000P_m$$

$$II \quad 2000c + 500v + 500m = 3000K_m$$

$$\text{即ち} \dots 2000c = 1000V + 000M$$

$$4000C + 2000c = 6000P_m$$

$$1000V + 1000M + 500v + 500m = 3000K_m$$

ではあるが、此のマルクスの解答を裏に返へして讀み得る者は、生産の意識的統制を缺き階級對立に基礎を置く資本主義社會に於いては此の種の平衡によつての故障なき新陳代謝が如何に困難なるかを直ちに看取するであらう。しかも、右の解答は、實に、より遙かに多くの困難を含むところの擴張復生産過程を調べる爲めの準備階段に過ぎないことは、私が既に指摘して置いた通りである。

(3) 資本の擴張復生産の條件

然らば、擴張復生産が故障なく行はれ行く爲めの條件はどうか？

擴張復生産は、剩餘價値の増殖を含む復生産過程である。資本主義的生産の「直接の目的」と「強制的な動機」とを體現する過程である。が、此の過程もまたもちろん、或る平衡に制約され、該平衡の範圍内に於てのみ可能である。此の平衡を得る爲めの條件の研究に於て、先づ、完全なる平衡の爲めの條件を見出すことは、同時に、平衡獲得を困難ならしめる條件を最も明確にする所以である。そしてそれはやがて、かく肯定相と否定相とを同時に含むところの一過程の辨證法的發展に關する理論を、その辨證法的歸結に導びく爲めの必要準備でもある。ところで、此の完全なる平衡の爲めの條件が、肯定相に就ても否定相に就いても、資本主義的發展の最根本的、最本質的な條件を示すものであるが爲めには、平衡條件の考察は最も純粹な、最も本來的な姿に於ての資本主義社會に就てなさねばならぬ。そこでマルクスは、いつも乍らの方法に従つて、資本主義社會の「機構の内部の働きを隠すところの一切の現象を暫く度外視する」爲めに、次ぎの假定を設ける。即ち、問題の擴張復生産の行はれる資本主義社會は、産業資本家階級と賃銀労働者階級との二者のみから成り、他の資本主義社會及び非資本主義的社會との交易は全く無く、商品の價格は常にその價値と一致し、流通手段（貨幣）としては金のみが流通するものと假定する。

單なる復生産に於ては、在來資本の更新が繰返へされるだけである。それにあつての平衡は、 $C = V + M$ に條件づけられることを吾々は見た。此の條件が充たされねばならぬことは、擴張復生

産に於ても全く同様である。何故といふに、在來資本の更新、新陳代謝の必要は、擴張復生産における一要件だからである。が、しかし、擴張復生産は、新陳代謝の過程であると同時に又た生長發展の過程でなければならぬ。そして後者の過程は即ち新資本増投の過程である。で、擴張復生産が故障なく行はれゆく爲めには、更新過程に於ける平衡と併せて、増投過程に於ける平衡が獲得されねばならぬ。二つの平衡が、二つながら完全に得られる時に初めて、生産有機體全體としての完全なる平衡が得られる。その時に初めて、單なる復生産に於けると同じく、一方には社會全體の不変資本と、生産される生産手段全體との間の價値上及び品目上の一致があり、他方には生産される消費資料全體と資本家階級及び労働者階級の所得全體との間に於ける同様な一致があるのである。擴張復生産に於ける平衡は一段と困難であり、特に増投過程が加はるが故に困難である。蓋し、それは資本制生産の膨脹的進行に於ける平衡のことだからである。比較的短期の現象としては、生産の擴張も、剩餘價値の増加も、必ずしも資本の増投によらずして生じ得る。それは大いに注意すべき點であるが、しかし、長期をとつて觀察すれば、剩餘價値の増殖、生産の膨脹は、常にヨリ多くの資本を要求する。此の追加部分の資本は、わが純粹なる、最抽象的なる資本主義社會に於ては、労働者階級によりて生産せられ資本家階級によつて收得される所の、剩餘價値の一部が、資本化される時にのみ生ずる。言ひかへれば、剩餘價値の全部が消費資料に換えられて資本家の個人的消費

に奉仕する代りに、その一部分が資本に繰り入れられて労働力及び生産手段の購入に充てられること——これが擴張複生産にとつての一先要条件である。そこで、 M_0 はいまや二つに分かれ、その資本化される方の部分は、更に、不變資本化される部分と、可變資本化される部分とに分かれねばならぬ。剩餘價值を三分し、資本家の消費分を M_1 、不變資本化分を M_2 、可變資本化分を M_3 で表はす時は、第一部門及び第二部門の生産物の價值構成はそれぞれ次ぎのやうに書きかへられる。

$$I. (C+V+M_k)+(M_0+M_1)=P_m$$

$$II. (c+v+m_k)+(mc+mv)=K_m$$

右の二式に於いて、前の括弧で括られた三項は、蓄積年度毎に更新される部分に當り、後の括弧で括られた二項は蓄積年度毎に増投される部分に當る。更新される部分、即ち

$$I. C+V+M_k$$

$$II. c+v+m_k$$

に就いて言へば、その平衡の爲の條件は、單なる複生産の場合と全く同様に、

$$c=V+M_k$$

でなければならぬことは、既に見た所によつて明かであらう、問題は新たに資本化される部分、即ち、

$$I. M_0+M_1$$

$$II. mc+mv$$

の方にある。ところで、 M_0 は、その品目相に於ては生産手段群に屬する凡百の商品から成り、價值としては第一部門の各資本家に依て不變資本化される部分に該當する。従て此の部分の資本化は、總ての生産手段を生産する第一部門の資本家の相互の取引によつて實現される點に於て、單なる複生産に於けるCの場合と異なる所がない。従て又た之に就いての平衡は擴張の爲めに要求される所の各種の生産手段の生産と、之等の生産手段に放下さるべき各資本家の不變資本とが、價值に於て品目に於て一致する時に得られること前の場合と同様である。次に、 M_2 、即ち第一部門に於て可變資本化される部分は、品目相に於ては種々なる生産手段であるが、價值としては、新たに追加する労働力に放下される所のものである。此の價值分を賃銀として受取る新來の第一部門労働者等は、しかし、所要の消費資料は之れを第二部門の供給に俟たねばならぬ。即ち、擴張複生産に於ける M_3 の増投は、單なる複生産に於ける $V+M_k$ の更新と全く同様なる意味に於て第二部門に依存することが知れる。一方、第二部門の M_0 は、生産物としてはみな消費資料であるが、價值として は新たに不變資本化される部分に當り、生産手段に放下されるのであるから、 m_0 の増投は、單なる複生産に於ける。の更新と全く同様の意味に於て、第一部門に依存する。最後に M_1 は價值

としては可變資本の追加分に當り、第二部門労働者の手に渡つた上で同部門の資本家等が供給する生活資料にかへられるのであるが、品目相に於ての Mv は消費資料であるが故に、それが労働者の消費用に適する形のものでさへあれば過不足なく處分され得る譯である。

すると、新たに資本化される部分に關して、第一部門の生産と、第二部門の生産との間に平衡を得る爲めの條件は、

$$Mv = mc$$

であることがわかる。即ち Mv と mc との價值上及び品目上的一致である。此の條件が充たされる

時にはじめて擴張複生産は故障なく進行することが出来るのである。いま、

$$I. (C+V+Mk) + (Mc+Mv) = Pm$$

$$II. (c+v+mk) + (mc+mv) = Km$$

なる時に、 $c = V + Mk$ であり、且つ $mc = Mv$ であるならば、一方に於て、

$$C + c + Mc + mc = Pm$$

なると同時に、他方に於ては、

$$V + Mk + v + mk + Mv + mv = Km$$

でなくてはならぬ。此の場合には即ち、一方では、第一部門に於て生産される生産手段全體と、兩部

門に於て更新され且つ追加される不變資本全體とが一致し、他方では、第二部門で生産される消費資料全體と、兩部門の資本家と在來及び新來の労働者の所得全體とが完全に一致して過不足がない。そして資本家は剩餘價值の資本化を行つて所要の生産手段と労働力を増加し、生産の規模を擴張する。その結果は、生産される價值全體の増加となつて表はれ、他の事情が同一ならば、剩餘價值も従つて増加し、かくてこそ剩餘價值の増殖は可能である。

いま、右に述べたやうな平衡が得られた場合の諸關係を數字に當てはめて表はすなら、例へば次のやうになる。(左表に於ては、第一部門の資本家等は、剩餘價值の半額を資本化し、資本化されるものの中の五分の四を不變資本に、他を可變資本に充てることになつてゐる。第二部門に於ては、剩餘價值の五分の一が資本化され、更にその内の三分の二が不變資本に、他は可變資本に充てられてゐる。)

$$\begin{array}{l} \text{原年度} \\ \text{I. } 4000C + 1000V + 1000M = 6000Pm \\ \text{II. } 1500c + 750v + 750m = 3000Pm \end{array} \quad \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{I.} \\ \text{II.} \end{array}} \right\} \text{計} = 9000$$

$$\begin{array}{l} \text{次年度} \\ \text{I. } 4400C + 1100V + 1100M = 6600Pm \\ \text{II. } 1600c + 800v + 800m = 3200Km \end{array} \quad \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{I.} \\ \text{II.} \end{array}} \right\} \text{計} = 9800$$

$$\begin{array}{l} \text{三年度} \\ \text{I. } 4840C + 1210V + 1210M = 7260Pm \\ \text{II. } 1700c + 880v + 880m = 3460Km \end{array} \quad \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{I.} \\ \text{II.} \end{array}} \right\} \text{計} = 10720$$

以上に述ぶる所は、資本主義社會が、その社會的生産の物質的要素の新陳代謝(更新)と生長發展(擴張)とを、些の故障もなく、即ち完全なる平衡を得て行ひ得る條件を、數學的に表出したものである。此の條件を充たすことの困難は、既に幾度か示唆して置いた。そして吾々は今やそれを明確に見取り得る地位に置かれてゐるのである。

以上の如き擴張復生産——資本蓄積——の理論的考察は、資本主義社會の有機體性に即し、特にその發展生長を可能ならしめる條件の考察といふ形をとつてゐるとはいへ、同時にそれは當の發展の過程に生ずる困難即ち均衡破壊の不可避性を示すことにより、直ちに彼れの恐慌の理論を準備するものである。第二卷は、蓄積の理論を以て終つてゐるとは言へ、それが當然に恐慌理論へと發展すべきものであつたことは、「剩餘價值學說史」の體系を一瞥する者の直ちに察知し得る所である。恐慌の理論にあつては、矛盾の相が昂揚される。それは資本主義の内在矛盾展開の理論である。

(4) 擴張復生産の困難とマルクス

マルクスは、彼れの蓄積の理論に於て、先づ平衡の條件を求めてゐる。そして、その條件を數學的に表出した。が、彼れは詳しい説明によつてそれを補ひながら、機會ある毎に、該條件の充たざる場合即ち均衡破壊の場合を暗示することを怠らなかつたのである。わけても彼れは、擴張復生産

に於ける剩餘價值の資本化の前提である所の剩餘價值の實現(貨幣化)に際して種々なる困難の起るべき種々なる場合を理論的に想定し、且つそれ等が資本主義組織の内部に於て如何に克服され得るかを説明してゐる。ローザ・ルクセンブルクが議論の出発點として取り上げたのは、即ち是等の困難であつた。ルクセンブルクは、その困難を絶對的なものとなし、純粹なる資本主義社會の内部に於ける資本蓄積の不可能を結論した。そして資本主義的蓄積の必須要件として、非資本主義的外圍の存在及び之れとの交易の必要を主張するに到つたものである。我が河上博士も亦たその理論を容れられた。之れに對して私は、マルクスが想定せる剩餘價值實現上の困難は、たかだか、相對的部分的なる困難であつて、資本蓄積の本來的絶對的不可能を意味し得ない事を論證するであらう。そして、かく解する時のみ、マルクスの蓄積理論がマルキシズムの全體系に於て占むる位置を正しく把握し得るであらう。

三、ローザ・ルクセンブルク及び河上博士の

資本蓄積不可能論と其の誤謬

(1) 剩餘生産物は如何にして買ひ取られるか

ローザ・ルクセンブルクは斯う書いてゐる。

「蓄積の目的の爲には、剰餘價値の一部分は資本家によつて消費されず、生産の擴張の爲めに振向けられる。ところで、此の資本家自身が消費せざる部分は、労働者が之れを消費することは尙更ら出来ないものである。何故と言つて、一定の時に於ける労働者の消費は、其時に於ける可變資本の總額以上に出づることは出来ないからである。』そこで問題は、此の、資本家も消費せず、労働者も消費し得ざるところの剰餘價値の部分、即ち正に蓄積されねばならぬ價値の部分我代表する餘分の生産物は、その買手を何處に見出すか、である。これに對する需要は何處にあり、何人がそれを消費するのか？ 乃至は、マルクスが表現したやうに、蓄積される剰餘價値に對して支拂ふ爲の貨幣は何處から来るか？」¹⁾

すると、ローザ・ルクセンブルクが提起した問題は二つに分けて考へることが出来る。その一は、「剰餘生産物を買ひ取る貨幣は何處から来るか」であり、その二は、「剰餘生産物に對する支拂能力ある需要は如何にして増加するか」である。ローザ自身も亦た問題を區別し、前者は寧ろ流通に關するテクニカルな問題であるとし、眞の問題は後者にあるとなしてゐる。が、しかし、議論の順序から言ふと、彼女は先づ貨幣の出所を論じ、此の問題はマルクスが解決せずに残した問題であると結論し、それを根據として後の論點に移つて行く。で私は先づ第一の問題を調べ、それが既にマ

1) 「資本の蓄積」 97頁。

ルクスに依つて解決されてゐることを示すであらう。

ローザ・ルクセンブルクに依れば、資本化される剰餘生産物は、資本家自身も労働者も之れを買ひ取ることが出来ない。謂ふ所の剰餘生産物の内で資本家によつて買ひ取られる部分は、表式に於ける M_0 と M_1 とであつて、前者は第一部門の資本家によつて、後者は第二部門の資本家によつて買ひ取られることになつて居る。労働者の買ひ取る部分は M_0 と M_1 とであつて、前者は第一部門の労働者が、後者は第二部門の労働者が買ひ取ることになつてゐる。いま、資本家の場合を見るに、彼等の或者——例へば A, A', A'' 等が、自己の生産擴張に要する新らたなる生産手段を、他の資本家——例へば B, B', B'' 等から買取り得る爲めには、 A 等自身が先づ自己の剰餘生産物を賣り、代金として受取つた貨幣を、 B 等に支拂ふより外はない。ところで、 A 等が賣らうとしても、彼等の剰餘生産物を買取る者が矢張り他の資本家即ち B, B', B'' 等であるといふならば、 B 等も亦た先づ自己の剰餘生産物を他の資本家に賣つて貨幣にかへて居なければ買取り得ないのだから、そして此の場合の他の資本家とは正に賣らうとしてゐる A 等に外ならぬのだから、問題は到底解決され様がない。従つて、資本家等が相互間の取引によつて剰餘價値を貨幣化し且つ所要の生産手段を買つて生産を擴張するといふこと、——即ち資本蓄積を行ふといふことは、絶対に不可能である。これが、ローザ・ルクセンブルクの一論點である。

次に、労働者が資本家からその剰餘生産物を買取る場合を見る。表式に於ける M_3 と M_4 とは、生産物としては労働者用の消費資料で、後者は第二部門の労働者が、前者は第一部門の労働者が買取る筈のものである。又た、 M_4 は品目相に於ては生産手段であつて、第二部門の資本家によつて買取るべきものではあるが、彼等がそれを買取り得るのには先づ自己の剰餘生産物 M_3 を第一部門労働者に賣つて以てそれを貨幣化して居らねばならぬ、といふ關係になつてゐる。即ち、 M_4 の貨幣化も亦た、間接ではあるが結局労働者の購買力に依存する。で、これらはみな、労働者に賣ることによつて資本家がその剰餘生産物を貨幣化さねばならぬ場合である。だが、労働者はそれを買ひ得るであらうか？ 此の場合、資本家が賣附けようとしてゐる相手方の労働者なるものは、皆な新たに追加される労働者である。彼等は無一文なるが故にこそ今や賃銀労働者たらうとしてゐる者で、所要の購買力は、資本家から賃銀を貰はぬ限りゼロである。そこで、唯一つの方法が残る。資本家が剰餘生産物を労働者に買はせる爲めには、それを貨幣化するに先だつて賃銀を渡すこと、これである。が、その賃銀となる貨幣を、資本家は何處から出すといふのか？ それは何處からも出る筈はない。かくて、いづれの點から見ても、それが純粹の資本主義社會である限り、資本家は自己及び自己の雇入れる労働者が剰餘生産物を買取るのに必要な貨幣を得ることは不可能であり、従つて生産の擴張、資本の蓄積も亦た、本來的に不可能でなければならぬ。

之れを要するに、問題は剰餘生産物を買取るべき貨幣の出所に關する。では、マルクス自身は、此の問題を問題としなかつたのであるか？ 剰餘價值實現上の困難を看過したのであるか？ それ所ではない、彼れは、此の問題——即ち剰餘生産物の實現に當つて流通行程と關聯して起り得る困難を理論的に想定し、あらゆる一時逃れの解決を排斥した上で、結局、斯ういふ解決を與へてゐる。凡そ資本家等が相互の剰餘生産物を貨幣化せんとする場合には、彼等の一部の者は、自己の剰餘價值を實現する前に先づ他の資本家なり労働者なりに貨幣を渡す必要のあることは拒めない。が、此の前拂ひに要する貨幣は、資本家等が相應に多額の固定資本を有する限り、常に彼等の手に貯へられてゐる。何故といふに、固定資本は事實上長期の後に更新されるもので、年々それを更新するものとして計上されてある價值分(C及びDの一部)は、實は、總てが各年内に生産手段に轉化されるのではなく、其の一部分は謂ゆる償却基金として貨幣態で積立てられてゐる。資本家の前拂ひに役立つのは即ち此の貨幣である。單なる複生産の場合には、それは資本家等をして各々其の剰餘價值を實現して以て個人的消費の爲めの消費資料を購入せしむるに役立つた。『同じ貨幣が茲にもまた現はれるのであるが、前とは違つた職能を以て現はれる。A等やB等は、(今や、)彼等の剰餘生産物をば追加資本たるべきものに轉化せんが爲めに代る代る此の貨幣を供給し、そして新たに形成された貨幣態資本をば代る代る流通界に投じて流通手段たらしめるのである。』²⁾ 尙ほ、この固定

2) 「資本論」第二卷 476頁。

資本更新積立金が蓄積行程に於いて演ずる役割に就ては、彼れの『剰餘價值學說史』第二卷第二分冊二四六—二四八頁に最も明快に述べてある。

『資本の蓄積』の著者は、然し乍ら、マルクスの此の解決を解決と見ないのである。そして唯だ簡單に斯う書いてゐる。『茲で吾々はもう一度單純複生産に逆戻りしてゐる。資本家等Aと資本家等Bとが、時々、彼等の不變(固定)資本を更新せんが爲めに次第に貨幣の貯へを積立て、行き、かくして互に其の生産物の實現を助けるといふのは、全く正しい。が、しかし、此の積立てられる金は天から降らない。それは、段々に生産物の中に移入されて行く所の、固定資本の價值の、次第く／＼に、より落ちた沈澱物であつて、固定資本の價值は、生産物の賣却と共に少額づゝ實現されるのである。かくては、此の積立金は只だ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて、それを超えて追加部分の不變資本の購入に用立てることは不可能である。』³⁾

河上博士も亦た明かにマルクスの解決に満足されざるものである。博士は、ローザ・ルクセンブルクと略々同一の論據から、剩餘生産物實現の不可能を説き、之れを第二部門の生産物に就いて見れば、 mc 分と mv 分とが必然に『賣れ残る』とされる。此の部分を前掲の數式に當嵌めれば、一五〇單位に當る。『…之が賣れないのである。消費資料のうち是れだけが必然に賣られずして残るのである。勿論この一五〇單位の消費資料は、次年度に於て兩部門の生産規模が擴張せられ、從て之

3) 「資本の蓄積」100—101頁。

に使用する労働者數を増すがために…(彼等の)生活資料に充てらるゝ筈なのであるが、今吾々が問題としてゐるのは資本主義の社會で(あるから)、…それは必ず一旦貨幣によつて買はれなければならぬ。しかし労働者階級が一九〇〇單位(補註、 $1100V+800C$)の購買力を有し得るのは、資本家の剩餘價值が既に實現化(貨幣化)された結果として生産擴張の行はるべき次年度のこと』である。『そこで此の一五〇單位の消費資料を如何にして賣るべきかといふことが、解決すべからざる問題として残る。さうして此の到底解決すべからざる問題が恰もマルクスにより解決されざるがまゝに残されてゐるのである。』⁴⁾云々

(2) 高田保馬博士は河上博士を批判し得たか?

右に就いては、吾々は既に高田保馬博士の批評を聞くことが出來た。博士は曰ふ、『河上博士の此の主張は少くも私にとりては極めて解し難きもの』であつて、『與へられた事情の下にありて尙ほ資本家が擴張複生産の道を進み得る可能はいくらも存在する様に思はれる。』といふのは、問題の『一五〇單位は究局賣れ残るものではない。やがて労働者によりて買取られ得ることが十分に見込まれ得る。従ひてそれは需要を有し得ざるものに非ず、たゞ現在の需要を見出し得ざる丈けの事である。此際、其近き賣行の見込まれ得る以上、資本家は其の賣行くまで成行に任せて次の生産—

4) 「社會組織と社會革命」177—179頁。

擴張復生産——に取りかゝり得ないものであるか。」そこで博士は、博士の謂ゆる成行きに任せて賣行かせる方法として、先づ第一に、固定資本更新用の積立金に言及し、「これが擴張復生産の爲に利用せられ得ないか、一五〇單位の賣らるゝまで立替へ得られないか、所謂 *Schatzbildung* の議論は此際必ずしも棄て去るべきものではあるまい。」が、「しかしこれは私の立場から言へばほんの附隨的のこと、顧みられざるも妨げぬ」といふ意見である。第二に、博士は、信用の利用し得べきをあげ、第三には、「よし以上の道行を離れて考へても、賣行の見込確實なる一五〇單位は商人により買取られないか。」といつて商業資本を取入れ、そして最後に博士は、斯う思はれたのである。「所謂次年度に於ける可變資本及び不變資本の總體が投下せられ終るまでには既に一五〇單位が賣られてゐることを要する。然れどもこれ等の資本は大抵の生産業にありて、すべて生産年度の當初にすべて一齊に投下せらるゝを要しないと思ふ。……一五〇單位は年度の初めに賣残つてゐても、一三月乃至五六月の間……に換貨せられ資本としての役目を營めば、なほそれで擴張復生産は都合よく行はれる譯である。」¹⁾云々

尙ほ博士は附言して、以上の諸點は「極めて平凡のものであるけれども……それが平凡であるだけに多くの人々によりて直ちに考附かるゝ所である」と述べられたのは、博士の謙遜であるかどうかは別として、私も略々同感なるものである。先づ博士の最後の論點を見る。「一五〇單位は年度

1) 「改造」大正十三年十二月號所載「剩餘價格第三論」102—104頁。

の初めに賣残つてゐても」とあるのはどうしたものか？ 争點は、正に、賣れるか、賣れ残るかにあるのではなかつたか？「賣れ残つても」後で賣れるといふのであるが、年度の初めには常態として賣れ残るといふのか？ 賣れ残るべき理由、本質的な理由を認むるといふのか？ そして、「一三月乃至五六月の間」に貨幣に換へられる時、其の貨幣は何處から來るといふのか？ 想ふに、博士は、商人の仲介（第三論點）なり、信用の利用（第二論點）なりによつて、賣れ残らぬとされるのであらう。が、此の「多くの人々によつて直に考へ附かるゝ」であらう所の、信用や、商業資本こそは、正に其の理由からしてマルクスによつて暫くのみひだ度外視されてゐるものであつた。ルールに違つたゲームは、無効の宣告を受けねばならぬ。が、只だそれだけではない。その種の第二次的、派生的な現象を、考へ附くがまゝに譯もなく取入れることは、資本主義社會の現象を、其の矛盾相及び調和相に於て、本來的本質的に究める所以でなく、従て、或は在るかも知れぬ剩餘價值實現上の眞困難を見逃してしまふ所以でなければならぬ。マルクスは、あらゆる一時遁がれの解決を恐れたのであつた。信用なり、商人なりの存在すること自體が、問題の困難の實在することに起因しないと誰れが言へるであらうか？ 實にそれらは、そこに矛盾が實在するが故にこそ、それを克服する手段として發展し出でたものではなかつたか？ 博士が、博士の論點を自ら平凡なりとされたのに私が同感であるといふのは、此の意味である。が、また、總ての眞理はさして奇抜なもので

ないことも確かである。茲での理論的究明に用ひられてゐる正しき方法の許す範囲内に於て、(ゲイム)のルールに適つた範囲内に於て、唯一の正當な解決の鍵である所の固定資本積立基金があることにも、博士は確かに氣附かれてゐる。が、鷹揚な博士は、氣附くや否やそれを「ほんの附隨的なこと」だとし、「顧みられざるも妨げぬ」と揚言されたのであつた。そこで、いよ／＼私は問はずに居られない。年度の初めに賣れ残つたものを『成行きに任せて賣行かせ』ようといふ資本家等は、二三月から五六月時分のだん／＼陽氣のいゝ頃に、そも／＼何者の懐から金を引出さうとするのか、と。

(3) マルクスが與へた解決

もと／＼マルクスが提起した問題なのであるから、ローザ・ルクセンブルクも河上博士もまた高田博士も、マルクス自身が用ひた鍵に依りさへすれば間違ひなかつた筈のものである。『剰餘價値學說史』に於いてマルクスが、かの固定資本積立金を『蓄積用基金』(Akkumulationsfond)と呼んでゐるのを見ただけでも、彼れが三氏の如くそれを輕視してゐなかつた事が知れよう。既に擴張復生産の問題において固定資本の存在を認むる以上、固定資本積立金の存在は當然に之れを認めねばならぬ。此の基金が、蓄積行程に於いて剰餘生産物の實現に用立つか否かの問題にとつては、それが

「天から降つた」ものであるか、「次第／＼にした、いゝ落ちた沈澱物」であるかは敢て問はないのである。問ふ所は、その發生史ではなくて、現在に於て營み得る機能である。(一)所要の機能を營む爲には、それが貨幣態をとつて居り、そして其の價値が一定の大さに達して居ねばならぬこと勿論である。ところで、いま表式の假定の範囲内で言へば、第一部門の不變資本總額四〇〇〇單位の假りに半額を固定資本と見、更にその半額だけの固定資本分が年々實際に更新されると見ても、一〇〇〇單位の價値は貨幣態で積立てられてゐることになる。一方、追加される不變資本の總額は僅かに四〇〇〇單位に過ぎない。前者を『前拂ひ』に用立てることに依つて、後者に體現された剰餘價値の總てを實現して尙ほ餘りあるといふ事は、算盤を俟つまでもない明かさである。

ローザが、「たゞ在來の資本の更新に間に合ふ丈けであつて」と言ふのは、何を意味する？ それは、二〇〇〇單位の全部が、實際に更新さるべき固定資本の價値を表はすと見る誤謬を犯したことを意味する。假りに百歩を譲つて其の立場を是認するとしても、謂ふ所の二〇〇〇單位が一年の内或る一瞬間に一舉にして更新されると見做す第二の誤謬を重ねない限り、彼女の立言は不可能であつたであらう。彼女の説く通り、『固定資本の價値』が生産物の賣却と共に少額づゝ實現されるのと同じやうに、固定資本の更新も亦た一舉に行はれずして全體の内の一部づゝが個々の資本家に依て逐次的になされるのである。

固定資本に限つたことではない。すべての更新と貨幣化とが、部分的逐次的にのみ行はれる。擴張復生産の故障なく行はれる爲めの條件、完全なる平衡の條件の探究、——既にしばしば指摘した二重の含意ある其の探究の爲に、種々なる Magnitudes を單純な數學的考察に附してゐるあひだは、其の最抽象的な階段にあるあひだは、流通行程は正當に度外視されてゐるのであつて、從て、どれもこれも只だの *Mass* と見てをつて差支ない。ローザの謂はゆる *Warenshei* の考なども許される。

が、しかし、一度その階段から進んで問題を一段と具體化し、價値の貨幣化の過程に觸れた時から、もはや流通行程は之れを其の本來の姿、即ち、其の逐次的部分的な各節を有つ姿に於て眺めるより外はないのである。それがまた、マルクス自身が、正當に、取る所の態度でもあつた。であるから、問題の固定資本の場合にしても、假りにその總てが年々更新されると見ても、その年度の最後の日に更新を行ふ資本家は、『生産物の賣却と共に少額づゝ實現される』ところの其の價値を十二ヶ月間は積立てねばならぬ。或は十ヶ月、或は八ヶ月等、長短は種々あつても、此種の基金が、全體としても比較的僅少な(四〇〇單位の)追加不變資本の購入に用立たぬと論ずるのは、詭辯としても決して巧みなものとは云へない。加ふるに、在來の固定資本の更新が小刻みに順次になされると同じく、新たに添加される不變資本の購入もまた部分的逐次的に行はれる。全體として四〇〇單位の價値を體現する各種、各様、凡百の生産手段が、それらの供給者の手からそれらの需要

者の手に置きかへられるところの、從つて各資本家の剩餘價値の實現と物的要件の更新とを同一過程の兩側面として同時に遂行せしめる所の、双方向的交換を完結する爲めの此の種の商品流通の全行程に於て、所要の流通手段、購買手段として作用すべき貨幣の量は、經濟學の常識によつて、全商品の價値總額即ち四〇〇單位では決してないのである、その三分の一、五分の一、乃至十分の一で足るではないか。假りに四分の一と見れば所要の貨幣は一〇〇單位である。然るに、一ヶ年の内に四〇〇單位の不變資本の價値を回收する資本主義社會に於て、僅か一〇〇單位の貨幣が前拂ひされ得ぬといふのが『資本の蓄積』の著者の主張である！

同じ基金が、追加労働者の雇傭に際しても資本家の『前拂ひ』に用立つことは、マルクスの指摘してゐる通りである。

要するに、ローザ・ルクセンブルクが、困難のないところに困難を見いだすに至つたのは、問題のうちに流通行程を取り入れたが、それを其の正しき姿に於て見ることを拒んだからである。河上博士は、徒らにローザの誤謬を繼承されたに過ぎぬ。

尙ほ、マルクスは、蓄積の進行につれて流通手段(貨幣)の社會的必要量が増加した場合には、その追加部分は何處から來るかを明かにしてゐる、それは言ふ迄もなく、第一部門産業に屬するところの金鑛業が供給するのであるが、斯業の資本家によつてなされる金の供給は、茲では直ちに貨

幣であるから、社會全體から見れば、それが常に前拂ひと同じ作用を營んで剰餘價値の實現を促進するといふことも又た記憶して置いてよからう。

(4) 資本蓄積は生産擴張の爲めの生産擴張か？

ローザ・ルクセンブルクには、いま一つの論點がある。曰く、擴張複生産に於ける年々の生産物の増加部分は、資本家でも労働者でもなき第三者の、支拂能力ある需要を前提として生産さるべきである。後者の需要の増加に應ずべく生産されるものでなければならぬ。さもなければ、謂はゆる擴張複生産なるものは、資本主義的には全く無意味であらう。『……此の剰餘價値の他の部分——蓄積される部分は、何人の爲めに生産されるといふのか？ マルクスの方式によれば、運動は、第一部門即ち生産手段を生産する部門からおこる。此の増加された生産手段を何人が必要とするか？ 方式は答へて、それは第二部門がヨリ多く生活資料を生産し得んが爲めに必要とするのだといふ。然らば、増加された生活資料は何人が之れを必要とするか？ 方式は答へて、それは即ち第一部門である、何故なら第一部門は今やヨリ多くの労働者を雇傭するからだといふ。明らかに、吾々は圓を廻つてゐる。ヨリ多くの労働者を雇ひ得んが爲めといふ其事のみの故にヨリ多くの消費資料を生産し、ヨリ多くの消費資料を生産せんが爲めといふ其事のみの故にヨリ多くの生産手段を生産する』

といふ事は、資本主義的立場からは無意味である』¹⁾ また斯うも言つてゐる、『……何人が此の絶えず増加する剰餘價値を實現するのか？ 方式は答へて、それは資本家自身であり、資本家のみであると。然らば彼等は其の増加する剰餘價値を以て何事を始めるのか？ 方式は答へて、彼等は絶えず益々生産を擴張する爲めにそれを使用するのだといふ。それなら之等の資本家は、生産擴張の爲めの生産擴張狂である。』²⁾ 資本家等が絶えずヨリ多くの機械を製造することが、單にもし、更にヨリ多くの機械を製造せんが爲めに過ぎないとならば、そこに生ずるのは資本蓄積、ではなくて何の目的もない單なる生産手段の増加生産であらう。そしてそれが資本主義生産の眞の特質であり、マルクス説の當然の論理的歸結であると揚言したのは、かの噓ふべきツガン・バラノウスキーである……云々、で、増加する剰餘生産物に對する需要者が資本家(乃至は賃銀労働者)のみであるとすることは、マルクスの資本主義に關する理論一般、特に第三卷の理論と全く相容れない結果になる。そしてそれは、本來第三者(非資本主義的生産者)の需要を考へなければ不可解なる所のマルクスの方式を、皮相的に文字通りに解せんとするが爲に外ならない、——これがローザ・ルクセンブルクの主張である。

がしかし、私は問ふ。マルクスの方式をマルクスが説いた通りに解する事が果して、ツガン・バラノウスキー主義に墮するかどうかは別として、さう解する時には其處に資本の蓄積は無く、資本

1) 前掲書、88頁。

2) 同上、159頁。

主義的に意味をなさない生産があるのみだといふのは何故であるか？ そこに生ずる生産手段の増加生産は、何の目的もないものになるとは何故か？ ローズは言ふ、「資本が蓄積するといふことは、絶えず増大する商品の山をつくり出す事ではなく、常に益々多くの商品を貨幣資本に轉化することである。」³⁾ 資本の蓄積は即ち貨幣資本の蓄積である。資本主義社會全體としての蓄積にあつては、資本家階級の貨幣資本が全體としての増加を來たさねばならぬ。「新たに増加した剰餘價值は、新たに増加した貨幣資本に於て實現されるを要する。」⁴⁾ しかるに、資本家のみで相互の剰餘價值を實現するに於いては、資本家階級全體としての貨幣資本は、實現の後に於いても實現前の總額以上に**出づること**は出來ない。言ひ換へれば、蓄積、即ち貨幣資本の蓄積は全く不可能である。例へば「資本家Aはその商品を資本家Bに賣り、Bの貨幣で剰餘價值を收得する。此のBは自己の商品をAに賣り、自身の剰餘價值を貨幣化する爲にAから貨幣を取り戻す。兩人は彼等の商品をCに賣り、その剰餘價值に對してCから貨幣を得る。がしかし、此のCは今度は貨幣を何處から得るのか？ A及びBから。

剰餘價值實現の爲めの貨幣の他の出所はないことになつてゐる。即ち彼等の外に商品の消費者はない事に假定されてゐる。が、此の方法で、A B及びCが新らたなる貨幣資本を殖やすことが出来るであらうか？」⁵⁾——これと同じ議論は河上博士にもある。⁶⁾

- 3) 402頁。
4) 407頁。
5) 406—407頁。
6) 「社會組織と社會革命」100—103頁、その他を見よ。

かくして、ローズ・ルクセンブルク及び河上博士の第二の論點もまた、貨幣の出所の一點に歸着し、問題は再び流行程に戻る。

(5) 第二の誤謬

資本蓄積過程の考察に流行程を取入れるに際して、ローズ・ルクセンブルクが如何なる誤謬を犯してゐたかは、前段に於いて詳しく指摘しておいた。今度の場合には彼女は、剰餘價值が一定時に一舉にして實現されると見てはゐないやうにも思へる。が、實は同種の誤謬を繰返してゐるのである。しかもそれが、今又一つの誤謬、——貸附資本を意味する貨幣資本と、産業資本の一態様としての貨幣資本との混同——と結びついてゐる。

資本家的蓄積は、資本家階級全體の貨幣資本の増加に結果せねばならぬといふのは正しい。一の蓄積年度に於ける貨幣資本全體の量は、常に、前年度に於けるそれよりも増加してゐなければならぬ。かくてこそ初めて資本家的蓄積である。だが、しかし、茲での資本家とは産業資本家である。従つて、謂ふ所の貨幣資本は、貸附資本を意味する貨幣資本でなく、産業資本の一態様としての貨幣資本、即ち産業資本流通の始點及び終點としての貨幣資本である事は言ふまでもない。その意味での貨幣資本の増加とは、産業資本それ自身の増加に外ならない。資本家Aが、資本家Bに機械

を賣り、Bから受取つた貨幣をもつて更にBから鐵を買ふといふ理論的設例に於て、Aの買つたものが、Bに於て増加した所の剰餘生産物であれば、Bの剰餘價值は今や貨幣資本化されたのであつて、剰餘價值即ち放下資本以上の價值を代表する貨幣資本であるが故に正にそれは貨幣資本の増加である。單なる回収によつて貨幣資本化された在來資本分に添加された新貨幣資本だからである。同じことはAに就ても云へる。かくして二人の貨幣資本がそれ／＼に増加し、同様にまた自餘の資本家のそれもみな増加すれば、社會の貨幣資本全體の増加が生ずる。が、産業資本家の資本は、永く貨幣資本形態に止らずして直ちに勞働力及び生産手段に轉化されるのが特徴である。今の設例に於ても、Aの新貨幣資本は鐵に、Bのそれは機械に形をかへてゐる。これこそが資本の増投であり、蓄積である。産業資本そのものゝ増加である。ABC等の取引が完了しても、購買手段たる貨幣の量は増してゐないかも知れぬ。從て全資本家の全産業資本のうちで一定の時に貨幣資本形態をとる部分も亦た増加してゐないかも知れぬ。が、ヨリ多くの價值を體現した商品が流通したのだから、貨幣の回轉速度その他が同一なら、購買手段たる貨幣の量も亦た増加し、從て産業資本の貨幣態部分も又た増加してゐるであらう。そして此の増加部分の貨幣が、金鑛業の資本家によつて供給されることは既述の通りである。

(6) 資本蓄積は可能である

全貨幣資本の増加なきが故に資本家的蓄積がないといふ議論は誤つてゐる。それが誤つてゐるとすれば、その立場からの立言であるところの、茲での蓄積は資本主義的には無意味だといふことも亦た『無意味』にならなければならぬ。マルクスの方式において假定されてゐる諸條件の下においては、生産手段を生産する産業と、消費資料を生産する産業との間に、既述の如き均衡が保たれる限り、純粹なる資本主義社會即ち勞働者と資本家のみ社會内に於て資本蓄積は故障なく進行することが出来る。かくして吾々はマルクスが正しかつたことを見る。

平衡の條件が充たされた場合に生ずる資本の蓄積は、年々放下される不變資本の増加となり、雇傭される勞働者の増加となり、全生産物の増加となり、また剰餘生産物の増加となる。即ち、『剰餘價值の増殖』が行はれるのである。が、マルクスの蓄積の理論及び方式は、此の増殖が如何に多くの困難なる事情に條件づけられてゐるかを示す。ローザ・ルクセンブルクが指摘した剰餘價值實現上の困難もその一つである。『前拂ひ』の爲めに用立てられねばならぬ基金が或は不足するかも知れぬ。追加さるべき貨幣としての金の生産が間に合はぬかも知れぬ。が、しかしその種の困難は理論上資本家的蓄積を『初發の一步から』不可能ならしめる程の絶對的困難ではない。自餘の諸困難と

同様なる部分的相対的困難として作用し、剰餘價値の實現を部分的相対的に妨げるものに過ぎない。資本主義はまた常にこれらの困難の克服に努めて或る程度まで成功し、成巧した限度内に於て——即ち平衡を得た範圍内に於て、資本の蓄積は行はれる。

四、資本主義の發展は如何にして

其の崩壊となるか

(1) 批判を要約す——

然らば、資本の蓄積は、生産部門間の均衡さへが保たれれば、何處までも故障なく進行し、理論上、資本主義は永久に行詰らないことになるか？ 資本家階級は、無産者大衆の購買力が貸銀制度の爲めに如何に限定され低下されておようとも、毫もそれによつて販路の拘束を受けることなく、自由に無限に生産を擴張し、資本を増殖して行けるのであるか？ 言ひ換れば、ツガン・バラノウスキー及び福田博士の資本主義千代に八千代に論は正しいのであるか？ ——全然間違つてゐる。マルクスの擴張復生産の方式は、吾々が屢々指摘した通り、一つの發展體としての資本主義社會の生長發展の爲めの條件を示すものであり、その有機體性を昂揚するものである。物語りはそれで

おしまひたのではない。やつと始まつたばかりだ。資本の蓄積は進行し得るものであり、資本主義社會は發展し得るものである。——それが、マルクスの蓄積論の第一段である。だが、畢竟それは第一段に過ぎない。資本主義社會に固有なる矛盾對立を見究め、此社會を矛盾對立の統一體として把握するマルクスは、今や、資本蓄積の進行、資本主義の發展の過程において、如何にかの内在矛盾が展開するかを示さねばならぬ。發展によつて遂に自身を止揚するところの此の生産有機體に内在的なる矛盾の相の検討に移らねばならぬ。

矛盾の展開を分析究明する前提として先づ發展の爲めの條件を見究めることを志向としてつくられたところの、かの方式にあつては、マルクスの研究方法に従つて當然に、此の研究段階に必要な限りの抽象が施されてゐる。また吾々はしばしば、此の方式があらはしてゐるところの『資本の蓄積を可能ならしむる條件』こそは之れを裏に返せば直ちに『それを困難ならしめる條件』を示すものであることを強調して置いた。そのことは、研究段階が進むにつれ、此の方式においては抽象されてゐる諸要因が必然に考察のうちに入り來る時に、一層明白となる。——曰く、生産の無政府と資本家的競争、曰く、生産力の發展と資本構成の高度化

私有財産制度に根ざす資本家的競争は、資本主義的發展の桿杆であるが故にまた組織に内在する矛盾を展開せしむる樞子である。マルクスが病苦の爲めに完結を見なかつた資本論第二卷第三篇に

展開された限りの蓄積理論は、未だ競争を取入れるまでの段階に進んでゐなかつた。が、剰餘價値學說史におけるそれは直ちに恐慌の理論へと續き、資本蓄積論の理論的連鎖を明示する。

恐慌論にあつては、資本家的競争が重要な役割を演ずる。競争は、生産技術の改良を促し、労働の生産性を大ならしめると共に、資本の有機的構成を高度化し、可變資本——賃銀として支拂はるる資本部分——を相對的に減少せしめる。資本構成の高度化は、一方では、利潤率の低下となつて現はれ、競争的な資本家をして必然に賃銀を壓迫せしめると同時に、『生産擴張の爲めの生産擴張』を餘儀なくさせる。

かくして社會的生産力は、不可避免的に、階級社會の限定された消費力以上に増大する。此の階級對立に根ざす矛盾撞着は、恐慌となつて周期的に爆發する。「過剰」生産物、過剰資本の一部は、恐慌によつて處分され、失はれた均衡が再建される。此の新たなる、ヨリ擴大せる基礎の上に、資本の蓄積は再開され、夫と共に再び失はれゆく均衡は、ヨリ大なる恐慌を準備する。かくて恐慌は、資本主義の發展と共に益々その及ぶ範圍を擴大し、破局的な影響は激甚となる。夫が矛盾の展開の過程である。資本主義の崩壊とは、かゝる内在矛盾展開の或る段階に生起する現象に外ならない。

(2) 批判を要約す——二

福田博士が、マルクスの資本蓄積の理論と方式とに立脚するとされる所の「ツガン・バラノウスキの數字表」——かの資本主義永遠論の根據たる數字表——なるものは、マルクスの理論の曲解に「立脚」するものである。それだけは、河上博士も指摘されてゐる。だが、博士は、その曲解の曲解たる所以が、マルクスの辨證法的方法の没却によつて故意に資本論第三卷の内在矛盾展開論と第二卷の方式との間の有機的連鎖をうち斷つた所にあることは遂に之を悟られない。しかも、此の連鎖たるや、『剰餘價値學說史』第二卷第二分冊におけるマルクス自身の筆により、何人も見違ひ得ざる明瞭さをもつて示されてゐるのである。そこでは、問題の「方式」に關する理論の一環から次環に移り、資本家的競争と資本構成高度化の傾向とが擴張再生産過程の分析のうちに取入れられる否や、生産部門間の均衡のみならずまた社會的生産力と社會的消費力との間の均衡が蓄積の進行と共に必然的に失はれ行く傾向の法則性は、明確比類なきマルクスの分析によつて決定的に論定されてゐる。加ふるに、「ツガンの數字表」にあつては、資本主義的生產社會において生産される一切の生産手段は此の社會が生産有機體である所から必然にみな隱然態の消費資料であるといふ基本的事實までが全く没却されてゐるのである。福田博士にしても、マルクスの蓄積理論が、かくまでマルクスの方法と基本的事實とを無視したる「數字表」に基づいて『バラノウスキの下した推論』において論理上其の當然の歸結を見出すものである」と主張せんと欲するならば、博士は先づマルク

その『剰餘價值學說史』を焼捨てられるがよからう。ブルジョア經濟學者として遂に資本主義の恒久性を盲信すべく運命づけられたツガン及び福田博士は、資本主義社會を對立物の統一として把握する代りに、一方では資本主義的發展における均衡維持を誇張せんが爲めに、生産力と消費力との對立矛盾を抹殺しながら、他方では同じ目的の爲めに、當の均衡を生ぜしめるところの、資本主義社會の生産有機體的性質までも抹殺し、「生産手段の爲めにのみにする生産手段の生産」のお伽噺を創作した。かくして、マルクスが、資本蓄積の理論的發展として、資本論第三卷に、内在矛盾の展開による資本主義の崩壊を説き、まさに論歩を『本道』に進めつゝある時、博士のブルジョア意識はそれをば、「俄かに論歩を間道(一)に踏み入れた」との死と叫ばしめてゐる。

ローザ・ルクセンブルク及び河上博士は、資本主義の内在矛盾を忘れず、その展開による崩壊の必然性を忘れなかつた。だが、資本主義の必然的『行詰り』を、資本蓄積の本來的絶對的不可能に歸した點において三重の誤謬を犯してゐる。

(一) 擴張再生産に於て剰餘生産物を買ひ取るべき貨幣の問題にからまる相對的部分的な困難、——純理論的水準においては認識し得べからざる困難——を、理論上の絶對的困難と誤認した。

(二) 此の誤れる認識は、マルクスの辨證法的方法の凌却に基づくものである。従つて氏等は、資本主義社會の矛盾を見たとはいへ、同時にその社會を、對立物の統一體として把握せざりし點に

おいて、ツガン＝福田博士と同様の誤謬に陥つた。即ち、ローザ・ルクセンブルク＝河上博士が、資本主義社會の内部における資本蓄積の可能を否定し去れる時、此の社會の有機體性と、それ自身の發展性とは見失はれた。かくして、氏等が、資本論第二卷の方式がマルクスの蓄積理論の全連鎖の一環として演ずる特殊の役割を認識し得なかつたのは當然であり、此の方式が直ちに第三卷の内在矛盾展開論を準備してゐることを悟らなかつたのは自然であり、段階的に進展し行く蓄積論の理論的過程において恰も此の方式が現はれてゐるところの特定段階に必要とされる諸假定乃至抽象の下に資本蓄積の可能を認めることが直ちに内在矛盾展開論の否認を意味するかの如く速断しつゝ、不知不識、ツガン＝福田博士の同舟の客として第二卷と第三卷との矛盾(一)を承認し、『剰餘價值學說史』を暗から暗へ葬り去るの不覺を演ずるに至つた。第二卷と第三卷との間に『橋がない』と見たのは、此の「同舟の客」の避目であり、「非資本主義的外圍」から借り來たつて架けたと信じた橋は夢の浮橋に似てゐた。「本物の橋」は夙にマルクスによつて架けられてゐたのである。

(三) 第三の誤謬は、資本主義の『行詰り』に關するものである。生産力と消費力との矛盾は、資本の蓄積を『初發の一步から』不可能ならしめるのではない。反對に、『純粹の資本主義社會』の資本蓄積は可能なるが故にこそ、蓄積の進行と共に、進行によつて、最も純粹な、本質的な矛盾が展開するのである。また展開し得るのである。所與の均衡の成立を起點として開始される擴張再生産

の進行過程において、生産對消費の均衡は必然に失はれ、遂に突如たる生産停止となり、多かれ少なかれ破局的な現象を生ずる。かゝる現象は、産業資本主義—自由競争の時代にあつては、典型的には、周期的な経済恐慌として現はれ、金融資本主義—独占の時代にあつては、必然的にまた帝國主義戦争としても現はれる。此の種の危機は、發展する資本主義の質的變化と共に、それ自身もまた變質し、破局性は激化する。かくしてそれは、重大なる政治的危機の物質的基礎を形成し、他の諸條件と相俟つて遂に資本主義を崩壊せしめる。他の條件のうち就中本質的な者は、階級對立に生ずる極度の緊張化である。資本主義の崩壊は、資本主義的生産關係の×××破却によつて生ずる。資本主義は、朽樹の倒れるやうに、自然的自動的に崩壊するのではない。

資本主義がその内在矛盾の展開によつて崩壊に向ふ過程は、滑かに一直線に機械的に進行する過程ではなく、均衡—膨脹—破綻—均衡の再建—舊倍の膨脹—舊倍の破綻—と續く、^{ズク}の辨證法的過程であること、——そのことの認識の欠除は、ローザ・ルクセンブルク及び河上博士をして、資本主義の「行詰り」の性質に関する最も粗大な誤謬に陥らしめた。

ローザ・ルクセンブルクを祖述して河上博士は言はれる、——純粹の資本主義組織にあつては、資本の擴張復生産は不可能なる結果、「その組織の外圍と一定分量の消費資料の交換をなすといふこと」、このことは、擴張復生産にとつての不可缺條件である。が、資本主義は、交換を通じ、そ

の領外——手工生産や農生産の行はれる領域——を資本主義化して之れを領内に引入れ、領内の擴大につれ、「領外の顧客」を要することの大なるに逆比例して領外の地域は狭まつて行く。かくして「限りなき資本の増殖、限りなき生産の擴張、それを實現し得て、全世界を資本主義の領域内に包含しつくす時、その時、資本主義の發展は極度に達すると同時に、その領外に屬する外被を全く失ふことによつて、資本の復生産は絶對に行詰つてしまふ」のだと。

見よ、此の「行詰り」の過程が、如何に滑らかに、悠々乎と、平和に、直線的機械的に進み、また如何に前途遼遠なるべきかを。

(a) 吾々は、資本蓄積の過程をかやうに把握する者が如何にして恐慌現象を説明し得るかを知らない。この過程は、均衡の欠除即ち恐慌状態に出發する。非資本主義外圍との關係を均衡條件とする此の過程に、恐慌の周期性を見出すことは遂に不可能でなければならぬ。

(b) 此の「行詰り」の理論は、わが没落期資本主義の現實を説明することが出来ない。吾々の眼前の事實として、地球上には尙ほ老大な非資本主義的領域が残存し、領外の顧客はあり餘るほどある。しかるに、世界資本主義の一環としての露西亞資本主義は十年も前に崩壊し、今やそこに社會主義社會の力強き發達が見られる。福田博士の荒唐な資本主義永遠論を捨てる者は、またも事實と矛盾撞着する河上博士の行詰り前途遼遠論を捨はねばならぬのであらうか?!

(c) 最後に、ローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論は、資本主義國が非資本主義的外圍を克服することの必然を示して帝國主義を理論づけようとする。だが、それがまた完全なる失敗である。ローザ・ルクセンブルクの理論における、資本主義國と、半開未開の非資本主義國との必然的關係は、單純なる商品交換のそれに過ぎない。しかるに、帝國主義における同様の關係は、資本輸出による獨占的搾取のそれである。ローザ・ルクセンブルクの理論における非資本主義的外圍の絶對的必要性は、産業資本にとつてのそれである。だが、帝國主義にあつては、非資本主義國の征服は、金融資本の政策である。更にまたローザ・ルクセンブルクの理論は、たかく資本主義國による非資本主義的地域掠奪の必然性を論證し得るに止まり、帝國主義の重要特徴であるところの、資本主義國による資本主義的地域そのもの、争奪の根據を説明することが出来ない。

(3) 結 語

之を要するに、マルクスの蓄積理論の志向と性質とを、それが彼れの學說の全體系のうちに占める位置に即して見究めることをせず、前を承け後に續く理論的連鎖のただの一環を切取つて之を『修正』し、それに『正當なる歸結』といふレッテルを貼りつけたのが、ツガン・バラノウスキー乃至は福田博士の『資本主義は行詰らず』論である。その賣れ行きの如何は知らず、偽物は正に偽

物である。ローザ・ルクセンブルク及び河上博士は、早くもその偽物であることを見抜かれた。が、その一環が全理論的連鎖の如何なる一環であつたかを見究はめる前に、他の一環乃至數環と照合しつゝ、ツガンの修正そのものを修正せんとされたが故に却つてツガンの痕跡が残つて、もはやマルクスのものとは云へぬ蓄積理論が出来上つたのであつた。辨證法的に發展する資本主義は又た辨證法的に行詰らなければならぬ。辨證法的に發展する資本主義は今や、嘗つては自身の發展の動力たりし競争そのものをさへ否定するに至つた。獨占の、金融資本主義の現階段がそれである。發展の桿杆としての競争に代つて、直接、露骨な破壊——戦争——を手段として餘命を繋がんとする窮餘の競争が展開されて來た。競争の舞臺は國際的となり、競争の主役は個々の資本家ではなくて國家權力と同化した獨占的大資本家國となつた。帝國主義の時代がそれである。帝國主義世界戦争以來の資本主義は、ロシアにおける資本主義の崩壊、社會主義の發展を要因とするところの、没落期資本主義の様相を呈し、「永久恐慌」の時代に入り、至るところに階級闘争を極度に尖鋭化する客觀的條件をつくり出してしまつた。資本の蓄積は、階級的政治的闘争を激成することなしにはもはや不可能となつた。帝國主義に關して近頃書かれたものの中で最も纏つた論文であつた『帝國主義と無産階級』¹⁾に於て細川嘉六氏は、一面に於ては河上氏の「行詰り論」を容れ、理論的には非資本主義的外圍の消滅と共に何時かは必然に行詰る筈なのであるが、現實にはそれに先立つて既に行詰つて

1) 大原社會問題研究雜誌

ゐるとなし、行詰りの現はれとしての帝國主義の諸相を説かれてゐる。が、私から見れば、其の謂はゆる「現實の行詰り」こそは、マルクスの内在矛盾展開崩壊論そのもの、理論的歸結を體現するものである。現實を説明し得ずして而も理論と稱せられてゐる不可思議なものを打破する爲めにマルクスほどに力闘したものは餘りなかつたのである。

では資本の蓄積と矛盾の展開は、如何にして、資本主義の崩壊をはらむ帝國主義を必然ならしめるか？ 吾々は、稿を改めて論ずるであらう。

附言。與へられた紙数を思ひの外早く盡してしまつた爲めに、後半の理論を十分に展開し得なかつたことを遺憾とする。尙ほ、"Unter den Banner des Marxismus" の第一及び第二號に、第三インターナショナルの若き理論家フーリンの論文 "Imperialismus und die Akkumulation" (帝國主義と蓄積) が載つてゐる。私は本稿の締切が迫つてから其の事を知り、嘉治隆一氏の厚意によつて同論文を一讀することが出来た。文字通りの卒讀であつたとはいへ、少なからず得る所があつた。まことにブリ、アントな、そして極めて啓發的な論文である。本稿に於て扱つた問題に興味を有たれる諸士の必讀をすゝめたい。(一九二五、一一、三〇)

帝國主義の必然性

本稿は、「資本主義崩壊の理論的根拠」において展開し盡されな
かつた「後半の理論」を展開したものである。前稿を書いてから
本論を書くまでの約一ヶ年ほどのあひだ、私は、下獄その他のた
めに執筆を妨げられてゐた。前稿に對する反駁と見るべきものと
しては、河上博士が述べられた數言があるに過ぎなかつたから、
(河上肇氏著「社會問題研究」第六九冊、三頁)、私は、此の一篇
を特に論争態のものにする必要を認めなかつた。本稿は、もと、帝
國主義の理論と没落の過程」と題して雑誌「社會科學」帝國主義
號に發表したもので、その誤植を訂正し、僅かばかり辭句の改修
を試みた外は、すべて發表當時のものまゝである。

一、問題の範圍

唯物史觀の立場からは、一の國際政治過程としての現代の帝國主義は資本主義經濟の發展の特殊
の歴史的段階の反映でなければならぬ。問題は、それが如何なる段階であり、何がその段階の眞
特質であるかにある。レーニンはこれに答へて、それは金融資本主義の段階であり、自由競争の否
定としての獨占がその眞特質であるとした。そして彼にあつては、更に、帝國主義をその政治的表
現とする此の段階こそは、資本主義の最後の段階に外ならないのである。¹⁾そこで問題は轉じて、金
融資本及び帝國主義を理論づけることによつて果して當の段階の最後性——没落期的性質——を論
證し得るか否かの一點に歸する。

ローザ・ルクセンブルクは、帝國主義を定義して斯う述べてゐる——

『帝國主義は、非資本主義的世界環境 (nichtkapitalistisches Weltmilieu) の未だ押收されざる殘部
に對しての競争戦における資本蓄積の過程の、政治的表現である。』²⁾

資本主義の發展の過程は、資本の蓄積の過程であり、その一定の段階を反映して帝國主義の現象
が生ずる。當の段階の特質は、此の定義によれば疑もなく次ぎの一點に存する。即ち、資本は、自
己を蓄積せんが爲めに、『非資本主義的環境』例へば手工業生産、小農生産の領域)を自己の支配下

1) Lenin, N. Imperialism. chap, X. P. 145 ff., etc.,
(London). Ausgewählte Werke. P. 325 ff (Wien 1925)
2) Rosa Luxemburg. Die Akkumulation des Kapitals S. 361.
(Berlin 1923) 尙ほ、此のローザ・ルクセンブルクの帝國主

に賣らさんとし、競争的に世界の未開半開地域を植民地と化し、今やかゝる競争戦が、その僅少の残部に對して集注されることによつて異常に激進化すに至れること、これである。そしてローザ・ルクセンブルクにあつてもまた、かゝるものとしての帝國主義の段階は、資本主義没落期の近接または開始を意味する。何故かといふに、彼女によれば資本の蓄積は、純粹の資本主義社會即ち資本家と賃銀労働者のみから成り立つ社會においては本來的、絶對的に不可能であり、商品の購買者として非資本主義的生産者を有することが蓄積の必須要件である。従つて世界における斯かる社會層にして今後資本の支配下に賣らし得べき部分が或る程度以下に減少することは、直ちに、資本の蓄積にとつての致命的脅威でなければならぬからである。此の、資本蓄積の本來的絶對的不可能の理論は、ローザ・ルクセンブルクの著作『資本蓄積論』に展開され、『資本論』第二卷第二十一章における蓄積の條件に關するマルクスの分析並びに表式の批判に出發しつゝ、それらと『資本論』第三卷三篇の内在矛盾展開論との間の矛盾の指摘、従つてまたマルクスの若干論旨の否定の上に組み立てられたものである。ローザ・ルクセンブルクの理論の誤謬については、私は既に『資本主義崩壊の理論的根據』と題する以前の論文において、比較的詳細に論證して置いたつもりであるから、此一篇においては、該論文の後半を成すべくして未だ十分に展開されずに残つた部分——即ち資本主義の發展及び没落の過程との關聯において把握されたる帝國主義の理論を、——もちろん此の小篇相

應な極めて輪廓的な仕方ではあるが——一通り展開したいと思ふ。

一、資本蓄積の條件

帝國主義の歴史的必然性、並びにそれと關聯しての資本主義崩壊の必然性は、資本主義生産の發展過程に内在的な諸方則の必然的歸結としてのみ論證されなくてはならぬ。だが、資本主義生産の發展は、それ自身辯證法的な過程であり、矛盾の展開の過程である。マルクスは彼れの研究に於て當然に、その對象たる資本主義生産の存在を、先づ、與へられた事實として受取らねばならなかつた。物の存在の條件が、その構成要素間に成り立つ何等かの平衡である以上、資本主義生産もまた一面には常に、そして先づもつて、その平衡の相に於て把握されねばならぬ。が、マルクスの偉大は、周知の如く、資本主義生産に固有なる矛盾を何人にも増して洞見し得た事にある。彼は言ふ——『資本主義生産の直接に關する所は、使用價值ではなくて、交換價值わけでも剩餘價值の増殖である』。また、『剩餘價值の生産——そして此の剩餘價值の一部分を資本に再轉化すること即ち蓄積は此の剩餘價值の生産の必要缺くべからざる部分をなすのであるが——は、資本主義生産の直接の目的であり、その強制的な動機である』。そして彼は此の事實——搾取の事實の裡にこそ、資本主義生産の最も本來的な矛盾を見出したのであつた。資本主義生産の發展は、資本の蓄積を不可

1) Marx, K. Theorien über den Mehrwert. II., 2. S. 266. (Berlin. 1923)

2) Marx K. Das kapital. III, Kp t 15, S. 225 (HambuRg. 1919)

義の定義に關しては、ブハーリンも詳しく批評してゐる。(Bucharin N., Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals" — Unter dem Banner des Marxismus, Juli 1925. S 275—279.)

3) 『改造』大正十五年一月號。(本書の第一論文)

缺要件とするところの、剰餘價値の生産乃至増殖の過程としてのみ生ずることが出来、謂ふところの内在矛盾の展開は、資本蓄積の方法に固有なる或る客觀的に不可避的な制限の故に生ずる。で、吾々は、内在矛盾を前提し、その展開の法則とその歸結とを明かにせんが爲めに、その爲めに、先づ、平衡の相における資本蓄積の條件を、マルクスに従つて論定するであらう。

問題は次のやうに提起されなくてはならぬ。——資本の蓄積即ち擴張再生産が故障なく行はれ得る爲めの條件は何か？

いま一社會において、 c 量の不變資本と、 v 量の可變資本が放下されてゐて、 m 量の剰餘價値が生産されるとしよう。先づ資本の單純なる再生産が行はれる場合には、再生産される價値の總量は常に $c+v+m$ であり、それ／＼の價値量であらはされる商品の品目も亦た常に同一であらう。例へば、價値量 c に相當する機械及原料の如き種々なる生産手段、價値量 v 及び m に相當する雜多の消費資料、等。だが、既に此の場合に於ても、生産される各種の生産手段及び消費資料は、要求通りの物的形態において、且つ恰度需要あるだけの價値量に於て、生産されるといふことが條件となつてゐる。此の條件を缺く部分があれば、それだけ平衡は破壊され、再生産の過程に故障が生ずる。いま、これら凡百の生産物を生産する凡百の産業部門を大別して、生産手段を生産する部門（第一部門）と、消費資料を生産する部門（第二部門）とに分ち、前者において放下され再生産される

1) 前稿では復生産といふ譯語を用ひたが、本稿以下においては、それを再生産に改めた。

資本及び剰餘價値を、大文字の C 、 V 、及び M で表はし、後者におけるそれらを、小文字の c 、 v 及び m であらはせば、毎年再生産される價値の總量は次ぎの二つの表式に分けて示す事が出来る。

$$I \quad C+V+M$$

$$II \quad c+v+m$$

（茲であらかじめ括弧の中で言つて置くが、マルクスが『資本論』第二巻において右の如き生産手段部門と消費資料部門との二大別を試みたのは特殊の方法的理由がある——彼自身は特にそれを言明してはをらないが。といふのは、間もなく見るであらうやうに、第三巻に扱はれてゐる資本主義生産の矛盾の展開は、それが恐慌の形態をとるにせよ、利潤率遞減の法則としてにせよ、過剰人口遞増の法則としてにせよ、常に、消費資料生産の増加を犠牲として生産手段生産が増大するといふ特殊の不均衡化の基礎の上に生ずるからであり、その過程の分析の前提とし、準備として、右の二大別が絶對的に必要だからである。また、かゝる前提、準備としてのみ意義があるのである。）

此の表式の助けをかりて、兩部門間に存する相互依存的關係を見るに、特に、 c 該當の生産物は、消費資料として、常に V 及び M 該當の需要に適應した價値及び物的形態において生産されることを要すると同時に、 V 及び M 該當の生産物は、生産手段として、常に c 該當の需要に適應した價値量及び物的形態のものでなくてはならないことが知れる。即ち、價値相並びに品目相における二重

の交互的需給一致を意味するところの

$$c = V + M$$

なる方程式で表現し現べき平衡だけは、少くとも兩部門間の相互關係の觀點からは是非とも實現されねばならないところの、資本再生産の條件なのである。

擴大された規模における再生産——それが資本の蓄積である——の場合も、おほよそ右に準ずる。たゞ此の場合には、剰餘價值 M および m は、それぐゞ大ぎの三つの部分に分たれる。

- 一、新たに不變資本に繰入れられる部分—— Mc および mc
- 二、新たに可變資本に繰入れられる部分—— Mv および mv
- 三、資本家の消費用に振向けられる部分—— Mk および mk

(即ち)

$$I \quad C + V + (Mc + Mv + Mk)$$

$$II \quad c + v + (mc + mv + mk)$$

そこで、所要の平衡をあらはす方程式は、従つて

$$c + mc = V + Mv + Mk$$

であらねばならぬ。此の平衡の意味と内容とを、ヨリ具體的に言へば——

一、第一部門において生産される生産手段のうちで、その價值が

1、在來の可變資本の價值に該當する部分 (V)

2、新たに可變資本化される剰餘價值に該當する部分 (Mv)

3、資本家自身の消費に充てられる剰餘價值に該當する部分 (Mk)

の三者は 第二部門の各種の資本家に賣られるのだから、彼等の要求する物的形態を具備するを要すると同時に、彼等が現實に有する購買力以上に多量であつても、以下に少量であつてもならぬ。

二、しかるに、彼等の購買力は、此の場合、

1、第二部門在來の不變資本の價值 (c) と、

2、第二部門で新たに不變資本化される剰餘價值部分の價值 (mc)

との和に等しい。即ち、所要の平衡の第一の意味は、

$$(購買力としての) $c + mc =$ (生産手段としての) $V + Mv + Mk$ である。$$

三、同様の關係が逆にも生ずる。即ち第二の意味は、

$$(消費資料としての) $c + mc =$ (購買力としての) $V + Mv + Mk$$$

である。何故といふに、此の關係にあつては、第二部門の資本家等は彼等の全生産物(消費資料)のうちで、その價值が

1、在來の不變資本の價值に該當する部分 (c)

2、新たに不變資本化される剩餘價值に該當する部分 (mc)

の二者は、之れを第一部門の資本家並びに労働者に對して賣るのだから、その人達の要求する物的形態を具備せねばならぬと同時に、需要者等の現實に有する購買力に完全に一致しなければ過不足が生ずるのである。尙ほ、此の取引においての、第一部門労働者等の購買力は、同部門の資本家等が彼等に支拂ふ賃銀 (即ち可變資本 $V+M_v$) によつて決定され、彼等資本家等は、その生産物を第二部門資本家に賣つて貨幣に代へて初めてそれを支拂ひ得る、といふ二重の依存關係になつてゐる。

以上が、簡單ながら、謂はゆる『資本論』第二卷の資本蓄積の表式の意味の内容——茲での論旨に關する限りでの——であるが、それによつて強調されてゐる要點として吾々が記憶せねばならぬのは、資本の蓄積が此のやうに故障なく行はれる爲には、少くとも前記の二重或はむしろ三重の意味において

$$c+mc=V+M_v+M_k$$

であらねばならず、此の平衡は、生産における兩産業部門間の進行的均衡 (即ち生産手段の生産増加と消費資料の生産増加との間の權衡) を意味すると同時に、一般的生産と一般的消費力 (購買力)

との間の進行的均衡を意味する、といふこと之れである。

で、如上の條件が充たされる限り、そして限りにおいてのみ、資本の蓄積は可能である。資本家は剩餘價值の資本化を行つて所要の生産手段と労働力とを増し、生産の規模を擴張する。社會全體として生産手段が増加し、労働者が増加し、生産される價值總量が増加し、剩餘價值も從つて増加し、『増殖』される。資本主義生産の『強制的動機』が事實化され、『直接の目的』が達成される。

尙ほ一言、——以上において問題の擴張再生産が行はれるとされた社會は、『純粹』な資本主義社會と假定されてゐる。それは、産業資本家階級と賃銀労働者階級との二者のみから成るものとされ、他の資本主義社會及び非資本主義的社會との交易は全く無く、商品の價格は常にその價值と一致するものとされてゐる。

資本主義の機構の内部の働きを隠すところの一切の現象を暫く度外視する爲めに、『吾々も尙ほ暫く此の抽象的資本主義社會を假定しつゝ、その利潤の爲めの生産の發展過程における矛盾の展開を跡づけるであらう。』¹⁾

三、市場の恐慌

資本の蓄積は、少くも $c+mc=V+M_v+M_k$ なる條件が充たされる限り故障なく行はれ、限りに

1 表式に關する詳しい説明は、私の以前の論文にある。
(本書の第一論文)

おいてのみ故障なく行はれる。しかるに、資本主義的生産に本質的なる理由によつて、蓄積過程の進行するところ必至的に所要の平衡は破れねばならない。此の破壊は、それ自身平衡再建の手段となるところの周期的な産業恐慌に表現せられつゝ、一回は一回毎に自身の強度と規模、及びそれに伴ふ諸結果の作用を深大ならしめることによつて、遂には資本主義的生産そのもの、決定的不可能を招来すべき内的傾向を有する。マルクスが『資本論』第二巻において前記の表式を利用してなせる蓄積条件の論定は、直ちに彼れの恐慌理論を準備するものであり、恐慌理論の前提乃至出發點たることに當面の論理的機能を有すること、従つて『資本論』を貫らぬ論理的連鎖を全體として正しく把握する者は、件の表式における諸假定と、『資本論』第三巻第三篇に展開された恐慌理論並びにそれにおける諸假定との間には何等のギャップも、少しの『矛盾』をも見出し得ないであらうことは、私が既に以前の論文『資本主義崩壊の理論的根拠』において強調して置いた所である(註一)。

(註一) 河上博士が、ローザ・ルクセンブルクと共に、其處に『矛盾』を發見してをられるのが私には解らぬ。(河上學者『社會問題研究』第六十九冊所載の論文『労働の生産力の發展と資本蓄積との衝突(ローザ・ルクセンブルクの『資本の蓄積』について)』を参照) 博士の論旨は、第三巻の『利潤率の傾向的の下落の法則』においては労働の生産力の發展といふ要因が至重の役割を演じてをるのに、『第二巻の表式』においては此の要因が全く抽象されてゐる、それは矛盾だ、といふ事に盡きるやうである。だが、およそ抽象的から具

體的への理論的進展のあるところ、その一の段階において全く抽象されてゐる要因が、正にその抽象の故に、次ぎの段階には現はれて来る、といふことぐらゐ當然なことではないかと思はれる。さうした段階相互のあひだにいち／＼『矛盾』を見出したのでは、『真理の發見の過程は矛盾の連続である』とでもいふやうな、かなりに嶄新な命題も成立し兼ねまい。わが憐むべきマルクスに就いて言へば、例へば、一般的恐慌の理論には消費力なる要因が取入れられてあるが、部分的恐慌のそれには消費力が抽象されてゐるから矛盾である。擴張再生産の表式では剩餘價値の増殖が考慮されてゐるのに、單純再生産の表式ではそれが全く抽象されてゐるのも矛盾である。等、等、誠に際限もなし……。私がかつてその誤謬を指摘したところの、資本主義的蓄積の本來的絶對的不可能性の理論の立場から、第二巻の表式が間違つてゐるとするローザ・ルクセンブルクの場合にあつては、彼女が正しいとする第三巻の理論とそれとの間の『矛盾』を言ふのは、形式理論的には寧ろ正しい。が、第二巻の表式そのものには取えて不服を有たれぬやうに見える河上博士——少くとも今度の論文における——が、ホエムやら誰やらが据え膳の『矛盾』の御馳走に満腹してさぞ欠伸心地でもあらう程の老マルクスを、尙ほ『矛盾』でいぢめられるのが私には解らないといふのである。

上記の如き見地に立つ者は、前掲の表式から次の諸點を看取することが出来、また出来ねばならぬ。即ち——

一、各生産部門の擴大再生産は、その特定の生産物に對しそれ／＼に特定の需要者を有つといふことによつて制限される。従つて各生産部門が、蓄積行程において、新たに投下する資本を以つて

生産する追加生産物は、その需要者の購買力の、それに應當する増加が生ずる限りにおいてのみ、その價值が、従つて剩餘價值も、實現され、資本家は利潤を收得することが出来る。

二、各生産部門間の——右の如き——依存關係を辿るとき、生産手段を生産する諸企業はすべて、直接にか間接にか、消費資料生産の企業を、自己の生産物に對する需要者とし、従つて結局において消費資料の生産及び賣却が、一切の生産手段の生産及び賣却を條件づける。その意味においてあらゆる生産手段は隠然態の消費資料に外ならない。

三、消費資料の生産増加、並びに間接には生産手段の生産増加、即ち一切の生産増加の範圍は、究局において、消費資料に對する購買力の増加に制約される。

四、かゝる購買力の増加およびその程度は、資本の蓄積わけでもその程度と方法とによつて制限される。言ひかへれば、實現された剩餘價值の大きさと、その内から資本家自身の消費資料の購買用に充てられる部分及び労働者の消費資料の購買用に充てられるべき賃銀即ち可變資本に轉化される部分の大きさとによつて制限される。

かく見ることは、市場現象を、その背後に横はる生産技術的連結並びに社會的物質代謝との動的相關において理解することである。¹⁾ かやうな深き洞見のみが、資本主義的擴大再生産過程の本質を突き止めさせ、その平衡の相と同時に矛盾の相を把握せしめるであらう。

1) かゝる理解を缺いたことが、マルクス以前及び以後の一切の市場及び恐慌理論を誤れるものにした。古くはリカアドー、セイ、シスモンディ、近くはツガン・バラノウスキー、及び或る程度まではホルフアデンクも、等、等。

我々は、資本蓄積の故障なき進行のための平衡は、此過程の内的必然性の故に不可避的に破れねばならぬといつた、では何故に？

それは資本主義的生産の本質的諸特徴を想起することによつて極めて單純にして明白と成るところの理由からである。吾々は、資本主義的生産の無計畫——無政府を知つてゐる。資本家と資本家との對立——競争を知つてゐる。吾々は更に資本と労働との對立——搾取の事實を知つてゐる。マルクスは、實に、單純なる商品生産制の生産及び流通の機構のうちに既に恐慌の可能性を見た。それにあつては商品の生産と賣却とがおの／＼獨立の行爲として互に分離してをり、一商品を賣つた者は、得たる貨幣をもつて必ずしも直ちに他の商品を買ふとは限らない。この單純な事實のうちに既に市場の滯貨なる形をとつて現はれるやうな平衡破壊への胚芽がある。が、もちろん、此の種の要因は大なる商品量の生産とそれに相應する大市場とを有する發達した資本主義社會においては、大した役割を演ずることが出来ない。それに代つて資本主義生産における平衡破壊の強大な動因たるものは、此の生産の無計畫性であり、資本家間の競争戦である。此の二つの要因のみを以つてしても、生産物の性質に基づく依存關係を通じて相互の生産を條件づけるところの生産部門間に、生産の過不足を生ぜしめ得ることは賭易い。此の不均衡の結果として市場價值の動搖を來たし、各部門に於ける資本の移動を惹起することによつて平衡が回復されようとはする。が、平衡の回復と

は、云ふまでもなく、平衡の破壊を前提するのだから、その破壊が既に恐慌であり得ることは拒めない。だが、かゝる恐慌は、一生産部門（例へば綿織物業）の生産が多すぎるといふ其の故に他の部門（例へば綿織物業）の生産が少な過ぎると言つた事態に基づくものであるから、マルクスはこれを部分的恐慌と名づけた。が、この種の部分的過剰生産が一般的過剰生産に轉化するとき、深刻な恐慌を生ずる。

吾々は、生産増加の範囲は、一般に結局購買力に制約され、此の購買力は資本家の消費と労働者の賃銀とに充用される剰餘価値の部分の大きさによつて制約されることを見た。いま、無政府と競争とを前提し、更に資本家的生産の直接の目的たる、労働の搾取によつての剰餘価値の増殖を前提するとき、此の生産方法の特殊性よりして、生産の増加は、一般的に常に購買力の増加を超越して進まうとする執拗な傾向をとるのを見る。マルクスは言ふ——『資本主義的生産の全努力は、出来るだけ多く剰餘労働を高利に買取ること、即ち與へられた資本をもつて出来るだけ多く直接的労働時間を物質化さうとすることに向ひ、それが労働時間の延長によつてなると、必要労働時間の切下げによつてなると、また労働の生産力の發展、協業、分業、機械の適用によつてなるとを問はない。即ち、資本主義的生産の本質のうちに、市場の制限を顧みざる生産が在る。』¹⁾ が、謂ふところの市場の制限乃至は一般購買力の制限を超える生産増加、即ち、一般的過剰生産への傾向は、單に資本家

1) Marx. K. Theorien über den Mehrwert. II. S. 301.

の限りなき蓄積欲といふ主觀的要因によつて生ずるばかりでなく、彼等の意志から獨立した客觀的條件の故に必至的となるのである。労働時間の延長、必要労働時間の切下げには限度があり、しかも容易にその限界に逢着する。唯だ、生産技術の改良によつて生産力を發展させることのみが、剰餘価値増殖の目的に役立つ手段として無限の可能性を有つかに見え、また資本の蓄積過程において現實に生産力を發展せしめ行く限りにのみ資本主義的生産の歴史的使命があるのもある。資本家にしてよく此の使命をつくし得るのは、自己の企業に施すところの生産技術の改良——即ちヨリ新しき、より優良な機械の使用等——が、放下資本の價値量の増加よりも遙かに大なる生産物の増加に結果し、比較的低廉なる製品價格をもつて競争戦に優勝し得しめることによつて、彼の利潤を増大するからである。が、競争は、他の資本家をも、同様或はヨリ以上の改良を、生産増加を、餘儀なくさせる。生産を増大することは、今や資本家にとつて單なる存在の爲めの條件と變ずる。問題は實に、資本家が果してかゝる一般的生産増加に應當して購買力ある市場を見出し得るかにかゝる。

擴張再生産行程において生産力の増大を齎らすやうな生産技術の革新は、多かれ少なかれ、絶えず資本の組合せそのものを變化せしめ、機械その他の諸設備の形をとる固定資本の部分の全放下資本に對して占める割合を大ならしめ、従つて、原料補助料等の形をとる部分の割合をも大ならしめ

る。即ち、不變資本は絶對的にも相對的にも増大する。しかるに、可變資本——即ち此の、労働者に賃銀として支拂はれて彼等の購買力を形づくるところの資本部分は、總資本が増大する爲に絶對的には増大するとしても、相對的には減少しなければならぬ。茲に一つの、資本家的生産にとつて客觀的に不可避的なる市場の制限がある。労働者の限られた購買力、しかも増大する總生産に對して絶えず相對的に減少せんとする此の購買力の關するところは、もちろん、消費資料に限られる。が、生産手段もまたすべて、隱然態の消費資料である。生産手段の生産増加は、晚かれ早かれ消費資料の生産増加となつて現はれずををらないからである。消費資料に對する購買力の今一つの源泉としては、資本家の個人的消費に充てられる部分の剩餘價值がある。此の部分もまた、收得される剩餘價值の總量が増す限り絶對的には増大するが、資本の有機的構成の高度化が、資本化される剩餘價值部分を果進的に増加せしめる以上、相對的には減少するを免れない。競争は、人格化された資本としての資本家をしてますます多く蓄積せしめる。かゝる蓄積によつて加速度的に増加する消費資料の生産に對して存在するところ、同様に客觀的に不可避的なる市場の制限を、茲にも吾々は見るのである。

資本の有機的構成の高度化の傾向はまた、資本家そのものゝ上に直ちに、利潤率遞減の傾向となつて現はれる。他に先んじて大量生産的な生産技術を採用する資本家、即ち不變資本の相對的増大

を來たすやうな方法において生産規模を擴張する資本家は、暫くの間は優勝的に平均以上の利潤率を得る。これを得ることこそが、優良技術採用の、生産力増大の、目的であつた。が、彼れの同僚の多くもまた彼れに見習つて來るにつれ、彼の特別利潤が消滅するのみならず、一産業部門一般の利潤率は、またやがては全社會の一般利潤率も、却つて在來の率以下に低落すべき傾向をとる。けだし、利潤率は生産力増大であり、剩餘價值乃至利潤は、専ら、可變資本が代表する『生きた労働』によつてのみ造り出されるのに、いま資本構成の變化によつて可變資本の割合が減じ、従つて生産において占める生きた力の割合が減ずるとすれば、剩餘價值乃至利潤の、全放下資本に對する割合もまた減ぜざるを得ないからである。

利潤率低落の傾向が現實に現はれて來るのは、固定資本の増投乃至更新によつての生産増加が、もはや遠く『市場の制限』を超えてゐる時である。そこまで好景氣の高浪が打ちつゞけて來た。既に多くの商品が、たゞ賣らんとする熱望と賣れる見込みの基礎の上のみ生産され、かゝる生産に役立つべく多くの機械が取付けられ、多くの工場が擴張されてゐる。が、見込みと願望とは今や當然に裏切られねばならぬ。いまや何づれかの資本家が、新たな注文を受取る代りに、却つてさきの注文を取消されねばならぬ。そこで恐慌がやつてくる、——「過度」に増大した生産物と生産手段とを強行的に處分し破壊することにより、かくして社會の生産能力を、現實に増加し得たる購買力

の程度に迄で引下げることによりて、平衡を再建せんが爲めに！。そして其の新たなるヨリ高位なる平衡の基礎において更に新らたなる蓄積過程を開始せしめ得んが爲めに。——かくて恐慌は、所要の平衡を絶えず自ら破らねばならぬ資本主義的蓄積過程の爲に、その平衡を造り出すところの不可缺手段となり、周期的再現によつてその役目を果すのである。

恐慌は、「過剰」の資本と生産物とを一掃すると同時に、その資本に仕へつゝ其の生産物のうちに汗と膏とを凝結させた労働者の大群を工場からほうり出す。そして彼等を、來るべき資本家的競争戦に動員すべく「産業豫備軍」に編入する。その大なる部分が文字通りの失業者なることは言ふをまたない。

恐慌の周期性、わけでも周期の長短は、好景氣の浪の物質的基礎が主として固定資本の増投更新過程に在ることと關聯する。此の種の資本の更新は、恐慌後の不況期に大規模に開始され、且つその開始から終了までに相當の年數を要するからである。例へば、「市場の活躍」の直接の原因が、尨大な固定資本を要するところの、生産手段を生産する産業諸部門における其の増投更新の進行に在る時には、好景氣の期間は比較的長く、恐慌に始まる不景氣時代もまた相應に長いであらう。が、當の更新過程が、主として、資本構成の低位なる、乃至は生産擴張力の大なる消費資料部門に生じ、それが好景氣の主因をなす場合には、その繼續期間は比較的短くなければならぬ。(も

ちろん何づれも、他の條件を同一と見なしてのことである。) 故障なき蓄積の條件は、 $c+mc=V+M^v+M^k$ であつた。右の第二の場合には、平衡は直ちに $c+mc \leq V+M^v+M^k$ への傾向、即ち一般的生産過剰への傾向をとることによつて破壊されようとするが、第一の場合には、先づ $c+mc < V+M^v+M^k$ ——即ち部分的過剰生産へと傾きつゝ、一般的恐慌即ち $c+mc \leq V+M^v+M^k$ を準備する。更に第三の場合として想定し得るのは、生産手段部門と消費資料部門とにおいて同時に資本の増投更新が行はれる場合であるが、その時には好景氣の期間は最も長きに亘るであらう。 $c+mc$ と $V+M^v+M^k$ とが歩調を揃へて増大する可能性が大きいからである。が、茲でもまた平衡は早晩 $c+mc > V+M^v+M^k$ の形態において破れねばならない。

リカードーは夙に部分的恐慌の可能を認めてゐた。それは生産部門に生ずる不均衡の表現である。一般的恐慌、即ち社會的生産と社會的消費との不均衡を表現するところの恐慌を斯かるものとして認識した最初の者はシスモンデイである。マルクスにあつては、それが恐慌として現はれる限り、生産部門間の不均衡は直ちに消費對生産の不均衡を意味し、消費對生産の不均衡は直ちにまた生産部門間の不均衡である。彼に至つて初めて二つの要因が其の固有の有機的連絡においてしつかりと把握され、且つ資本蓄積の過程、即ち動態においての、發展相においての全資本主義經濟における恐慌の役割が確定された。そして其のこと自體が、蓄積における平衡要件に關する彼の嚴密鋭利な

る分析——そしてその結晶こそが吾々の援用し來たれる「第二卷の表式」である——の、當然の一歸結に外ならないことを、今一度茲で強調して置く。¹⁾

四、生産力の發展と矛盾の展開

恐慌によつて強行的に再建された新たなる平衡の基礎のうへに新たなる蓄積過程は始まる。その進行と共に必然に破れる平衡は、更に再び恐慌によつて建直されねばならぬ、等、等、——過程は直線をかすして鋸齒状線をかいて進む、が、それは單なる反覆ではない、只だの繰返してあることは出来ない。一の周期の出発点においては、前の周期の出発点に比して、生産手段の總量が増し、労働力の總量が増してをる。そればかりではなく——そして更に重要なことだが——生産手段および労働力が質的に高められてゐる。今や、一人の労働者によつて、前よりも一層多量の生産手段が運轉される。ヨリ高き技術的水準に立つからである。即ち、量と質との二重の變化によつて社會的生產力は著しく増大してゐるのである。だが、労働の生産性の増大は、同時に、資本の有機的構成の高度化となつて現はれる。労働者の總數は増加し、従つて可變資本は絕對的には増加するが、相對的には減少してゐる。可變資本の増加と共に社會的購買力も亦た絕對的には増加する。が、しかし、その増加の程度は、社會的生產力の増加のそれには及ばない。生産力との比例において

1) 本節の關する市場及び恐慌の理論は、マルクスの『剩餘價值學說史』第二卷第二分冊第三篇『資本蓄積と恐慌』に最も明快に展開されてをる。尙ほ左の諸著を参照、Marx, „Kapital“ II, S, 161 ff. Dr. M. Nachimson. Die

は、購買力は却つて減少してゐる。剩餘價值の生産の條件は良好となつたが、それだけその實現の條件が劣惡となつた。言ひかへれば、市場は生産力にとつて一層狹隘になつて來た。生産が市場の制限を超えて増大せんとする傾向はますます——強大にあらねばならぬ。消費の爲めに生産せず、利潤の爲めに生産する資本主義的生產に内在する矛盾、労働者大衆によつて造出される價值總量の最小可能部分のみを彼等に與へ、殘餘の最大可能部分を蓄積し資本化さんとするところの、剩餘價值増殖の爲めの此の生産に固有なる矛盾が、茲では生産力と市場との間の矛盾となつて現はれ、此の矛盾は經濟周期の進行と共に、生産力の發展と共に、いよ／＼増大しようとする。古曲的な一節においてマルクスは言ふ——

「直接の搾取の諸條件と、搾取實現の諸條件とは同一でない。兩者は、時や處の點のみならずまた概念的にも異つてゐる。前者は、たゞ社會の生産力によつて制限されてゐるに過ぎないが、後者は、種々異なる生産部門間の比例關係により、且つ社會の消費力によりて制限されてゐる。しかるに此の社會の消費なるものは、絕對的生產力によつても、また絕對的消費力によつても決定されず、敵對的な分配關係に基づく消費力によつて決定されてをり、該分配關係は、社會の大多數者の消費力を、多かれ少なかれ狭い限界内で變動する最低限に縮少する。社會の消費力は、更にまた、蓄積への衝動、資本の増大への、および擴大せる規模における剩餘價值の生産への衝動によつても

制限されてゐる。これは、生産方法における不斷の革命により、絶えずそれに件ふところの資本の価値減少により、一般的な競争戦により、また単に自己保存の手段として没落を免れんが爲めに生産を改善し且つその規模を擴張する必要によりて、資本主義生産に與へられてゐる法則である。それだから市場は、市場の聯繫および之れを調整する諸條件が益々生産者等から獨立した一の自然法則のかたちをとり益々統制し難くなるやうな風に絶えず擴大されざるを得ないのである。内部の矛盾は、生産の外面の擴大によつて均衡を得ようと試みる。が、生産力が發展すればするほど、それは益々、消費事情の依つて立つ狹隘な基礎と衝突する。かゝる矛盾に充ちた基礎に立つ以上、資本の過多が人口の増進的過多を伴つてゐるのは少しも矛盾ではない。蓋し、兩者が集め合はされるとき、生産される剰餘價値の量は増大するであらうとはいへ、正にそれと共にまた、此の剰餘價値の生産される諸條件と實現される諸條件との間の矛盾が増大するのだからである。〔註一〕

(註一) Marx „Kapital“, III. S. 325. 此の一節の後段の「それだから市場は、……」以下「……衝突する。』までの數行の文意は極めて明白だとは云へないが、その重點として強調されてゐるのは、資本家が市場を擴張する必要の方ではなく、彼にとつての『生産を改善し且つその規模を擴張する必要』の方であると私は解してゐる。後者の必要は、問題の箇所直前に力説されてをり、直後に續く一文において指摘されてゐる所の、『資本過多』と『人口の増進的過多』との並存の當然性も亦た市場擴張の必要の結果でなくて、市場

の制限にも拘らず大量生産化する必要(即ち生産の改善及び擴張の必要)からの必至的歸結である。従つて、『内部の矛盾は、生産の外面の擴大によつて均衡を得ようと試みる』の、『外面の擴大』は、それが生産の外面の擴大である以上、やはり大量生産化乃至資本構成の高度化を意味してゐるものと解すべきであらう。ローゼンクレンツは、此の數行全體の重點が市場擴張の必要の強調にあるものと解し、それと共に此の外面の擴大を市場の擴大と解し、しかもそれを非資本主義的外面への市場擴張と解し、その解釋をば、彼女の非資本主義的外圍絶對必要論の一論據としてゐる。だが、これは誤りだと思ふ。市場擴張の必要は此の場合一つの含意 (implication) としてはもちろん存する。しかしこれは此の數行の力點でもなければ、また一般的意味におけるその必要のことでもなく、まして彼女の意味するやうな必要のことではない。茲に單なる含意として存する市場擴張の必要なるものは、特定の必要であり、眞の力點たる大量生産化の必要——しかも、市場の制限以上にそれをするの必要——から派生する。此の必要の故にこそ、市場は、或る仕方においてのみ擴大されざるを得なくなる。——即ち、『益々統制し難くなるやうな風に』。言ひかへれば、恐慌が不可避的であるやうな風に。

因に、原文の „Der Markt muß daher beständig ausgedehnt werden, so daß seine Zusammenhänge immer unkontrollierbarer werden.“ を、いきなり、『だから市場は絶えず擴張されねばならぬ。かくして……』などと譯すのは、misleading なことにならう。(例へば、高島氏譯『資本論』第三卷第一分冊二九一頁や、河上博士の『社會問題研究』第六十九冊二四頁の譯文を見よ。) 右における „müßig“ は、必要性よりは寧ろ必至性を示す。譯文には、一般的に單に擴大することの必要ではなく、ある仕方で擴大されざる

を得ない客觀的不可避性の方が表現されねばなるまい。

資本の蓄積過程、擴大再生産の過程は、同時にまた矛盾の擴大再生産の過程である。より擴大された矛盾は、より大なる強度と規模において爆發せねばならぬ。恐慌によつて強行的に處分されねばならぬ過剰生産物、過剰資本、過剰労働は、いよ／＼多大である。産業豫備軍、過剰人口は、資本主義生産の發達と共に相對的にも絶對的にも増大する。周期的に生ずるところの、社會の生産行程の突如たる停止と、そこに生ずる失業者の大軍と飢餓——かゝる經濟上の混亂は、それが一定の強度に達するとき、政治的危機に轉化すべき可能性を有つて來る。大衆の累進的窮乏化の過程は、その進展において、周期的に沸騰状態を現出しつゝ、一回は一回毎に沸騰力そのものを強めて行く。

一方に過剰人口の累進的增加、大衆の累進的窮乏化を生ぜしめる過程の物質的基礎たるところの、資本主義生産における「生きた労働」の相對的減少の事實、乃至は資本構成の高度化の事實は、他方には、資本家階級の「窮乏化」の過程となつて現はれる。利潤率遞減の傾向がそれである。一定の時に最大可能なる利潤を獲得せんとする資本家の努力、競争は、當の努力、當の競争に役立つ得るところの限られた手段方法の特殊性の故に、利潤率そのものの低落を不可避ならしむる事を吾吾は見た。資本家は此の傾向に打克つ爲めに如何なる手段をとることが出来るか？ 彼としては、

1) Marx, „Kapital.“ III. S. 238.

(一) 同一量の資本をもつてより多くの剰餘價值を造出するか、乃至は、(二) 同一量の剰餘價值をより少き資本によつて造出し得なければならぬ。そこで、その具體的方法の第一としての擄取程度の強化や價值以下への賃銀の低減は、資本家の不斷の、累加的な努力となるとはいへ、それらにはおのづから一定の限界があり、剰餘價值を増大せしめる爲めの彼の歴史的方法即ち生産力そのものの發展によつて増大せしめる方法に取つて代ることは出来ない。その他の多くの手段、例へば、より低廉なる原料、補助料、機械の獲得による生産費の節減や、利子を支拂へば足るところの他人の資本の利用による自己の資本部分の減少、等の如きもまた、生産力の發展を前提するか若しくは却つてそれを促進するだけである。しかるに、生産力を發展せしめることによつて剰餘價值を増大せんとする努力こそは、資本構成の高度化を通じて、利潤率の低落を惹起したものであつた。だが、「蓄積に伴ふ利潤率の低減は必然に一つの競争戦を齎らす」¹⁾以上、資本家等は此の新たな刺激の下に、更に高度なる大量生産的な段階に進出すべく、更に新らたなる固定資本の増投更新の道を踏み出さずにはをられない、——生産力を更に大きく發展せしめつゝ、彼等の生産方法に固有なる「制限」をも亦た同時に更に大なるものと化し、之に向つて更に大きく衝突せしめんが爲めに、で、マルクスは言ふ——

「資本主義生産は、それ自身に内在する所の斯かる制限に、絶えず打克たうと努める。だが、資

1) Marx, „Kapital“, III, S. 238

本主義的生産は、たゞ更に新らたに、而かもヨリ強大な規模において此の制限を自己に向つて造り出すやうな手段をもつて打克つに過ぎない。

資本主義生産の眞の制限は、資本それ自身である。……(眞の制限は)、資本並びにその自己増殖が、生産の起點及び終點として、動機及び目的として現はれるといふ事實であり、生産は資本の爲めの生産に過ぎないといふ事實、即ち、生産手段が、生産者の社會の爲めに、生産行程の形成を不斷に擴大せしめることのみ手段ではないといふ事實である。』¹⁾

歴史が資本家階級に與へた運命は面白い、彼等はますます富みながら、その富の彼等に對する意味がますます失はれて行くことによつて「窮乏化」する。利潤率遞減の法則は、「デモクレスの劍」のやうに彼等の頭上に懸つてゐる。

五、金融資本主義への發展

生産の擴張と同時的なる矛盾の増大、増大する矛盾の増大する規模における周期的爆發、生産力の發展とそれに対する制限の同時的著増、——かゝる諸傾向を特徴とする資本家の蓄積の過程は、その特殊の、そして最後の、歴史的段階において、資本家的獨占を基礎とする帝國主義の形態をとるのである。

1) Marx, „Kapital“ III, S. 231—232

資本の擴大再生産の、量的一表現としての資本の集積は、その進行の過程において資本の集中を伴ふ。集中の極點はおのづから獨占到到達すべきことは、自明に近い。マルクスは

「一定の營業部門について言へば、そこに投下された個々の資本の總てが單一の資本に融合されてしまふとき、集中はその極限に達してゐるであらう。また一定の社會について言へば、すべての社會的資本が、單一の資本家なり資本家會社なりの手に合一されてしまふ時に初めて、集中は同様な極限に達してゐるであらう。』¹⁾

と述べ、エンゲルスは——恐らく一八八〇年代の半ば頃に既に——それに註して

「最近のイギリス及びアメリカの「トラスト」は、一營業部門の少くなくとも大經營のすべてを、實際上の獨占を有する一大株式會社に結合することによつて、既に如上の目標に到達せんと努めつゝある。』²⁾

と言つてゐる。そして此のトラスト、並びにシンヂケート、カルテルの形成による獨占化の運動こそは、かの利潤率遞減の執拗なる傾向に對する必死の資本家的抗爭の必然的所産なのである。生産力の發展性と消費力の制限性との間の矛盾の特殊の一表現であるところの利潤率の低落が一定の程度に達するとき、極度に近き集中によつて形成された少數大企業間の競争は相互致命的な性質を帯びて来る。かつては集中の、生産力發展の、強力なる槓杆として資本家的生産の歴史的使命をつく

1) Marx, K. Das Kapital I. S. 591. 592.

2) 同上、傍點は猪俣

さしめた自由競争は、今ま止揚されねばならぬ。競争の否定、独占が、代つて現はれる。かくて此の運動は先づ、資本構成の最高度なる、従つて利潤率遞減の法則が最も直接的に働いてゐる重工業の諸部門に起らざるを得なかつた。¹⁾

カルテルやトラストの形成は言ふ迄もなく株式企業の發達を前提とする。そしてマルクスは夙に、資本蓄積の發展過程において利潤率低落の運動と並んで謂はゆる過剰資本が増大すること、そしてかゝる資本の株式資本への轉化が個々の資本家にとつては利潤率低落の勢ひを緩和し得ることを指摘し、株式企業發達の歴史的條件を暗示した。²⁾ 過剰資本が、自余の休態資本と共に、一方では株式資本を、他方では銀行資本(預金を含む)を増大せしめ得るのは、信用の作用を通じてである。「資本主義生産の發展につれて信用制度といふ全然新しい一勢力が形成されて来る。それは初め、蓄積の謙遜な助手としてひそやかに忍び込み、大小種々なる量に於て社會の表面に分散してゐる貨幣源泉を、見えざる絲によつて、個々の資本家や結合資本家の手に引寄せて来る。が、やがては、競争戦の新たななる恐るべき武器となり、遂には資本集中を助長すべき異常なる社會的一機構に變ずる。」³⁾ 株式制度と相並んで、個々の企業をして利潤率低落の傾向に打克つべく他人の資本を利用し得しめるところの信用は、「流通信用」から區別される「資本信用」である。⁴⁾ 平均利潤をあげ得る爲めに必要とされる資本一單位の標準的の大きさが増大するにつれ、個々の資本家企業が此

1) Hilferding R. Das Finanzkapital. Kpt. 11.

2) Marx, K. Das Kapital. III. Kpt. 14, 15,

3) " " " " I. S. 501.

4) 拙著『金融資本論』第三章第二節参照

の資本信用を出来るだけ多く利用するの必要は、競争の重壓の下に、ますます壓倒的となる。これに對して、資本信用の供給者としての銀行が現はれ、茲に銀行資本(貨幣資本)と産業資本(生産用資本)との融合の端緒がひらかれる。かゝる融合は、資本構成の高度化につれて固定資本(信用を利用する必要が巨大企業に生ずる時にいよ／＼著しい。銀行は、一方では貸附けられ得る資本を尨大な額に於て自己の手に集中し、「かくて個々の貸手ではなしに銀行が、貸手全體の代表者の資格で、産業資本家及び商業資本家の面前に現はれる。銀行は貨幣資本の總支配人となる。他方、銀行は總ての貸手に對して借手側を集中し、全實業界の爲めに借入れる。銀行は、一面では貨幣資本の貸手の集中を、他面ではその借手の集中を代表する。」¹⁾ 茲に吾々は、信用關係において、産業企業に對して優越的地位を占むるべき、銀行の力の源泉を認めることが出来る。

更に銀行資本は、生産技術上の諸制限を受けないところから、最も大なる集積性を有し、産業資本の側に生ずる集積及び集中の刺激のもとに、之れに對應してそれ自身所要の集積及び集中化を行ひ、前者の上に統制權を行ふ力を獲得することにをかゝない。箇々の産業部門に生ずる独占化を、一社會の全資本における独占化にまで引上げる任務は、従つて銀行資本の手に歸さなければならぬ。

銀行の貸附ける資本が産業企業の固定資本の増投更新に利用され、銀行資本が産業資本と融合し

1) Marx, K. Das Kapital III. Kpt 25.

てしまふとき、銀行の利害は當該産業企業の成敗と緊密に結びつく。同様の結果は、株式の所有によつても、また謂はゆる發起業務關係によつても生ずる。銀行は今や會社の重役會議に自己の代表を入れ若しくは直接に會社を管理經營しなくてはならぬ、またすることが出来る。銀行は、自己が深き利害關係を有する多數の企業が、各自の利潤の低落を招致するやうな競争や相互致命的な競争を行ふことを喜ぶ筈がない。銀行はかくして、「協定」の、カルテル化の、トラスト化の強制的な仲介者、促進者として登場する。一方、一産業部門の諸企業間に形成された獨占的結合は、他の關係諸部門の諸企業の利潤を犠牲として獨占的利潤をあげる。従つて後者の諸企業も亦た獨占的結合の形成によつて對抗することを余儀なくされる。そして茲でも亦た銀行は同一の役割を演ずる。獨占化の波が一部門から他部門を襲ひつゝ、遂に一社會の重要産業部門のすべてに及ぶ時——その時こそは、集中された數個の巨大銀行が、一社會の産業のすべての資本の實際上の統制權を握り得るであらう。それと共に、産業資本と銀行資本との融合の基礎の上に、獨占を主要特徴とする金融資本主義は完全¹⁾に成立するであらう。

茲に強調されねばならないのは、金融資本主義の必然性である。此の資本主義の形態が、資本家的蓄積に内在的なる諸法則の展開過程の必然歸結的な表現である事である。即ち、資本の集積及び集中による生産力の發展に伴ふ資本構成の高度化と利潤率の低下、それに打克たんが爲め、更に新

らたなる大量生産化を行はんが爲めの信用の利用、更に大なる集積及び集中、固定資本の相對的増大を直接的に反映する固定資本信用の増大、等、等。そしてカルテル、トラストの形成による、巨大企業それ自身の獨占化に至つては實に、資本家的生産が、利潤率遞減の法則の重壓の下に、生産力の發展そのものの上に意識的制限を加へてもつて客觀的に不可避的な市場の制限に順應するの餘儀なきに至つたことを意味する。また、信用の「見えざる糸」に支えられつゝ異常に増大した資本主義生産の全機構が、競争と無政府性により生ずる産業部門間の些々たる不均衡、些々たる「部分的過剰生産」にも堪えがなくなつて來たこと——これこそが、銀行を通じての、全社會資本の統制を必要ならしめたのであつた。

金融資本主義の段階において、一方には、資本主義生産が齎し得る生産手段の集中と労働の社會化とがその極點に近づいて來る。——社會主義社會への轉形を可能ならしめると同時に、新社會の擔ひ手としての労働者の組織化を可能ならしめる客觀的條件の成熟。そして他方には、所有關係の問題は、その最も分明なる、最も尖鋭なる表現を得て來る。「資本は今や社會の生活過程の上に主權的支配を行ふところの力として現はれ、その力の源泉は、生産手段の所有であり、自然的資源及び過去の労働の全蓄積の所有である。生きた労働に對する處分權は、いまや、單的に所有から發する。そしてその所有は、少數の巨大な資本家組合に集中されて、直接に、無産大衆と對峙する。」¹⁾

1) 拙著『金融資本論』二六六、二六七頁。

——所有者階級の、寄生化と頹廢とによる、階級としての社會的意義喪失の爲の條件たると同時に、闘争における無産者大衆の政治的意識化の爲の條件。

九八

六、帝國主義の段階

吾々はさきに、資本家が資本主義生産に固有なる矛盾、制限に打克たんとする努力は、必然的に却つて其の矛盾及び制限そのもの、ヨリ大なる規模に於ける再生産となることを學んだ。金融資本主義は、飽くまでも資本主義であり、しかもその最後の發展段階である。矛盾と制限との克服をば、飽くまでも私的所有の基礎の上においての、資本家的獨占化と組織化とによつて成就せんとすることを特質とする金融資本主義の過程は、その特質に應當する特殊の矛盾と制限との擴張再生産の過程でなければならず、またその段階が最後的事であることの特種の特徴に相應して、制限との衝突、矛盾の爆發の最後の形態に突入する過程でなければならぬ。かゝる過程の最も集中的で最も尖鋭な表現こそが帝國主義なのであるが、制限、矛盾並びにその爆發の累進的なる量的増大はそれが一定の程度に達するとき——そして茲ではそれが正にその最後の段階を踏み始めることの故に——必然的にもはや質的に異なる形態を享けざるを得ない、かくして帝國主義は、經濟的なると同時に著しく政治的なる過程として現はれ、かゝるものとしての國際的世界的過程として現はれる。

吾々は、いまや、金融資本主義を、單にその抽象的な純粹の姿態においてではなく、資本主義的發展の、より具體的な歴史的條件との關聯において、把握しなくてはならない。歴史的には金融資本主義は個々の「國民經濟」の枠内において生長し、凡そ一八八〇年代から、わけでも獨逸、英吉利及び佛蘭西に發達した。その頃に至るまでに生じた顯著なる歴史的事實の一つは、マルクスが資本主義生産の一使命と認めてゐたところの¹⁾、世界市場の成立である。

では如何にして、金融資本主義の政治的表現は必然的に帝國主義であらねばならないか？

一、金融資本主義は、國內市場の獨占——多かれ少なかれ完全なる——の上に成り立つ。政治は常に既存の經濟秩序を擴張再生産する手段である。金融資本主義の生産關係、經濟秩序を、擴大せる規模に於いて再生産する爲めには、獨占の及ぶ範圍即ち一國の領土そのものが擴大されなくてはならぬ。政治は今や此の目的に奉仕すべく、國家的膨脹の、侵略主義の、政策として現はれる。そして政治の延長であるところの戦争は、此の衝突性に充ちた侵略主義の政策の下において、自身の不可避性を増大する。

二、一層具體的には——、世界市場の成立を前提する以上、一國の國內市場の獨占の維持は、獨占保護を目的とする高い關稅壁の設定によらなければ不可能である。一方、商品の供給そのものの制限を條件として内地市場の獨占が成立つてゐる以上、金融資本主義は必至的に擴大再生産の爲に

九九

1) Marx, „Kapital,“ III. S. 239,

市場を海外に求めねばならない。だが、他の金融資本主義國は同様に高い關稅壁で圍まれてをり、他の後進資本主義國も對抗上劣らず高い關稅壁をうちたてゝゐる。此の矛盾に面する時、謂はゆる「自由市場」、半植民地的市場への侵入が唯一の可能として残る。そして自由市場の爭奪戦における勝利は、金融資本主義の生産關係の下においては當該地域の領有に成功する時、即ち自己の國家權力下に持來してもつて其の獨占保護關稅組織の内部に織り込む時にのみ決定的である。生産力の發展に對する市場の制限は、かくして人爲的に、政治的につくり出される。此の制限に打克つ手段は、全然新らたなる、特殊のものでなければならぬ。武力がそれである。

三、同様なことは、原料資源や、資本の放下範圍の爭奪戦についても言へる。否な、一層力強く言ひ得ることである。だが、此の部面における「國際資本戦」については、その性質、手段、強度、方向、等の具體的内容に關する知識までが既に通俗化してゐる程の今日において、多くを語る必要はあるまい。¹⁾ 一方には、海外特に半開國に放下される資本は、當該地域が自國の領土と化される時に始めて完全に他國の資本の競争を排除し得る、といふ事情がある。他方には、資本の輸出、わけでも産業資本、金融資本の形態をとる所のそれは、それ自身と共に、發達した生産方法と搾取關係とを半開の國土へ持ち込み、その壓迫の下に彼等の國民意識を喚び覺して強く侵入者に抵抗せしめると同時に、それ自身が惹き起す經濟的發達によつて彼等の抵抗の力と手段とを増大する。半開國

1) 拙著『金融資本論』第十二章、第二節第三節においても稍々詳しく述べてある。

が、資本主義的に發達した或る一國の領土と化すにせよ、またそれ自身新らたに資本主義國化して關稅壁その他をもつて舊國に對抗するにせよ、世界の金融資本主義全體の發展にとつては、それだけ制限が増大することは賭易い。そしてそれに比例して武力的衝突の不可避性が増大する。けれど、金融資本主義時代の資本の輸出それ自態が既に内國における利潤率の低落に基づいてゐるのであつて、¹⁾ 輸出に對する外的制限の増大は誠に致命的だからである。

之れを要するに、金融資本主義の時代の生産關係——世界的規模における——は、その擴張再生産の過程において、自由貿易を代表的政策とする産業資本主義の時代におけるものとは著しき質的相違あるほどに強大な諸制限を、生産力の發展に對してつくり出すものである。ひとり世界の販賣市場のみならず、その原料資源や投資範圍までが、金融資本家的國家——乃至は「國家資本主義的トラスト」によつて獨占的に分割されるとき、かゝる經濟地域のおのゝが、敵對的な資本家的諸國家の經濟的發達に對する制限として現はれる程度は、各國家内の生産力の發展が既に異常に大なるものとなつて居るだけに、また大なればなるだけ、それだけ著大でなければならぬからである。かうした世界的生産關係それ自態の擴張再生産の過程が帝國主義的過程である。「競争……は、資本主義的生産及び蓄積が發展すればするほど發展する。」²⁾ 獨占化の段階にまで發展し來たれる資本主義生産及び蓄積に際しては、競争も亦たそれに相應した特殊の發展形態をとらねばならぬ。一

1) Marx, „Kapital,“ II. S. 288. Nachimson, M. a. a. O. S. 22—23.

2) Marx, „Kapital,“ I. S. 591.

國內の個々の資本家企業間の競争は、少くとも大企業間においては緩和され、それと共に既に労働の生産力の発展率に著しきたるみが見えて来る。レーニンが金融資本主義を特性づけて、それが独占的資本主義であると同時に停滞的資本主義(der stagnierende Kapitalismus)であると言ふのは、それを指してゐる¹⁾。だが、國內的に緩和された資本家的競争は、國際的には空前絶後の強烈さを以つて現はれる。しかもそれは今や生産力の発展に貢献するよりも遙かに多くその破壊に結果する。競争の當事者は今や近代的な陸海軍を擁する独占的な國家資本主義的トラストであり、競争の決定的手段は戦争である。經濟地域の独占的領有を主要政策とする此の段階においては、一方の發展は他方の發展を犠牲としてのみ可能である。そして發展を阻まれることはしばしば直ちに存立を脅かされることをさへ意味する。世界的規模における擴張再生産の過程にあつては、その故障なき進行の條件として、各國の生産能力の増大及び之れに應當する各自の独占的經濟地域の膨脹の點において保たれねばならぬ國際的平衡が至要な問題となる。が、そもくかゝる平衡なるものは、もし得られたとすれば眞に偶然であらう²⁾。必然的に破れねばならぬ此の平衡は、では如何なる手段によつて再建し得るといふのか？ 國家資本主義トラストの指導者達は口を揃へて——もしくは押へて——答へる。——戦争によつて、と。そして世界の領土的分割が凡そ十九世紀末から二十世紀の初頭に於て實に現實に結了したと、それが爲に爾後の平衡再建は偏へに既得領土の再分割によつて

1) Lenin, „Ausgewählte Werke,“ S. 326—328. Lenin, Imperialism, Chap. VIII

2) ヴアルガは、カウツキー等の超帝國主義の理論を批判した近時の一論文において、その理論が、國際條約による各國權力關係

のみ可能となること、従つて帝國主義戦争の不可避性は今や絶対的なものとなること——此の事實を指摘してそれに至る歴史的轉期を認めたのは外ならぬレーニンであつた³⁾。

領土的膨脹の爲めの戦争——それは昔からあつた。が、今やそれが、かつては平和主義の體現をもつて任じさへしたブルジョアの秩序の、發展乃至存続の爲の不可欠手段となつてゐること、——そのことに特殊の意義が見出されねばならぬ。競争の手段たる戦争が、同時に平衡再建の手段であることを吾々は見た。此の機能において、戦争は經濟恐慌と同一の役割をつとめる。が、それだからと言つて、帝國主義の時代には戦争によつてのみ平衡が再建され、經濟恐慌は資本主義社會から全く姿を消すのでは勿論ない。階級的社會に免かれがたき生産と消費との矛盾は依然としてそこにある。否な、此の矛盾が異常に増大したればこそ、新らたなる形態の國際的の矛盾が累加されたのであつた。此の意味において。帝國主義の時代は常任的過剰生産の時代であるともいへよう。乃至は、隱然態の常住恐慌の時代であると言ふことが出来る。歴史的にも、矛盾は絶えず爆發しようとして裂口を求めてゐた。抑壓された、底流的な、恐慌類似の状態が、屢々戦争的危機を醸しつゝ、運命的な一九一四年に及んだことは人の知る所である。それは未曾有の爆發力に達せしめる爲めに諸矛盾の累積を續けた過程であつた。世界戦争はその現實の噴火であつた。帝國主義戦争は、それ自身一種の恐慌であるにしても、しかも特種の恐慌である。一種の恐慌として當然に生産力の

の終決的確定に出發するものであることを指摘し、その不可能性を、各國資本主義の發展飛躍における不平等の必然なるべきことによつて論證してゐる。Varga, E. „Der Überimperialismus und das Gesetz der ungleichmäßigen

強行的破壊に結果するが、特種の恐慌として實に異常な破壊力を發揮する。就中その社會的政治的影響の深大さにおいて、一般經濟恐慌との比較を全く超越する。(註一)

(註一) 前節から本節に亘つての主題たる、金融資本と帝國主義との内的關聯は、言ふまでもなく、偏へに本質的に、従つて理論的に把握されてをり、従つて兩要因もまた恰度理論的把握が要求する程度において抽象化されてゐることは勿論である。それ故にまた、それ／＼の範圍において金融資本及び帝國主義は、一體系としての世界資本主義全體の特殊の發展段階の、其の特殊性質を形づくるものとして扱はれてゐる。しかるに、帝國主義時代の世界資本主義を、その構成諸單位としての個々の『國民經濟』の方面から考察すると、世界資本主義は、少くとも三群に大別し得る異質の諸單位から成ることが知れる。(一)帝國主義的に能動的原動的なもの、(二)被動的なもの、(三)中間的乃至派生的なもの。第一群は、代表的な金融資本主義國及び之れに準ずるもの、第二群は植民地または半植民地化されつゝある『國民經濟』群で、最後の中間群は、それ自身金融資本主義の段階に達してはゐないが、第一群の帝國主義的攻勢の影響の下に、反作用的に、自衛上もしくは對抗上帝國主義的政策をとる。例へば日本は、日清戦争前後から既に第三群に屬し、レーニンの謂はゆる *militaristischer Imperialismus* (軍主的もしくは軍閥的帝國主義)なる言葉をもつて特徴づけ得る政策の實行者であつたが、内的轉形によつて今や第一群に屬さんとしてをる。帝政露西亞もまた第三群に屬したが、彼の發達の歴史的條件の爲め、第一群の或る者にも増して強烈なる帝國主義政策の遂行者であつた。第一群そのものもまた歴史的には多かれ少なかれ異質の諸單位の集りであつた。各單位は、發達の歴

Entwicklung des Kapitalismus. — Die Kommunistische Internationale (Wochenchrift), 25. Oct. 1926, S. 254 ff
3) Lenin, Imperialism. chap. VI.

史的條件を異にする所から、世界資本主義が金融資本のネットワークに入込んでからの、帝國主義的政策の遂行における強烈性を異にした。例へば北米合衆國は、自國の獨占的資本の高度の成熟にも拘らず、主として國內的經濟の地域の大きさと豊饒さとの故に、帝國主義的政策に依存する必要は獨逸よりも少なかつた。また、早くから世界市場及び植民地領有における『獨占的地位』を占めてゐた英吉利は、獨逸金融資本の成立及び進出と共に、その働きかけによつて直ちに金融資本主義時代の刻印を帯びた帝國主義強國として登場してゐるが、自國の金融資本(即ち發達未期的な資本形態の資本)は、正に舊來の彼れ獨特の『獨占的地位』の故に却つて獨逸ほどに成熟してゐなかつた。だが、今日における英國の金融寡頭政治の鮮やかさと、今日における米國の帝國主義政策の辛辣さを、誰れが否定し得るであらう? 金融資本と帝國主義との關係を形式的乃至『公式的』に考へてはならぬ。帝國主義の考察において、一體系の世界資本主義の時代的特質としてのそれと、その内部において個々の構成單位が個々の場合に演ずる役割とが、兎角混同されやすい。本質的な傾向とその現象形態との混同である。本質は、理論的にのみ、抽象の手段によつてのみ把握され、本質の把握を通してのみ現象は正しく説明され得るのである。そして現象の説明を怠つてはならない——マルキシズムをドグマと化さずして常に行動への手引たらしめようと欲するならば。

因に、近著 "Der Imperialismus" (Leipzig, 1926) の著者フリッツ・シュテルンベルクなども、今言ふやうな混同に陥つてゐる。(同書一八一頁以下参照)。尙ほ、同書は、資本主義と其の非資本主義的外國との交渉に力點を置くことによつてローザ・ルクセンブルクの帝國主義理論を繼承しつつ、批判的にそれを展開せしめた注目すべき理論的著作であつて、方法上の若干過誤にも拘らず、全體としてなかく啓發的である。

七、没落の過程

一〇六

帝國主義の時代は、世界大戦をターニング・ポイントとして、既にその後期に入つたものと言はねばならぬ。帝國主義時代の前期は、謂はゞ最後の「嵐と迫り」の時期として、世界的規模における資本の蓄積の急速なる進行を見た。植民地半植民地わけでも加奈太、南米、南亞、支那の諸地方の急激なる資本主義的「開發」によつて創造された龐大な商品需要は、既に國內的には行詰つてゐたドイツ、イギリス、アメリカの資本にとつての利潤源泉であつた。利潤率の低落は支へ止められ、労働の需要は増加し——無産階級運動における日和見主義勃興の經濟的基礎——、加ふるに金融資本の統制の下に、經濟恐慌の鋭さまでが失はれたかに見えた。——一口に言へば此の期間は帝國主義の段階に必然なる世界大戦を準備したものである。

だが、累積せる矛盾が大戦の形態において爆發したとき、世界資本主義の根底が震撼され、その「外被」は文字通り「爆破され」た。露西亞革命以來、現代の世界資本主義に見らるゝ没落期的徴候は顯著である。

一體系としての世界資本主義について言へば、その巨大なる一環——露西亞の資本主義——の崩壊と共に、既に現實に全體としての崩壊過程が開始されてゐる。此の過程は、多かれ少なかれ間歇的に行はるゝ他の一環乃至數環の崩壊を生ぜしめつゝ、進行せねばならない。

全體としても又た各環としても、資本主義の崩壊とは、之れを主觀的に言へば資本主義的生産關係の×××破却に外ならない。従つてそれは、結局において、對立する階級の力關係の問題である。プロレタリアートの力が、決定的の機會において決定的であり得る爲めの必須要件はいくつかある。が少くとも其の一つは、當の機會の政治的性質にかゝる。即ち、それは、レーニンがその外くの論著の多くの箇所指摘してゐるやうな條件を具備した特殊の Political crisis として到來せねばならぬこと之れである。が、さうした Political crisis の出現は、それに應當した物質的乃至經濟的基礎の存在する時にのみ可能である。そして、全體としての世界資本主義並びにその構成諸單位において斯かる political crisis の出現を不可避的ならしめる所の物質的乃至經濟的基礎の實在することこそは、後期帝國主義時代の現代の一主要特徴なのである。

世界大戦は、特殊の恐慌として、一方では生産力の異常なる破壊に結果した。通常の經濟恐慌にあつては、「過剰」生産物及び資本の破壊はそれ自身直ちに平衡再建の手段であり、經濟の安定化につれ、社會的資本はヨリ大なる規模においてその常態的な蓄積過程を再開する。だが、帝國主義大戦によつての生産力の破壊は、その性質上、平衡再建の爲めに必要なる過剰部分の處分のみで止まることが出來ず、遙かにそれ以上に及んだ。これが爲めに、大戦の後半から大戦直後にかけて、

一〇七

1) 例へば Lenin, "Left Wing" Communism, an Infantile Disorder, (London) P. 65 ff

特異の生産過剰状態を現出した。即ち、生産物の生産高を激減せしめながら、同時にヨリ以上に大衆の購買力を激減せしめることにより、ブハアリンの謂はゆる「飢餓恐慌」を廣大な規模において現出せしめた。此の事態こそは、露西亞、匈牙利、及び獨逸に湧起した革命的波浪、政治的危機の經濟的基礎として、露西亞における資本主義的「外被の爆破」と社會主義國家の樹立、並びに第三インタナショナルの創設に機會を供したものである。吾々は、これらの要因が演ずる至要な役割を認識することによつてのみ、正當に没落の過程を分析し得るであらう。

最近一二年間の世界資本主義經濟は、全體として一見安定化の現象を呈しつゝあることは事實である。だが、此の安定の眞の性質は、安定の獲得にあたつて克服されねばならぬ諸矛盾並びに當の克服方法の性質によつて決定される。また單に、現時の景氣不景氣の相——その循環の頻繁にして著しく不規則なる一事のみに徴しても、謂ふところの安定がたゞ極度の不安状態からの一時的脱出を意味するに過ぎないことが察知されよう。

歐羅巴の資本主義諸國——戦前までは世界資本主義の統一的中心をなせる——は、その平衡再建の努力において直ちに二つの事實に當面する。即ち既に指摘したところの、著しく過大なる生産力破壊と、廣汎なる大衆の窮乏化とがそれである。喪失せる生産力を資本主義的に恢復する爲めの第一前提は、生産物が商品として賣れ行く事である。しかるに、國內的には大衆の購買力の激減があ

り、國外の自由市場は狹隘であり、二三流國は農業國化し、國際的には競争が激烈である。加ふるに尨大な戦債の負擔がある。かくて、市場を見出すことは今や生産費の異常なる低下によつてのみ可能である。此の要件は先づ、新らたなるカルテル、トラストの形成によるヨリ高度の獨占化と、勞銀の切下げ及び搾取の強烈化とによつて充されねばならぬ。だが、資本家階級の此の政策の強行は、極度の反動的彈壓によつて一度は屏息せしめ得た勞働階級の大衆的反抗を、再び激發することなしに能くその目的を達し得るであらうか？（例へば、最近のイギリス、フランス、ドイツの右翼勞働組合内部における左翼オポジション運動を見よ）。昨年イギリスの鑛夫總罷業は此の點に關してわけても示唆的である。それ／＼に向ほ百萬を超える失業者を有する之等の諸國では、生産力の恢復の資本家的努力の道程に於て既に、階級關係の緊張から特殊の political crisis の展開を見るべき可能性さへがあるのである。問題の核心は、單なる生産力の恢復でも、發展でもなく、その程度および方法上それが果して大衆の生活標準を長期に亘つて過去の水準以上に引上げ得るかにある。そして生産費の低下を、優良なる機械装置の採用によつて實現せんとする企てが、大量生産化を伴ふ限り、一定の生産増加が過剰生産乃至は恐慌や不景氣に結果する度合ひは、市場の狹隘が甚しければそれだけ著大であり、急速であるべきことは言ふを俟たない。

後期帝國主義の現段階の特質として、一國の經濟における輕度の暫行的な安定でもが直ちにその

同をして帝國主義政策に向はしめる。(一度は完全に半殖民地化されたかに見えた獨逸にさへ、最近には既にその傾向が見えてゐる。) 特殊の恐慌としての世界戦争は、生産力と市場の制限との間の矛盾を排除せずして却つてそれを一層劣悪な形態に於て増大せしめたと同時に、他方では帝國主義國家間の——各自の獨占的經濟地域の膨脹程度における——國際的矛盾を克服する手段として現はれながら却つて彼等の資本の擴張再生産そのものを不可能ならしめる程に深大なる新らしき矛盾をつくり出した。資本主義國家としての存在それ自體さへが確かでない歐洲諸國のおの／＼にとつては、他國の生産力の實質的恢復乃至發展——それが極く僅かに比例以上に大なるものであつても——が、自家の發展乃至存立を脅かす程度は異常に大である。此の事實が如何に尖鋭なる國際的對立となつて現はれてをるか、國際政局に特別の注意を拂ふ者でなくとも知つてゐる。これらの諸國にあつては、交戦能力の十分なる恢復に先立つて既に絶望的な戦争の禍中に投すべき可能性さへがある。そして周知の如く、戦争が一國を政治的危機に導くと共に、或る種の政治的危機の豫想は一國を戦争に導き得るのである。

かやうに、國際政治的安定並びに個々の「國民經濟」の安定を單に相對的一時的なものに止どまらしめ、全體としての世界資本主義の發展過程に以前の如き常態性を失はしめるところの、新しき深大なる矛盾の出現は、戦争による生産力の破壊といふ事實を外にして尙ほ、世界的規模における

資本の擴大再生産の平衡條件に生じた根本的な、或意味において永久的な變化を、反映するものである。前期帝國主義の時代には、世界資本主義の統一的中心をなせる諸國は、大量の剩餘價值を、海外放資の利潤並びに植民地の政治的搾取物の形態において受取ると同時に、蓄積される價值部分の大量を、更に新らたなる海外放資として未發達の資本主義諸國及び半植民地的諸國へ送り出した。この流入する部分と流出する部分とが權衡を保ちつゝ増大すること——これが所要の平衡條件の重要なものであつた、之れと關聯する他の一つは、未發達の諸國から受取る原料及び食糧品と、それへ送り出す工業品との間の平衡であつた。しかるに大戰の結果として、これらの平衡を實現することは異常に困難となり、益々困難とならうとする。何故といふに、中心的諸國の生産力そのものが破壊されたと同時に、特に戦時の異常經濟の刺戟の下に、半植民地的諸國並びに後進國の或るものは急速に資本主義的生産を發展せしめたからである。彼等は今や自家の工業を保護せんが爲めに關稅壁をめぐらし、先進國の製品の市場たることを拒むと共に、外國資本の搾取及び支配より脱出せんとして有らゆる方策を講ずる。或は平和的なる、或は革命的なる手段によりての獨立運動、民族運動は、その政治的表現である。して此の種の運動——近くは支那における¹⁾——が、その不可避的な進展と共に、帝國主義諸國の間の衝突性を著しく増大することは睹易い。また、帝國主義諸國のよつて立つ植民地搾取の全基礎を脅かすことは視易い。

1) 後期帝國主義の現段階における革命支那の歴史的意義は二重である。(一)世界資本にとつての商品市場、原料資源、乃至放資範圍としての支那それ自身の意義、(二)民族的革命もしくは反帝國主義運動としての成功が全東洋乃至全世界の植民

かゝる全事態の最重要な一契機として勞農露西亞がある。廣大な此の國の全地域に亘つて打樹てられた社會主義は、既に著しく安定し、日に／＼安定化してゐる。茲に吾々は、資本主義の全生涯史における全然新たなる動因を有ち、全然新たなる對立形態を見出すのである。——頽廢の資本主義と、新興の社會主義との、果進的に尖鋭化すべき現實の對立！¹⁾ ×××プロレタリアート及び被壓迫民族の國際的規模における結成及び闘争は此の對立を核心として擴大し、進展するであらう。が、此の事實の特殊の重要性は、勞農露西亞の地理的位置から生ずる。一方において荒廢の歐羅巴に接する此の社會主義國家は、他方では×××な被壓迫民族の東洋に續く。

世界資本主義の新たなる中心となりつゝある米國の獨占的資本主義は、暫くは尙ほ顯著なる發展過程を辿るであらうとはいへ、その擴張再生産の進行がますます／＼革命的な歐羅巴及び半植地諸國の運命に依存することによつて、全體としての没落の過程と密接に結ばれてゐる。帝國主義の段階は、その前期において既に全體として「停滞的な資本主義」を代表した。が、「そのことは決して個々の産業部門、個々の國、個々の期間における資本主義の驚くべき急激なる發展を排除するものでない。」²⁾ 此のレーニンの言葉は、殆んど其のまゝ、帝國主義の後期即ち没落の資本主義に適用することが出来よう。(一九二七、三、五。)

地及び半植地諸國に及ぼす影響としての意義。

2) Lenin „Ausgewählte Werke“ S. 327.

資本主義日本の帝國主義

——ひとつのボレミーク——

本稿は、我國社會運動の右翼の理論的指導者をもつて任ずる高橋龜吉氏の論稿「日本資本主義の帝國主義的地位」その他を批判しつゝ我國の帝國主義の現段階の特質を究明せんとしたものである。論ずる所は、帝國主義理論の、具體的現實への一適用としてもまた、若干の價値をもつてあらう。高橋氏との論争は、尙ほ續行されぬとも限らないから、雑誌「改造」六月號に發表した本篇を本書に收むるに當つても、誤植を正した外は、原意を變じない範圍内で言葉づかひを改める程度の二三の訂正を施すに止どめ、且つ必要と認められた限り其の旨を註記して置いた。

一、問題の重要性

(1) はしがき

これまで、わが國の無産階級の大きいなる努力の一つは、我國における無産階級イデオロギーの確立にむけられて來た。無産階級の「理論闘争」は急速に進展した。理論的究明の對象は、一般的、抽象的なものから、次第に特殊的、具體的なものに移り、問題の重心は今や、我國資本主義の現段階の特質如何の一點に置かれようとしてゐる。まことに、此の點を十分に見究めることなくして、わが無産階級の闘争の戦略および戦術の一般的基準は規定されることが出來ない。しかるに、我國資本主義現段階の問題は、私が本論の主題、本篇の標題たらしめてゐるところの、「資本主義日本の帝國主義」の性質と地位、わけてもそれが世界資本主義の没落過程において演ずる役割如何の觀點からそれに近づく時にのみ、正しく把握され得るであらう。

茲に主題とされてゐる問題に見らるる所の、斯かる理論的關聯に加へて、吾々は更に、その有する特殊の實踐的重要性を指摘せねばならぬ。わが無産階級がますます明確なる意識の下に政治闘争の段階に進出せんとしてゐる時、恰もその、更に格段なる意識化を強要するものゝ如く、我國の帝國主義は今や、わが無産階級に、果敢なる「對支非干涉運動」を遂行すべき任務を、現實に課し

た。そればかりではない。我國の労働運動の一角には早くも、對支非干涉運動における無産階級的精神に根本的修正を施さんとする要求が高かく掲げられた。そして吾々は飽くまでも、かゝる歪曲と闘はねばならない。

かうした要求に理論的根據を與へんとする企ての、論篇の、既に發表されたものも少くない。私は茲では、その最も有力な、最も代表的なものとして、特に高橋龜吉氏の論文を、批判の對象たらしめるであらう。私は、これが批判の過程において、極東日本の帝國主義の特質——まさに現段階における——を、明かにし得ると信ずる。

高橋氏は、我國資本主義經濟の研究者として、また、わが労働運動の指導者として知られて來た。また、氏は現に日本農民黨の顧問として特殊の指導的地位にある。雑誌「社會科學」帝國主義號並びに「太陽」四月號に現はれた氏の最近の二論文、「末期における帝國主義の變質」と「日本資本主義の帝國主義的地位」とに於て、氏によつて提起された諸問題は、就中、次ぎの諸點の故に重要視されねばならない——

一、隣邦支那の被壓迫大衆によつて捲き起された「打倒帝國主義」の運動、——此の、世界的に至要なる無産階級の意義を有つ運動が、わけても我が無産階級の徹底的協力を要求して止まない時、「日本は果して帝國主義國なりや」と氏は問ふてゐる。

二、わが無産階級の政治的戰線の一大展開を前にして、氏は、レーニンの謂ゆる「無産階級運動の戰術を規定するところの、帝國主義時代の客觀的諸條件」¹⁾の、我が日本における特殊の特質は何かと問ふ。

三、我國の「人口問題」の「解決」なるものが、ブルジョア諸政黨の政綱を賑はしてゐる時、ブルジョアの「人口問題」とそのブルジョアの「解決」とにおける必然の犠牲者たる被壓迫大衆の指導者をもつて任ずる高橋氏が、日本の無産階級は「人口問題」の故にこそ英米佛の帝國主義と戦はねばならないと説く。

(2) 高橋龜吉氏の、左翼への挑戦

高橋氏の論ずる所はなか／＼多岐にわたるばかりでなく、理論の部面においてはレーニン及びレーニストを援用し、事實の部面は之れを詳細なる統計的數字をもつて裏づけようとしてゐる。それらの援用と統計的數字とが氏の全議論にとつて如何なる論證力を發揮するかは、私の間もなく讀者の前に展示しようとする所であるが、それに先立つて氏の主たる論旨の輪廓を一通り見取り置くことが便利であり、順序でもあらう。私はそれを、凡そ次ぎのやうに要約し得ると信ずる——

レーニンの帝國主義の理論に従つて、日本資本主義の帝國主義的地位を検討するに、それは

1) レーニン選集(獨逸本) 334頁

決して彼れの謂ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまでは發展してはをらない。日本は、「なるほど帝國主義」的であるかも知れないが、しかし、それは精々の所、大ブルジョアに對する小ブルジョアの如き帝國主義「的」國であつて、若しブルジョアと云ふ言葉に做つてブルジョア・帝國主義國といふ分類が出来るならば、日本はそのブルジョア・帝國主義國の一つに過ぎない。そしてブルジョアの利害が、大ブルジョアよりも寧ろ無産階級のそれと一致するやうに、ブルジョア・帝國主義國の利害は、大帝國主義國のそれと一致する所よりも、被帝國主義國（即ち植民地や半植民地國……猪俣）と一致する所多く、従つて、……日本の國際的地位に即して考へる限り、その反帝國主義運動（日本の反帝國主義運動……猪俣）の中には、必然に國民的運動（即ち現時の支那國民の運動の如きもの……猪俣）の色彩の附隨することを免かれ難き地位に、未だ日本はある。」¹⁾

しかるに、わが日本の無産階級運動の「左翼理論」は、「現に日本の資本主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまで（即ち資本主義の最高段階にまで……猪俣）發展したるが故に日本の資本主義が崩壊に直面するものとなしてゐる。」²⁾「左翼の理論の「直譯」の直譯たる所以の主なる一つは」そこにある。³⁾

しかるに、レーニンは實に、「被帝國主義國（即ち植民地や半植民地諸國……猪俣）における國

1) 太陽四月號、5頁、6頁。高橋氏の此の論文は氏の著書「左翼運動の理論的崩壊——右翼運動の理論的根據」に收められてある。45頁。
2) 太陽 3頁。著書 41頁。 3) 同上。

民運動乃至民族運動が、帝國主義の打破と如何に密接な關係にあるかを洞察し、「斯様な被帝國主義國の民族運動、國民運動に、極力支持を與ふべきことを力説し、」⁴⁾「國民の「自決權」を否認して小國の民族的運動に侮蔑的な態度をとる」⁵⁾（レーニンの言葉）やうな同志を戒め、「長い間奴隸とされて來た國民及び國民の間に殘存してゐるこの國民的偏見（即ち小ブルジョアの偏見、國民主義、國民的孤立……猪俣）に、特に洞察を持ち、注意を拂ふの義務がある」⁶⁾（レーニンの言葉）と述べてゐる。⁷⁾で、（高橋氏は云ふ）『日本の國際的地位が、我國左翼理論の盲信せるが如く帝國主義階級の仲間ではなくて、寧ろ反對に被帝國主義階級（即ち植民地や半植民地……猪俣）の仲間に入るべきもの』である以上、「我が左翼今日の戦陣は、この點において（即ち日本といふ弱小民族の打倒帝國主義の民族運動を支持せざる點において……猪俣）根本的に覆される事になる譯である。』⁸⁾「又、其（日本といふブルジョア帝國主義國における無産階級運動の……猪俣）國民主義的感情に對しても、單に「侮蔑的な態度をとつて」⁹⁾（レーニンの言葉）得々としてゐるが如き小兒病を慎まねばならない譯である。』⁹⁾

右によつて明かであらうやうに、高橋君の全意圖は、日本帝國を弱小國に、帝國民 被壓迫民族に仕立てあげつゝ、氏の最近の二論文をば、此の弱小國を愛せざるかの如き不屈きの「左翼」に對する挑戦状たらしめようとするものである。もつとも、氏は寛容にも、「社會科學」所載の論文「末

4) 太陽 3頁。著書 4頁。
5) 太陽 3頁。著書 44頁。
6) 太陽 5頁。著書 44頁。
8) 同上。

期における帝國主義の變質」を斯う結ばれた——『その故に、私は、從來より、現在の我國左翼理論、従つてその戰術に反對し來つたのである。さう乍ら私は無論、私の考を頑固に守らうとするものではない。若しも、私の考へが間違つてゐると云ふことが分れば、私は、少しの躊躇もなく左翼の軍門に降るつもりである。』

尙ほ讀者にとつて若干の興味でもあらうことには、前の引用文によつて明かなやうに、氏は『左翼の軍門に降る』に先立つてまづ、レーニンをもつて左翼を「覆へし」て(1)をられる。

二、問題は如何に提起されたか

(1) 「資本主義最後の段階としての帝國主義」

帝國主義の理論におけるレーニンの地位は、帝國主義の段階におけるマルキシズムの發展こそがレーニズムであるとされてゐる程に決定的である。が、此理論的部面におけるレーニンの勞作は概して、多かれ少なかれボレミークの形をとる多數の小論文として現はれてをり、「資本主義最後の段階としての帝國主義」といふ標題を帯びた一著さへが、僅々百頁余の、著書といふよりは寧ろパンフレットであり、内容とする處も亦た従つて理論といふよりも多くモノグラフの性質を帯びてゐる。

8) 太陽 6頁。著書 45頁。引用文その他の傍點はすべて猪俣のもの。

わが高橋龜吉氏は、専ら此の一著に據らんと欲し、氏の「日本資本主義の帝國主義的地位」なる論文の冒頭を、次ぎの一句で起してをられる。

「云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」は、之をそのまま(そのまゝ)……猪俣)日本資本主義に當嵌める(!!…猪俣)ことが出来るかどうか。」¹⁾

これによつて氏の間はんとする所は、日本の資本主義は既に「最後の段階」にあるか? 日本の帝國主義は斯かる段階を代表するか? といふにある。そして高橋氏の此の問題提起そのものが頭から間違つてゐるのである。吾々はそれにおいて、混亂の極大限と、意義の皆無とを見るのみである。なぜ間違つてゐるといふか?

茲に「最後の段階」なる言葉で特性づけられた「資本主義」は、斷じて一國の資本主義を意味せず、資本主義全般を、資本主義全般としての世界資本主義を、意味する。²⁾ 氏にしてもし、氏の據らんとするレーニンを讀むに際し初等的な理解をだに有たれたならば、又た氏の覆さんとする「左翼理論」に對し、當然にそれが要求する所の注意をだに拂はれてゐたならば、氏のなせるが如く問題を提起する事は初めから不可能であつたであらう。レーニンはその著書の殆ど開卷第一とも言ふべき頁——高橋氏の引用された邦譯本(白楊社版)の第九頁——に於て同書の「主要任務」を述べ、それは、『争ふべからざるブルジョア統計の總括的報告と、總ての國家のブルジョア學者の自白とを用ひて、資

1) 太陽 2頁。著書 39頁。

2) 「改造」に發表した論文には、「資本主義一般」となつてゐた。一般を全般と訂正して置く。以下準ず。

本主義世界經濟の總果を示すことにある……』と明記してゐるではないか。そして志賀義雄氏は、夙に大正十四年六月の「マルクス主義」において、資本主義の崩壊との關聯における帝國主義を論じ、『帝國主義は一連の世界資本主義經濟の鐵鎖である』ことを、簡潔にも又た力強く指摘し、しかもそれを、高橋氏の經濟思想そのものによつて基礎づけられたかの如き赤松克麿氏の謂はゆる「科學的日本主義」に對する批判において、指摘してゐるではないか。

(2) 引用されたレーニンの定義

だが、此の點は、實に高橋氏自らの引用するレーニンの言葉のうちに、更に明白にあらはれてゐるのであつた。レーニンは曰ふ――

『帝國主義の出来るだけ簡單な定義が必要ならば、帝國主義は資本主義の獨占的段階である、と言はねばなるまい。この定義は、本質的なものを含むことにならう……だが、餘りに簡單な定義は、最も重要なものを要約するが故に便利だとはいへ、定義すべき諸現象の本質的な諸特徴が特にそれから読み取られねばならぬとなると、不十分なものである。従つて吾々は、――どんな定義でも發展の過程にある諸現象のあらゆる關聯を包括し得るものでは決してないから一切の定義は總じてたい限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに――、次の如き

3) マルクス主義、大正十四年六月、31頁。

4) 「世界」の傍點は猪俣の、「總果」の傍點はレーニンのもの。

五つの、その最重要な特徴を包含するやうな、帝國主義の定義を工夫しなくてはならない。――(一)經濟生活にとつて決定的な諸獨占をつくり出す程に、それほど高度の發展段階に達してゐるところの、生産及び資本の集積。(二)銀行資本と産業資本との融合と、そして――此の「金融資本」の基礎の上に――金融寡頭政治の成立。(三)商品輸出と區別される資本輸出が、特に重要な意義を有つ。(四)相互の間に世界を分けるところの國際的、獨占的資本家諸團體が成立つ。(五)資本主義強國間の、世界の領土的分割が終結してゐる。

(即ち)帝國主義は、獨占と金融資本の支配が確立され、資本輸出が優れた重要性を得、國際的トラストによる世界の分配が始まつてをり、最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が結了されてゐるところの、そうした發展段階における資本主義である。』¹⁾

(3) 出發點の誤謬

これは、レーニンが、帝國主義に與へた定義である。此の定義の對象たる帝國主義が、「一國の帝國主義」ではなく、謂はゞ「世界的規模における帝國主義」であり、その意味の「帝國主義」があらはす所の一定發展段階の「資本主義」は、當然に、資本主義全般、世界體系としての資本主義であつて、個々の國家組織の枠内にある個々の資本主義であり得ないことは、定義を一讀する者の直ち

1) 傍點全部と、(即ち)は猪俣のもの。高橋氏によつて引用された邦譯本の此の一節は、あひにく誤譯と脱漏とがあるから、序でながらすべて私の譯文に書き直しておいた。私の譯文は、獨本ウエルトハイム版79-80頁と、英本ロンドン版103-104

に看取し得るところである。資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴が、資本主義世界體系の諸特徴であればこそ、國際的トラストによる世界の分配や、強國間の世界分割が、主要特徴として擧げられ得る。實にそれらは、單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始から意味をなさないものではないか。また勿論、これらの五特徴は、不可分的な一綜合としてのみ、帝國主義のエポックの本質をあらはし、そのおの／＼は、相互制約的なると同時に相互補足的なる關係にある。吾々は、高橋氏に立戻り、レーニンより此の定義を借り出して來た氏が、如何にそれを運用し、利殖せんとせられるかを見よう。氏はおもむろに言はれる――

『以上がレーニンの云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」である。なる程、（讀者よ、この「なる程」に用心あれ。猪俣）、世界的に云つて（恰も、世界的に云はなくてよいかのやうに！。猪俣）、斯様な現象が近年著しくなつて來たことは事實であるが、しかし乍ら（？猪俣）、その故に日本の資本主義（それ！。猪俣）も亦、斯様な所まで（？。一體どの様な所まで？日本の資本主義に於て世界の領土的分割が終結したりするやうな所まで？猪俣）、發展したと云ふわけでは無論ない。（そも／＼そんなことが考へ得べきことだと言はれるのですか？。猪俣）¹⁾無論ない。「そこでいま、（いよ／＼定義の運用が始まる。猪俣）、日本（といふ一國。猪俣）の資本主義現在の發展段階そのものを（そのものを。猪俣）、レーニン

とによる。（尙ほ邦譯本の譯者からの來狀によるに、私の謂ゆる「誤譯と脱漏」は、譯者の責ではなく、譯者の用ひた臺本が悪るいのである。臺本は舊ビブリオテーク版） 1) 太陽 9頁。著書 51頁。

の「尺度」によつて（即ち世界資本主義の諸特徴そのものによつて。猪俣）はかつて見ることにする（!!。猪俣）。²⁾」

(4) 直譯と誤譯

帝國主義は、前記の五特徴の故に、資本主義全般——資本主義世界體系の最後の段階を代表する。この「資本主義最後の段階としての帝國主義」を、そのまま日本の資本主義に當倣めることが出来るか、といふ高橋氏の問題提起それ自體を、なぜ私が失禮にも「頭から間違つてゐる」などと言つたかは、これぐらひで大概わかるであらう。が、同時に、適用すべからざる「尺度」を、或る、えたいの知れぬ目的の爲めに強いて適用せんとしてゐる者は、外ならぬ高橋氏それ自身であることもまた解つた。今や吾々は、讀者と共に、次ぎの事を想起する。即ち氏は、「左翼理論」なるものを評し、それは『現に日本の資本主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまで發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面する』となすが故に「直譯」であると難ぜられたのであつた。さうした珍奇な左翼理論なるものを、氏が、氏の混亂せる頭以外の何處から引出して來られたかを知るの自由は、吾々はあひにく氏によつて毫も與へられてをらない。だが、果してそれが直譯であるかを問題とする前に既に、今ま見る如き尺違ひの「尺度」を「そのまゝ當倣める」ことによつて立てら

2) 太陽 9頁。著書 52頁。

れんとする高橋氏の全議論こそが、文字通りの直譯であるのみならずまた實に誤譯として、氏の全頭腦を反映するものでなければならぬことを指摘するの自由は、まさに吾々の物のやうである。

(5) 日本を創作する者

以上において明かにされた、氏の方法上の誤謬——それが過失であれ故意であれ——は、まことに致命的である。かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる結論でもが、みな、誤謬であると結論することはたやすい。だが、吾々は、氏が斯かる方法を適用して達成せんと欲する究極の目的をも讀者の爲に摘發し、批判する義務があると感ずる。従つて吾々は、先づ、何等かの動機の下に特に世界的な「尺度」をば眇たる日本列島に當て箴めることを選ばれた氏が、如何なる苦心と努力とをもつて如何なる日本を捻出されんとするかを、氏の手續の各節を追つて確めるであらう。が、前にも示唆しておいた通り、氏によつて創作されんとする日本は、半植民地國級の弱小國である。高橋氏と限らず、およそ強大國を弱小國に變装せしむる爲めに「レーニンの尺度」——しかも尺違ひの——を借用するといつた方法を選ぶからには、誰しも多少の無理は覺悟せねばなるまい、——虚構、隱匿、すり換へ、詐欺……(だが、おゝ、せめて此の最後の言葉だけは紳士の名譽の爲に撤回せしめよ！)

三、我國資本主義の現段階

(1) 資本の集積とその隱匿

で、吾々は高橋氏と共に、「生産及び資本の集積」から始めるであらう。

我國に於ける集積の状態を示唆し得る數字は少くない。しかるに、數字には特別の愛好をもたれるかの如き氏が、何故か茲では一切の數字を忌避し、たゞ「生産の集積……は……英米獨等のそれに比較すれば殆んど言ふに足らないと云つてよい」といふ獨斷で、極くあつさりと言附けられたと云つてよい。だが、昔から、「事實は頑強」であり、さう簡単に片付いたためしがない。統計上、大正十二年において既に、我國の五人以上を雇ふ工場に働く労働者總數の三八%は、五百人以上の巨大工場に在り、六〇%は、百人以上の工場に、七〇%は、五十人以上の工場に在つた。直ちにこれと比較し得ないにもせよ、参考としては十分に役立つところの、獨逸の一九〇九年の數字を挙げれば、工業、鑛業、及び建築業における労働者五十人以上を雇ふ経営に在る労働者の數は、總數の四五%に過ぎなかつた。高橋氏は、日本には五人以下の小工場が多いと言はれる。いかにもさうした工場の數は多い。しかし一工場の労働者數が五人以下といふ少數である以上、かゝる過小工場労働

者の總數は知れたもので、之れを加算しても前掲の百分比に幾何の變化も生じないことは、必要あれば私の何時でも立證し得る所である。

現時の企業資本の主要形態たる、株式會社企業の形態をとる資本の集積はどうか？ 一九一二年の英國には約五萬五千の株式組織の企業があり、一會社平均の拂込資本は約四十八萬圓であつたが、大正十二年の日本には、同様な企業が一萬七千ほどあつて、一會社平均の拂込資本は五十萬圓強になつてゐる。また、一九〇九年の獨逸においては、拂込資本五百萬圓以上の會社は二百五十社ほどしかなかつたのに、大正十二年の我國においては、同様の大會社が五百六十社近くあつた。更にまた同年において拂込資本五百萬圓以上の會社の資本は、拂込資本總體の六一%を占め、一千萬圓以上のものは、三一%に達してゐる。

大正十二年における我國の銀行資本の集積程度は、一九一三年の獨逸のそれよりも劣つてゐた。獨逸では當時において既に、最大の八銀行の銀行資本（拂込資本と積立金と預金との和）は百三十二億マルクに達し、此の資本力は、獨逸の大銀行及び中銀行の銀行資本の八三%餘を占めてゐた。しかるに、震災の年の日本では、最大の普通銀行十五行の銀行資本が普通銀行の銀行資本總體の四五%に達してゐる過ぎない。だが、それは四年前のことであり、其後の四年間には周知の如く銀行資本の集中は急速に進んだ。加ふるに、最近の六銀行の破綻に續いて今や最大銀行の一なる第十五

銀行以下の三十餘行が破産状態に陥つてゐる。此の「財界混亂」のアウトカムが、資本の集中となり、少數巨大銀行の銀行資本の急激な膨脹となるべきことは、多くを語らずとも明かである。もし來年末において、獨逸にならつて最大の八銀行をとり、それらの銀行資本總額を求めたならば、恐らく全銀行資本の八割には達しないとしても優に六割には近づくであらう。そしてかゝる資本力は、謂はゆる「金融制度の改革」と相俟つて、それら少數の巨大銀行による全金融市場の統制を可能ならしめ、「金融寡頭政治」の物質的基礎に、更に強大な一礎石を加へるであらう。

以上の如き數字は畢竟するに數字であつて、生産及び資本の集積の程度を示す單なる指標以上のものではない。また我國の數字を歐米のそれと比較することも、技術上の諸困難に加へて、各國の歴史的發達の所産たる經濟的政治的機構の相異の故に、無意味に近い場合もないでない。だから私は、右の數字によつて直ちに我國における集積の程度と戦前の英米獨のそれとの異同を論定しようとするのではない。だが、吾々は、それらの數字を示すことによつて、高橋氏の謂はゆる『英獨米のそれに比較すれば始んど言ふに足りない』と云つてよい』といふ立言のうちにかくされてゐる氏の苦心の一端は之れを明かにし得たと信ずる。更にまた、以上及び以下に於て明かにするところの、集積、獨占、金融資本等に関する我國の現状は、それ自身直ちに帝國主義國としての日本の全特徴を示すものではない。示すかの如き見解を強いんとする高橋氏の誤謬こそは、私の反覆強調したと

ところである。だが、それらの現状の闡明は、日露戦争以来の日本帝國主義の經濟的基礎に生じたところの最近の變化——しかも異常な變化と、従つてまた日本帝國主義そのものに生じた最近の變質の實相とを明かならしめるに役立つであらう。詳しくは後段

尙ほ以上において言ひ残されてゐる重要な一點は、我國における生産及び資本の集積の程度の論定は、それ自身既に獨占的なる國家資本を除外しては全く不可能だといふことである。かゝる國家資本は、鐵道、郵便、電信、電話、製鐵、石炭、造船、兵器、煙草、木材、その他の企業において産業資本として作用し、その總資本額は既に三十億を超え、工業、鑛業、運輸における「民間」會社資本總額の半ば以上に達するほどのものである。そして我國における金融寡頭政治、もしくは「財閥政治」は、此の國家資本との關聯においてのみ機能する。¹⁾

(2) 「金融寡頭政治」のお伽噺

さすがに高橋氏と雖も、『金融寡頭政治は少なからぬ程度にまで進みつゝある』といふ程度の事實の認識までを拒否することは出来ない。また、『而して「財閥政治」は現に大なる力を振つてゐる』ことまでは勇敢に承認される。だが、氏の心眼に映するところの、此の金融寡頭政治、財閥政治なるものは、『謂はゆる「金融資本を基礎としての」それではなくて、それとは別な力を基礎とし

- 1) 國家資本の地位については本年二月の「政治批判」において既に林二郎氏が指摘してゐる。
- 2) 太陽 11頁。著書 56頁。傍點は猪俣。

たものである。³⁾ しかも其の神秘的な「別な力」の正體について語る事は、すくなくとも氏が日本帝國の帝國主義を論ずる際には、「×××××」でもあるかのやうに、氏は敢て沈黙を守られる。

では、如何にして氏は、金融資本を無視することが出来たか？ 氏の手續きは茲でも至極簡單である。氏は、先づ、「普通銀行運用資金中放資高調」と題する一表を掲げ、それにおける「合計」の數字を、「所有株券」なる項下の數字と對比し、『斯様に銀行資本が産業資本化した高は(それは大體に銀行の株券所有高以外にはない筈である)總計約百十三億の内、三億圓として、即ち百圓につき僅々約三圓の割合にしかたつてゐない!!』と歡呼される。

だが、待たれよ。銀行が株券に放下する資本のみが金融資本でない位のこととは、此の資本概念に一顧をでも與へる者の直ちに見得る所ではないか？

高橋氏の利益の爲めに尙ほ一言すれば、氏が金融資本の總高(一)として高かゝと差しあげられる三億ほどの「端した金」でさへ、その全部が、『銀行資本が産業資本化した』ものではないのである。氏の知らるゝ通り、銀行の所有する株券は謂はゆる事業會社株だけではないから。

誰もが氣づくであらうやうに、特種の動機に囚はれた高橋氏の意識には、銀行資本が、銀行の資本として映じ、(でなければ二つのすり換へ)、金融資本は、ひとへに銀行が産業會社に投下した資本として映じてゐる。かゝる意識にとつては、金融資本を機能的に概念することの如きは、全

3) 同上。

4) 太陽 11頁。著書 59頁。60頁。

く無縁であらねばならぬ。

一三二

茲では氏は、ヒルファデングとパブロヴィツチとレーニンとが金融資本に就て述べてゐる三つの定義やうの特性記述を並べて氏の金融資本概念を裏づけ様としてをられる。そして氏の手続きは茲でもまた、「發展に於ける諸現象のあらゆる關聯を包括し得」ざるを常とする「定義」は「限られた相對的な意義しかない」事を全く忘れ、最も典型的な發達を對象としてそれを一般、抽象的に特性づけてゐるそれらの「定義」をば、特殊の歴史的發展の所産として今また特殊の生成過程にある我國の金融資本に、「そのまま當籤め」様とする事に盡きてゐる。氏の「直譯」は、再び誤譯たるのみである。「生産の集積、それから生れて來る獨占」は、我國においては必然に先づ國家資本の形において成熟せざるを得なかつた。氏はかつて、わが大藏省預金部の資本が演じつゝある機能に想到されたことがあらうか？ それは、國の内外において産業資本化されたる強大な金融資本である。氏はかつて、産業、商業、金融の三大分野に亘る混成企業形態をとる三井、三菱、住友等の資本の機能に想到されたことがあらうか？ それは、「財閥政治」の物質的基礎の一として強大なる金融資本である。そして、自余の諸財閥が相次いで設立し來たつた「保全會社」は？ そしてまた、輓近の財界に「花形」と謳はれる「信託」は？

だが、氏の頭には「銀行資本」の「銀行」がこびりついてゐる。では最近の過去數年間に、曾つて

4) 高橋氏の引用せるレーニンの定義中の一句。太陽 13頁。著書 59頁。

無き巨額の社債の引受けに用ひられた銀行資本は、如何なる資本として機能したか？ また戦後恐慌以來最近に至るまでの數十銀行の破綻は、銀行資本の機能における如何なる變質を暴露したか？

——だが、本來、高橋氏に向つてかく問ふことは、「釋迦に説法」の類ひである。我國における銀行資本の急激にも又た多大なる産業資本化の傾向に至つては既に餘りにも顯著な出來事であつた。四月九日の「東洋經濟新報」は、全國普通銀行の預金及貸出状態に就て曰ふ——「定期、特別當座、」其他」の三口の預金計七十一億〇八百萬圓の中、右手許準備金六億圓を除ける残六十五億〇八百萬圓は、我が普通銀行が、公衆より預りて公衆に代つて長期放資を行ふてゐるものである。かくて、我が普通銀行は、商業金融機關といふよりは、寧ろ（聽かれよ、讀者！…猪俣）企業放資の金融機關たる色彩が濃い。こゝに我が銀行業の病根が横はる。』

生産の集積、資本構成の高度化は、我國における銀行資本の産業資本化を要求して止まない。かかる變質は、必然的に、それに對應すべき金融機構の創造さるゝに先立つて生じた。ブルジョア的意識にとつては、その事態が「銀行業の病根」として映じ、金融資本時代への順應が「金融制度の改善」を意味するのである。

世界資本主義の一環としての日本資本主義の特殊の發展過程における、現下の全事態の分析において、その本質に即して金融資本を見るか、それともブルジョアと共にとり現象の表層に彷徨

するか、——二者擇一の自由(と言つて置く)は、わが高橋氏の前にある。氏が何づれを擇るにせよ、氏の擇一と共に、氏の謂はゆる、金融資本を基礎とせざる金融寡頭政治なるものも亦た、一篇の御伽噺と化するであらう。

(3) 獨占の段階を跳び越える?

金融資本を看過し、集積を隠匿される高橋氏が、我國における獨占をも亦た、「英米獨等のそれに比すれば始んど云ふに足らない」とされたとしても、もはや驚くやうな者はあるまい。

吾々をもつて見れば、日本資本主義は、二つの意味に於いて明かに獨占の段階に入込んでゐる。
 (一) 獨占的地位を有する二様の大資本が、我國の經濟生活にとつて決定的な意義を有つて來た。
 (二) 重要産業の各部門においても、競争の自由ではなしに、競争の制限乃至廢止が、原則として要求され、承認されてゐる。

一、獨占的地位を有する二様の大資本と言つたその一つは、既に言及した國家資本である。いま一つは混成企業形態をとる最大資本である。三井、三菱等の資本は、關係分野の個々の事業部門乃至分枝の多くのものにおいて獨占的であるばかりでなく、一全體として獨占的である。「獨占」とは、最廣義には、何等かの優越による一定範圍内の無競争状態に外ならない。かかる混成企業形態

1) 太陽 10頁。著書 52頁。

の最大資本と國家資本とは、その獨占的機能において相關的、相互補充的である。此の關係あるに加へて、そのいづれもが我國の重工業を占領してゐること、——そこに之等の資本の決定的な力が生ずる。

二、放下資本の觀點からの重要産業部門として、拂込資本が一億圓以上に達する十一部門、鐵、石炭、石油、造船、電機、人肥、製紙、綿絲、毛織、電力、運輸を見るに、企業結合による競争の制限乃至廢止の行はれてをらぬものは、新興企業たる電機、電力を外にして、僅かに石油、造船、運輸があるにすぎない。しかるに電力は、それ自身、地域的獨占の性質のものであり、且つ近年の急速なる投資の結果、輓近の本事業に見られる競争は既に相互致命的な性質を帯び、協定かトラスト化か國有かの何づれかを要求してゐる。石油では、トラスト化の過程より生れた一大會社が獨占的地位を占め、造船では、混成企業形態の資本が獨占力を有し、然らざる資本——例へば松方、鈴木等の資本の敗北によつて、いよゝゝ決定的な地位に近づく。運輸のうち海運にあつては、造船におけると同様、國家統制の下に、自由競争は既に排除されてをる。鐵道は、地方鐵道として、國家資本の一部門を代表する鐵道省の支配下に地域獨占を享有する。官線の電化と共に、電力の資本も亦た國家資本に依存し、少くとも實質的には兩者の融合が生ずるであらう。尙ほ、放下資本高においてそれらに劣る諸部門にも、カルテル、トラストによる獨占、乃至は一大企業による獨占が見ら

れる（糖業、セメント、製粉、製麻、染料、板ガラス、等、等）。

以上の十七部門中、石油と綿紡とセメントとを除いた十四部門において、混成企業態の巨大資本もしくは最大の銀行資本の支配的地位は既に確立されてゐるか乃至は確立に近づきつゝある。でなければ斯かる資本の急速なる進出が見られる。かゝる事態は、独占的な金融資本の制覇の過程の一面に外ならない。

商業及び土木に於ける、財閥資本の独占的地位に至つては、それこそ「古い話」である。戦後恐慌以来、單獨態の大商業資本の没落はまことに顯著であり、（茂木、高田、鈴木、等）、その商權は、混成態の巨大資本の商業部門の手に歸した。これが、独占的な金融資本の制覇の過程の他の一面でなくて何であらう。

茲に述べ來つたやうな独占の成立は、毫も資本家相互間の對立及び闘争を排除するものではない。かゝる對立、闘争は、資本主義の存続する限り存続する。無産階級は、資本家階級との闘争において此の一點を看過してはならない。だが、恐らくそれにも増して看過すべからざる事は、我國においての、さうした資本家的對立闘争は、もはやかの古典的な「自由競争」の形態をとることが出來ず、只だ「独占」の枠内においのみ、また「独占」の手段をもつてのみ、行はねばならぬこと之れである。金融資本と同じく此の場合にもまた、独占の實質的成立にも拘らず、その似合

2) 本項については、「社會科學」六月號及び「大衆」四月號の薄茂人氏の論文を参照あれ。

ひの上衣としての經濟的政治的機構、わけでもその細目の創造が後れてゐる。かゝるものの創造は、資本家的對立闘争——内部的及び對無産階級的——の過程を通じて急速に進展するであらう。

高橋龜吉氏の「日本經濟の行詰」は著名である。だから吾々は氏に問ふであらう。「行詰」れる日本の産業は、「自由競争」の「ありしよき日」に立返へることが出来るか？ かゝる産業に體現される資本によつての、局面打開の最後努力は、國內的には、競争の制限及び廢止——独占化の手段によらずして可能であるか？ 自由競争が資本主義的發展の「開花期」の指導原理であるならば、その否定としての独占こそが、その「凋落期」の決定原理でなかつたか？ かくても尙ほ独占は、「行詰れる」日本の經濟生活にとつて決定的意義を有たないと言ふのであるか？

それともまた、独占の段階を飛越えた崩壊過程を我が資本主義に見らるゝ程に、それほど「革命的」で氏はあるといふのか。独占の考察においても、氏の直譯的誤譯の跡は余りにも歴然たるものがある。だが、それへの論及は、もはや讀者の退屈を招くに過ぎまい。

(4) 資本輸出、——あゝ一と昔前の債務國

私の議論のかゝる段階において早くも私は、私の思想的生産力——呵々——と、雑誌「改造」の

3) 高橋氏の著書「日本經濟の行詰と無産階級の對策」その他。

紙面の制限との間の矛盾の増大を痛感し始めてゐるものであるが、しかも尙ほ私をして我國の「資本輸出」の問題の爲めに費すべき數行を取上げて割愛し得しめない程に、それほど此の問題は、高橋氏によつて興味深く扱はれてゐる。といふのは、氏は、大正十三年末現在とある大藏省發表の「對外投資額調」なる一表と、同じく大藏省發表の「外資輸入額現在表」なる一表とを掲げ、おの／＼の數字の總計を比較し、『我國は資本輸出國どころか、逆にその輸入國であることが分るのである』と結論されてゐるからである。だが、此の對外投資の數字たるや、對支投資總額を僅々十四億足らずに見積つてゐるほどに如何がはしい物であるばかりでなく、支那、南洋、露西亞への投資を擧げてゐるに過ぎない。如何なる投資を海外投資と名づけるかは、お役人の勝手でもあらう。だが、吾々の問題は、科學的に考察さるべき資本輸出であり、わが日本の帝國主義の觀點からの資本輸出である。吾々は、臺灣や朝鮮が日本帝國の植民地であることを、さう輕ろく／＼しく忘れ度くない。そして臺灣も朝鮮も、民衆の爲めの「植民」の地ではなく、資本家の爲めの「投資」の地であることを忘れまいではないか。せめてはかの、資本をして其處の××××××××××××××××××××××××爲めに、血と肉とを捧げて消えた幾十萬の若人の靈の爲めにも……。

が、恐らくヨリ以上の興味は、氏の辯解の方にあらう。『尤も、以上の計算には、朝鮮臺灣等に対する投資を含んでゐない。従つて之れを考慮に入れねばならないが、しかし（！）……猪俣）之れを單

に……猪俣）典型的な（そら出た！……猪俣）資本の輸出と云ふ立場から見れば、尠くとも（！）……猪俣）日本資本主義の現状が「商品輸出に代つて資本輸出が大なる意義を持つて來た」といふ事は、幾ら牽強附會しても（誰れが？……猪俣）云ひ得ないことであることは容易に看取し得るであらう。』¹⁾ 茲に「典型的な」とは、世界資本主義の一定の發展段階に於て典型的な資本輸出のことである。さうした資本輸出が或る一國、しかも少しも典型的でない資本主義的發展を餘儀なくされる一國に、そもそも生じ得るものかのやうに論ずることは、——またさうした資本輸出の有無が、直ちに、さうした一國の帝國主義的地位を決する標準となるかのやうに論ずることは、「幾ら牽強附會しても」、到底科學的であると言ひ得ないことを、氏は何故に「看取し得ない」のであらう？

だが、待つた。『少くとも、日本が今日、（今日！……猪俣）資本の輸出國でなく逆に輸入國である事は、レーニン自ら之を明言してゐる』といふ高橋氏の發見を見落す事は、公正を缺く。氏のレーニンの引用にはかうある。『……世界は極く少數の高利貸國と、非常に多數の債務國とに分解した。……イギリスが、エジプト、日本、支那、南アメリカに信用賣をしてゐるが如きがそれである。そこで、イギリスの艦隊は萬一の場合の執達吏である。』（日本の傍點は高橋氏のもの）しかし吾々は、氏の折角の發見も、三つの事實の爲めに、その價值が、消極的——といふ意味はマイナス以下——になることを惜まねばなるまい。（一）レーニンがこれを書いたのは、一と昔前の大正四年の

1) 太陽 17頁。著書 63頁。64頁。傍點は猪俣。

春であり、材料は従つて明治時代のものである。(二)あの頃の軍閥日本は、「執達吏のイギリス艦隊」の東洋方面を引受けて、成功的な×××帝國主義國となり濟ましてゐた。それが高橋氏の發見洩れになつてゐる。(三)その後、世の中が變つて、今日では高利貸國のイギリスが變になり、極く少數の債權國の一つにさへなり上つた昔の×××が、ブルジョアジーの新装で、亞細亞の主人の地位を狙つてゐる。

が、まだある。高橋氏は、「レーニンの云ふ第四の帝國主義の特徴「資本家の國際的團結が生れ、世界を分割すること」……」を、日本の資本主義に當て嵌めても見られた。そして最後には、「レーニンの第五の帝國主義的特徴は「資本主義強國間の世界の領土的分割が終結したと見得ること」と云ふのであつて、専ら、世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、従つて、こゝに問題は起らないわけである……」³⁾とある。西諺の一つとは少し違ふが、「最後に笑はせられる者は、最もよく笑ふ。」

(5) 高橋氏は何を儲けたか

しかしながら、以上の如き當て嵌めによつて高橋氏の「指摘したい點は、この小論文全體を通じてさうである通りに、日本の資本主義は未だ漸く、プチ・帝國主義階段にまで達したか、達しな

2) 太陽 17頁。著書 65頁。傍點は猪俣。
3) 太陽 17頁。著書 66頁。傍點は猪俣。

いかの階段にまで到達してゐるに過ぎないと云ふことである。』かゝ點を指摘する爲めには、氏によれば、全體としての日本經濟の性質を吟味する必要があり、更に日本資本主義の國際的地位を明かにする必要がある。そこでまた長々と數字の羅列が続く。¹⁾

だが、讀者よ、不機嫌な顔をし給ふこと勿れ、それらの數字たるや、これほど公正を重んずる私にさへ、最早や眞面目に取り上げて見る勇氣を起さしめないほどに、只だ一つのことの外は何一つ語らないものであるから。そして其の只だ一つの事とは、これもまた例によつて、強大國を弱小國に變裝せしめるのには、なか／＼骨も折れるといふこと。——たゞ、かく言ふ私の言葉を、誣罔や漫罵と響かしめない爲めに、次の如く例證して置く。

高橋氏は言ふ、日本は未だ農業國である。何故なら(一)我國の輸出の四割三分は農産品であり、(二)我國の農業人口は總人口の五割五分を占め、伊太利のそれと大差ないから。²⁾

私は言ふ、その四割三分といふ「農産品」の中には、砂糖だのメリケン粉だのと言ふ大工場の生産物が入れてある。が、それはよいとしても、「農産品」の輸入の方はどうされたのか。輸入の方を見ると、農産品は、(輸出の四割三分に對して)輸入總額の五割二分ほどになる。それだけで見ても、日本は大部工業國らしく見えるが……。また、米を作らねばならぬ日本の農業は、特殊事情の下に、極端な小農生産制である。が、麥を作り牛を飼ふ伊太利はちつと様子が違ふ。伊太利式の

1) 太陽、17—32頁。著書、66—90頁。
2) 太陽、22頁。著書、73頁。

生産方法を若し日本に移す事が出来たら、日本の農業人口は現在の三分の一に減する。日本式の生産方法をもし伊太利に移すなら、伊太利の農業人口は現在に三倍せねばならぬ。農業人口の大小で、國の資本主義的發達の程度をはかるとなると、白耳義は米國よりも發達が進んでゐる。等、等。高橋氏は言ふ、我國資本主義經濟の重心は、冶金工業にはなく、纖維工業にある。輸出中纖維品の占むる割合、工場生産高中紡織業の占むる割合、職工總數中紡織工の占むる割合が、それを示す。『かやうな事情の下においては、我國に「帝國主義」侵略が起る筈はない。』纖維工業は平和的な産業であるから。

私は言ふ、ずつと前から強固なカルテルをつくつて國內市場を獨占してゐた我國の紡績資本は、大正五、六年頃から急速に工場を支那に移し始め、今では支那における總鑄數の三分一以上を所有してゐる。事實、我國の紡績資本が反動的な帝國主義政策の熱心な主張者であることに、何の不思議もないと思ふが……。

高橋氏は言ふ、『……我國の資源關係においては、尠くとも現在においては、我が資本主義が重工業化すと云ふ望みは殆んど絶望である。』³⁾

私は言ふ、さうでせう、始めつから日本の帝國主義を抹殺してかゝることによつて、日本から支那をきれいに切り離してしまへば……。

3) 太陽、9—2頁。著書、69—73頁。

4) 太陽、1頁。著書、73頁。

高橋氏は言ふ、各國の帝國主義的獨占を見るに、先づ『原料及び食料の(獨占)』と云ふ點から言つて、日本は全く伊太利とその地位を同ふし、この點からは『帝國主義國』としての資格は殆んど零であると云つてよい。』⁴⁾

私は言ふ、一寸御注意申しますが、あなたの表には一群の重要商品の單なる生産高が擧げてあるだけです、⁵⁾「資源の獨占」といふのは少しばかり違ひませんか？ それから鐵、鋼鐵の生産は、日本では毎月平均たつた一千噸足らずになつてゐて、東洋一とかいふ「八幡」なんかは何處かへ蹴飛ばされて、また、石炭は一ヶ月平均二十四萬二千噸とあつて、本當の生産高のさつと十分の一。英帝國の項下には加奈太、米帝國の項下にはメキシコが入れてあつて、日本帝國へ來ると、朝鮮も滿州も支那もなし。おまけに、表の中に小麥だの米だのも加へてありますが、そんなものの生産を餘り「獨占」すると、恐るべき農業帝國になるんぢやなかつたでせうか？ アルゼンチン帝國、支那帝國など。——が、もちろん、そんな風に加へたり、減したりしないと、日本の地位は御愛好の伊太利といつしよにはなりません。

高橋氏は言ふ、『日本資本主義の國際的地位は、その販路から云ふも、全く、被帝國主義の地位にあるといつていい事情にある。』⁵⁾ けだし、『販路の獨占』といふ立場から見ると……日本は僅かに八千萬人の人口を占むるに過ぎないが、英國は四億四千萬人を、米國は約一億二千萬人を、露國は一

5) 太陽、29頁。著書、81頁。

億三千餘萬人を、佛國は約一億人を、支那は四億人を獨占してゐる。』

一四四

私は言ふ、果せるかな支那は、米の獨占に加ふるに販路の獨占を以つて、遙かにアメリカ帝國を凌駕する大帝國であつた。憐れむべきは日本帝國よ！

だが、高橋氏の偉大は、かくして現代史及び近世史を根本的に書きかへたことにあらねばならぬ。

レーニンから帝國主義の一定義を借り出して來た氏が、如何にそれを運用し、利殖されたかを吾は見たと。そして尠くとも弱小國日本と、大帝國支那とが今ま氏の掌中にあることを見た。氏は少なからず儲けられた。そして有らゆる資本家と同じやうに、儲けるに従つていよいよ擴大し深化する矛盾の中に沈みながら――

四、「日本は帝國主義國ではない」か？

(1) 獨占的地位の爭奪

レーニンは、高橋氏によつて利用された帝國主義の一定義――五つの特徴を含む――を述べた直ぐその後で、『もし、帝國主義に關して、單にその基本的な、純經濟的な諸概念――それらにのみ今

6) 太陽、30頁。著書、86頁。

ま述べた定義は局限してある――を問ふとするに止めず、資本主義一般に對して資本主義の一定段階が占めるところの歴史的地位や、労働運動内の二つの根本傾向と帝國主義との關係をも考慮に入れるならば、帝國主義は更に違つた定義を下すことが出來、また下さねばならないこと、それは吾が後段で見る通りである』と言つてゐる。

世界的規模における帝國主義にあつてさへさうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別箇の定義を要すべきことは餘りに明白であるが、同時に、資本主義一般の一定段階としての、世界的規模における帝國主義があつてこそ、帝國主義國もまたあり得るといふことも、劣らず明白でなければならぬ。この點における前者と後者との關係をあらはす比喻を――たゞ、此の場限りの比喻として――とれば、それは戦争と交戦國との關係に似てゐる。戦争があつて始めて交戦國があるので、その反對ではないやうに、帝國主義のエポックがあつて始めて帝國主義國（近代的意味における）がある。（論理のプライオリティーも、無論、前者にある）。そして、レーニンの指摘した五つの特徴こそは、此のエポックの最も一般的な物質的經濟的基礎たるものであるが故に最も重要な特徴なのであつた。そしてかゝる特徴は、之れを要約的に表現すれば獨占であつた。世界的觀點からの獨占が一定の時代において前記の諸特徴を有つに至つたこと、それが、その時代を帝國主義の時代にする。

一四五

資本主義が、個々の國家體系の内部において、時を異にし、條件を異にして發生し、生長したといふ事實、即ち個々の、多かれ少なかれ異質の資本主義諸國の存在を前提し、では、世界的觀點からの獨占は國家と國家との關係においては、如何に歴史的に變化したか？

十九世紀の半ば乃至はその後二十年ほどまでの間は、資本主義國中の唯だ、一國——英國のみが、植民地領有ならびに産業的優越の點で、獨占的地位を享有したといふ意味において、獨占が例外的であつた。此の時代を假りに、ナショナリズムの時代——勿論限られた意味において——と呼ぶならば、それに續いて現代に及ぶところのインビリアリズムの時代は、次ぎの點で前時代と區別される。即ち、資本主義國中の唯だ一國の獨占が、部分的に——特に産業獨占において——破れると同時に、資本主義國中の比較的先進的な數國のいづれもが、それらの理由から、それらの程度及び範圍において獨占的地位を享有するに至り、しかも物質的基礎、經濟的諸條件の根本的變化の故に、各自はその地位の強化と擴大との爲めに戰爭を賭して争はざるを得なくなつてゐるといふ意味において、獨占が常態的であり、決定的であり、時代的特質であること。

かゝる獨占、即ち一定範圍内の無競争状態を、實現せしむる力、優越が、金融資本の形態をとること——そこに時代的特徴はある。が、その獨占的地位の爲めの鬭争が戰爭を不可缺手段たらしめる以上、謂ふ所の力、優越は、同時にまた必然的に武力の形態をも併せとらねばならない。また、

1) その點を私は「社會科學」八月號の小論文において強調しておいた。(該論文は「日本帝國主義の新段階の問題」と題して本書に収めてある。181—211頁参照)

それらが、更にその他の様々な形態をとることを妨げないとは言ふ迄もあるまい。

が、帝國主義は、先進資本主義諸國相互間の競争を意味すると同時に、かゝる競争的な諸國家によつての、半開民族、未開民族の隸屬化と搾取とを意味する。

(2) レーニンと日本帝國

これだけを頭において、高橋氏がことのほか私淑されるレーニンの、次ぎの一句を讀むならば、氏の陥つてをる多くの誤謬は初めから不可能であつたであらう。「十九世紀の後三分の一は、新しき帝國主義のエポックへの過渡をなした。今や、獨占の利益者は、一個の強大國の金融資本ではなく、二三の極く少數の強大國の金融資本である。(日本とロシアとに於ては、近代的金融資本の獨占は、兵力の獨占や尤大な領土の獨占や又た支那等の外國民を掠奪する特殊便宜の獨占によつて、一部分は補充され、一部分は置代へられてゐる。)」¹⁾

右に於て明かに含意されてある通り、日本は、二十世紀初頭において既に帝國主義國であつた。それはまた、レーニンにまで行くことの馬鹿々々しいほどに著名な事實ではある。が、高橋氏の利益の爲めに、氏の愛讀書「資本主義最後の段階としての帝國主義」(一九一五年)から、彼の言葉を借り出してよい。「印度、印度支那及び支那……が、イギリス、フランス、日本、アメリカ合衆國

1) 此の一句は、高橋氏が専ら引用される邦譯レーニン著作集第二卷 210頁にある。但し私の譯文は、レーニン選集(獨逸本) 336頁により、邦譯本のものとの多少の差異がある。

等の若干の帝國主義國の金融資本によつて搾取されてゐることは周知のことである。²⁾ しかも彼れによれば——また無論彼れによらなくても——日本は帝國主義強國である。「右の六大強國にあつても、一方にはアメリカ、ドイツ、日本の如き、新進の、驚く可き急激に發展する資本主義國家があり、他方にイギリス、フランスの如き……があり、又た最後に、經濟的に非常に後れた國家、即ちロシアの如きがある。」³⁾ また、「植民地及び海外の諸國において、資本主義は極めて急速に發展しつゝある。後者のうちからは新しき帝國主義強國（例へば日本）が生れ出でつゝある。」⁴⁾

だが、レーニンが斯やうに書いてゐるのは、決して故意に高橋氏を不利に陥らしめんが爲めでないことは、彼れが如何に公平に伊太利をも帝國主義國となしてゐるかを見ても明らかである。ただ、彼れは、伊太利の帝國主義を檢討するに當り、次の如き言葉に表はれてゐる科學的用意を以てした點だけが、やや高橋氏と趣きを異にする。「現在の帝國主義戰爭が、社會主義に向つて提起してゐる諸問題の解明にとつては、各種の歐洲諸國に一瞥を與へてもつて、本質的なもの、基本的なものから（聽かれよ、高橋氏！……猪俣）全畫面の國民的差別相及び箇別態を見わけること學ぶのは無用でない。」⁵⁾ 此の、「全畫面の國民的差別相及び箇別態」を見わけんとする特殊の觀點からは、現エポックの本質的特徴は「國民的解放戰爭のエポックから掠奪的・反動的な帝國主義戰爭のエポックへの渡過」に存し、伊太利において特にそれが明瞭にあらはれてゐる。「伊太利の桎梏から自己

2) 邦譯本 162頁。 3) 同上、107頁。 4) 同上 131頁。

5) レーニン著「流れに抗して」（獨逸本）の中の論文「伊太利の帝國主義と社會主義」1915年、265頁。

を解放した伊太利は、革命的民主的、即ち革命的ブルジョア的である。だが、ガリバルデイ時代以來の伊太利は、吾々の眼前において最終決定的に、他國民を壓迫する伊太利、土耳其や埃太利を掠奪する伊太利に變形しつゝある。むくつけき、齒をむいた、ドス黒いブルジョアジーの伊太利、此のブルジョアジーが、掠奪物の分配に参加し得たことの歡びに涎を流してゐる。⁶⁾ 高橋氏が、わが無産階級運動の爲めにいたくも恐れられるファシズムは、此の帝國主義伊太利の軌近形態であつた。

(3) 香犬的帝國主義の時代

日清戰爭當時の日本において既に支配的な生産様式となりつゝあつた資本主義は、特殊の自然的、社會的、歴史的諸條件の下に、日露戰爭時代までにかかりに高度の發展段階に達してゐた。かかる發達なくして、あの近代戰爭の遂行は不可能である。紡績業の發達や鐵道敷設哩數の増加やの速度を見ても、日露戰爭後の十年は、それに先立つ十年に比して緩慢になつてゐる。當時のわが資本主義は尙ほ半封建的な文武の國家官僚の指導に俟つ所多かつたに加へて、資本主義それ自態が既に掠奪的である。當時における、全體としての帝國主義のエポックの成立を前提し、更に老大な掠奪物支那並びに朝鮮への近接と、武力における相對的優越とを前提する時、かゝる新興資本主義

6) 同上、266頁。

國を帝國主義國たらしむべき一切の條件は既にそこにあつた。日露戦争は帝國主義戦争であり、朝鮮、等、等はその獲物であつた。當時及びそれ以來世界大戦までの帝國主義日本は、亞細亞の主人英國に仕へつゝ、その部分的支持の下に、ロシア、ドイツ、その他の帝國主義強國と、亞細亞における掠奪物を争つた。

わが親愛なる高橋氏は、レーニンへの深き私淑にも似ず、また「日本はこれまで、英國の如き帝國主義國たらんと希望して、その目的の爲めに全力を挙げた」ことの認識にも似ず、「しかし乍ら、それは要するに一個の希望であつて、その爲めに日本が「帝國主義國」に、現實になつたわけではない」と辯明される。しかし乍ら、それは要するに氏一個の希望である。「國民經濟學」に造詣深き氏は、市場の商品に対する單なる欲望の所有者と、それに對する現實の購買力の所有者、即ち現實の競争者との區別は、とくに御存じでなければならぬ。だから、吾々は氏に問ふであらう、當時の資本主義日本は、特定の「市場」における掠奪物の、單なる希望者であつたか、それとも、「光輝ある戦勝」によつて現實に自己を立證したところの、帝國主義の榮えある若き闘士であつたか？が、事實は更に雄辯である。そして、世界大戦と共に、歴史の舞臺は一轉する、——わが亞細亞においても。

① 太陽 24頁。著書 77頁。

(4) 舞臺は一轉する

掠奪物は、しばらくは、掠奪者を強める。しかるにまた世界大戦は、未曾有の僥倖を若き掠奪者に與へた。「強大國日本」——それはもはや、「與へられた事實」である。吾々はたゞ、彼が如何に強大であるかを知らんとするのみである。

だが、大と小、強と弱は、ノア洪水の大昔から相對的であつた。

高橋氏は、極東の資本主義日本の強弱大小をはかる「尺度」を全世界に求められる。そして一群の重要商品の生産高と、諸國の面積と人口とを記述し比較することによつて、問題を、商業地理の水準にまで引上げられた。しかし、吾々の問題は、それよりはもつとつゝ、まじやかな、ヨリ具體的な、特殊な、しかもダイナミックなものではなかつたか？ 伊太利の小麥や、ドイツの鐵や、フランスの石炭の生産高、米領キューバの面積、佛領モロッコの人口——さうしたものが、資本主義日本にとつて有する意義を調べねばならぬほどに、此の極東帝國が膨脹したことを吾々は未だ知らずにゐる。「日本人は日本人らしく、」すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう。

が、その東洋が、世界資本主義の、従つて帝國主義の、新らたなる重點とならうとしてゐる。そして重點に近いものゝ力は、たゞその事の故のみで擴大される。假令それがまだ「農業國」であつ

たとしても。

世界大戦は、英國と米國の地位を顛倒した。戦後米國の不可避的な帝國主義的進出は、太平洋において、しかし、形勝を占むる日本によつて阻止される。此の對立なくして「太平洋會議」は生れ得なかつた。革命的な印度、革命的な支那が、亞細亞の舊主人を脅かす。が、老帝國の衰亡は、此の既得權の死守を、老帝國に命ずる。彼れは壯帝國を凝視する——形勝を占むる工業日本を。此の對立なくして、日英同盟の破棄はあり得なかつた。資本主義日本の優越は、一方では、依然として戰略的なそれである。

しかるに新しき日本の優越はまた新しき内部的な力に伴はれてゐる。その資本主義經濟は、世界大戦を機會に、社會的生產の全規模を、従つて社會的生產力を、殆ど倍加した。かゝる異常の蓄積は、それに應當する生産及び資本の集積と、生産の工業化並びに産業資本の獨立化と、重工業の擡頭と、信用の膨脹並びに銀行資本の集積とを齎した。そしてそれと共に、如何に今や獨占が、金融資本が、登場しつゝあるかは前既に之を見た。資本の輸出は、支那のみにも既に二十七億圓を超えるといはれる。¹⁾

戦後の帝國主義日本は、大帝國の一番犬として、掠奪物の小さき分前を追つてゐるには、もはや餘りに強大すぎる。彼の争はんとする所は、亞細亞における覇權である。最も優越した二大強國に

1) 四月三十日「東日」竹越與三郎氏の報告。

對する最も優越した獨占的地位である。けだし、争はずにはをれないから。

何故、をれないといふか？ (一)英米の抗争にも拘らず、南洋と支那とにおいて特殊利權を獲得し、伸張せしめることは、既得の植民地及び諸利權の維持と共に、新らたなる段階に入れる資本主義日本存立の爲めの絶對的の先要條件である。(二)對立のあるところ、かゝる條件は戦ひとられねばならず、戦ひとるの道は常に進攻であつて退守ではない。

では、何故にまたそれが先要條件であるといふか？ まさにその新らたなる發展段階において、ヨリ遙かに増大したる規模において展開するところの諸矛盾の故に。

(5) 人口問題のワナにかゝる

資本主義生産の常則として、資本の蓄積乃至集積は、それが勞働生産力の發展を齎らす限り、不可避的に資本構成の高度化を來たし、従つて利潤率の低落に伴はれる。此の事態は同時にまた、一方では過剰資本の、他方では過剰人口の、増大となつて現はれる。今や、絶對的にも相對的にも増大した過剰人口は、一部分は言葉通りの失業者——しかも未曾有の大群として、一部分は農家經濟への負擔を意味する「歸農者」の大群として、ブルジョアジーと其代辯者等をして今更のやうに「人口問題」を喧傳せしめるに至つた。わが高橋氏が眼さとも拾ひ上げられたのはそれであつた。そ

1) 「社會科學」四月號の拙文参照。(本書、「帝國主義日本の必然性」)

して氏の主張——「人口問題の故にこそ我が日本の無産階級は、英米の帝國主義と戦はねばならぬ」とは、また何といふ機宜を得た愛國的提唱であらう！ が、そればかりでない、此の提唱に含まれる氏の理論的創意の矜持をさへ、吾々は氏から聞くことが出来る。「レーニンは、彼れが白人種なりしが故に由るか（!!）見られよ、氏は先づ氏の同志の皮膚に着眼れきた（猪俣）鬼に角（?）猪俣）彼れは、人口問題を日本人の如く痛切に感じてゐなかつたと見えて、（だが、これよりも確な想像があり得ようか?（猪俣）、帝國主義的領土の獨占が人口問題を導りて戦争に導くべしとの可能性につき、（讀者よ、此の可能性を御記憶あれ（猪俣）全く論及してゐないやうだ（?）（猪俣）。而して、レーニンが現實に言つたこと以外に一步も踏み出し得ない、我國の直譯的（氏の誤譯との對立における?（猪俣）左翼は、日本の斯様な立場（人口問題的、國民的、打倒帝國主義的、戦争の立場!（猪俣）を全然理解し得ずして、之れを、非科學的にも、漫然と、「帝國主義戦争」と混同してゐる。従つて彼等の之れに對する策戦は少なからず混線して却つて、レーニンの精神（有難や!（猪俣）を失ふものが少くない。』²⁾

此の、皮膚の検討に始まつて精神の昂揚に終る一文における、氏によつてのレーニンの漫畫化は、蓋し篇中の白眉であらう。氏は、レーニンに、マルサス（嗚呼、たつた一字の違ひではある（猪俣）のガウンを着せてゐるではないか。

2) 「社會科學」四月號、43頁。 著書、32頁。

氏において全く缺けてゐるところの、「人口問題」のマルキスト的把握の爲めには、私は幸にも河上博士の近著「人口問題批判」——（問題の眞本質を捉え、我國近時の俗學的な諸見解と對立せしめつゝ、それを解明した、極めて啓發的な必讀の小冊子）を推薦するの便宜をもつ。この「人口問題」をば、先づ白人種のマルサスが、しかも氏が日本の「人口問題」の一仇敵と見做す英國において、凡そ百二十年前に初めて「人口問題」として日本人以上に痛切に感じたといふ奇蹟は、資本主義そのものが英國においては當時恰もかゝる問題を惹き起すやうな段階に進んでゐたといふ單純な事實に還元し得ることも亦た、同書が教へるであらう。だから、問題をレーニンに限つて言へば、いかにも彼は、マルキストなるが故に、「帝國主義的領土の獨占が、人口問題を驅りて戦争に導くべしとの可能性」には決して論及し得なかつた代りには、帝國主義的獨占が、「人口問題」を借りて、無産階級を戦争に導かんとする努力の必然性を認識してゐたことは明かである。さればこそ、世界資本主義、帝國主義と闘争することに一生を捧げた白人種の彼は、高橋氏にも増して人口問題を痛切に感じてゐたところの、白人伊太利の排外社會主義者ラブリオラを、「労働者の陣營内におけるブルジョアジイの手先」と痛罵してゐる。

で、誰れが今ま、「非科學的にも」、人口問題のワナにかゝりつゝあるのか!

(6) 亞細亞の覇權

一五六

だが、かうした過剰人口の増大は、わが資本主義の新しい段階において擴大し深化したる諸矛盾の現れの只だ一つに過ぎない。それと關聯して、大衆の限られた購買力と、それに比して異常に大なるものとなつた社會的生産力との間の矛盾がある。國內市場の狹隘は、今や資本にとつて壓倒的な苦痛となつた。更にそれと關聯して、農業と工業との矛盾が増大した。それは、一方では市場の問題として、他方では「食糧問題」として又た工業生産とその原料との間の矛盾として、何れもその痛切さを増して現はれて來た。が、原料の問題は、鑛産物において更に甚しく、しかも重工業原料に於て最も甚しい。然るに重工業の軍事的重要に至つてはまさに絶大である。

現段階におけるわが資本主義經濟の存立は、これらの矛盾の克服によつてのみ可能である。さればこそ、ブルジョアジーの眼は今や一齊に海外に、わけでも支那と南洋とに注がれてゐる。市場を、原料を、食糧を、「植民地」を、そこに獲得せぬ限り、かくして矛盾を緩和せぬ限り、「不景氣」は永久に續き、資本の蓄積は不可能だから。

戦後恐慌以來頻りに「整理」され來たつた過剰資本の一部は、今度の「財界危機」によつてまたげつ、つと切り落された。が、尙ほ著大なるその存在と、一般利潤率——わけでも重工業方面におけ

るその低下の傾向とは、資本輸出の促進を異常に強めつゝある。

だが、これらすべての意味においての「海外への發展」、——それが、吾々の既に強調したところの、亞細亞における争覇によらずして如何に可能であらうか？ かくしてこの争覇が、わが資本主義存立の絶對的先要條件となつてゐること——そこにこそ、現段階における資本主義日本の帝國主義の特質は見出されねばならない。

(7) 無産階級の任務

かゝる覇權の競闘者——英、米、日——との對立において、打倒帝國主義の、民族革命の、支那がある。更にまた、全世界の資本主義、帝國主義との闘争をたゝかひつくす無産階級ロシアがある。

英國は本國の政治的情勢の爲めに、米國は海軍根據地の缺除の爲めに、日本は軍事工業の基礎たる重工業の不備の爲めに、いづれも未だ決定的な衝突を避けてゐる。が、それは平和ではなく、休戦に過ぎない。三大強國は、今ま、弱國支那に、また勞農ロシアにさへ、讓歩的、妥協的な態度をとつてゐる。が、それは、自家にとつて最も有利なる争覇の機會を待つ間の事である。そして、日本の重工業の建設——この死活的な重要事——は、支那に於ける特權的地位の確否にかゝる。

資本主義日本の帝國主義は、かやうに、確定的、運命的、死活的である。わが無産階級は、この事實の認識を、その戦略の、戦術の、一般的基礎の一たらしめねばならない。諸矛盾の資本家的克服の努力は、生産費の低下と、生産の「合理化」と、獨占化と、軍國化とを、帝國主義の目的の爲めに、無産階級及び被壓迫大衆の負擔においてのみ強行せんとする。そして無産階級は、かゝる企てに對する闘争を敢行することによつてのみ、——即ち帝國主義との闘争を通じてのみ、自身を解放することが出来る。けだし、かゝる闘争の過程のみが、それ自身を強大化する過程であるから。氏よ、人口問題の解決は、かゝる闘争の決定的勝利の後にのみ來るのではなかつたか？

高橋氏の思考における根本欠陥の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握されてゐないこと、従つて諸多の矛盾と對立とがぼやかされ、まやかされてゐることにある。一國の資本主義は、單に「行詰る」が故に、崩壊するのではない。「行詰り」を打開せんとする必死のブルジョア的闘争より生ずる國際的及び國內的對立、かゝる對立の尖鋭化が一定の程度、形態に達することによつてのみ、崩壊するのである。氏は此の點に無關心なるが故に、安價で甘やかな崩壊理論を編み出すことが出来る。また、資本主義はその一般的、抽象的意味における最高段階に達する時のみ崩壊するかの如き考への影響を脱することが出来ない。そして、ロシアの資本主義が如何に崩壊したかを理解することが出来ない。レニニストは、世界資本主義、帝國主義の連鎖は、その最

も弱き一環から崩壊して行くといふ。そして、一國は、その無産階級及び被壓迫大衆が最も××なる時にこそ、最も弱き一環であると云ふ。そしてまた、各國の無産階級及び被壓迫大衆の任務は、客觀的條件によつて規定される戦略、戦術に即しつゝ、何よりも先づ自國をばさうした××××しめる爲めに闘ふことにありとする。

(8) 結 語

かつて、伊太利のトリポリ戦争——それと共に伊太利は帝國主義國たることを立證したとレーニンがなすところの——について、帝國主義伊太利の「愛國的」社會主義者ラブリオラは言つた。「吾等は、單に土耳其に對して戦つてゐたのではない。弱小國をして一指をだに觸れしめず、鐵の如き制覇を批議する一言をだも發せしめざる財閥的歐洲の、陰謀と威嚇と黄金と軍隊とに對しても戦つてゐたことは明かだ。」¹⁾

いま、日本の高橋氏は言ふ。——日本はかつて帝國主義戦争をしたことがない、日本は農業國である、日本は弱小國である、日本は隣むべき債務國である、「日本の資本家は殆んど、資本家の國際的團結による「世界の分割」の埒外に取り残されてゐる」、日本の生絲業の「労働者は外國に搾取されて」ゐる、「労働に値ひする人間なみの報酬を外國消費者(！)は支拂つてゐない」、原料食料の

1) レーニン著「流れに抗して」にある論文「伊太利の帝國主義と社會主義」より。

大部分は英米二國に獨占され、日本は伊太利と地位を同じうする、『いま、日本は、最も「領土」の獨占到苦んでゐる國であり、消極的に搾取されてゐる國である。』²⁾

かつて、伊太利のナシヨナリスト、コラデイニは揚言した『社會主義が、ブルジョアジーからの、プロレタリアートの解放のメトードであつた如く、國民主義は、(聽かれよ、高橋氏! : 猪俣) 吾々伊太利人にとつては、吾々に對するブルジョアジーであるところの、(聽かれよ!)、佛人、獨人、英人、米人からの解放(一)のメトードであるであらう。』³⁾

いま、わが高橋氏は、諄々として説かれる。日本は、『大ブルジョアに對する小ブルジョアの如き帝國主義「的」國であつて……ブチ・帝國主義國の利害は……(むしろヨリ多く)——被帝國主義國と一致する。』日本の『人口問題の解決策は、……専ら、(讀者よ、傾聽あれ : 猪俣) 英、米、佛、等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戦」(!!)に行く外に策はない。』『人口戦争は一の無産階級の解放戦(!!)としての色彩の深いものである。』⁴⁾

かくして氏は、無産階級と其の「左翼」とに教へられる。それ故に『日本の無産階級運動……(は)……多かれ少なかれ國民運動的色彩を免かれ得ない。』⁵⁾(まことに然り! だが、氏の指摘する理由の故にはなく、帝國主義ブルジョアジーの必死の努力としての欺瞞の、部分的奏効の故に!)『この點はレーニンの指摘せる如く、(だが、氏よ、レーニンの指摘は、本國の面積に匹敵する植民

2) 太陽、17頁、22頁、32頁、著書、66頁、73—4頁、88頁。

3) レーニン著「流れに抗して」の前記の論文。

4) 太陽、32頁。著書、90頁。

5) 太陽、33頁。著書、90頁。

地を領有して數千萬の他民族を隷屬せしめ搾取してゐる國についての指摘ではなく、かく隷屬せしめられてゐる國についての指摘であつた!)、社會主義的に(一)無産階級の解放に志す者の、決して侮蔑すべからざる點であつて、(いかにも!) そしてその「侮蔑」をあなたは今あなたが與へたものとして取戻してゐる。要は之を反動化せしめず、之を導いて眞の解放戦、即ち(一)反帝國主義運動にまで發展せしむることに在るわけだ。』『かゝる準備をなさず、注意をも採らなかつたなら——(と氏は言ふ、だが吾々は言ふ、氏の如き指導方針によつてのみ)——大衆は……ファシスト化するに至るであらう。』⁶⁾

惜むらくは、吾々は此の高橋氏の指導方針に對するレーニンの賛否の聲はもはや之を聞くことが出来ない。しかし、彼が、氏の伊太利の同志ラブリオラ、コラデイニを評した言葉には、氏は必ずや喜んで耳を傾けられるであらう。彼は言つた——

『吾々』よりも(氏の場合には日本よりも : 猪俣) 多くの植民地、多くの資本、多くの軍隊を有する國はいづれも、「吾々」から(日本から : 猪俣) 何等かの特權を奪ひ、何等かの利潤、餘剩利潤を奪つてゐる。……自國の資本の特權と優先權との爲めに闘争すること、そして他を掠奪する「權利」の爲めの帝國主義的闘争が、(聽かれよ! : 猪俣) 國民的解放の闘争と僭稱されるやうに、國民即ち民衆を、——ラブリオラやブレハーノフや(そして高橋氏や? : 猪俣) の援助を得て——欺

6) 太陽四月號、33頁。著書、90—1頁。

日本帝國主義の新段階の問題

此の一篇は、もと、「我國資本主義の現段階の問題」と題して、雑誌「社會科學」八月號に寄せたものである。前半は、帝國主義の理論乃至實際を直接に扱つてゐないとはいへ、我が無産階級運動の戦略及び戦術の客觀的基礎を明確ならしむべく、近來、我國のマルキスト諸君と共に私が企てつゝあるところの、我國の資本主義的發展の現段階の分析究明の方法に關する理論として、日本帝國主義の新段階を論定せんとする者に若干の光を供するであらう。後半は、本書の第三論文「資本主義日本の帝國主義」の論旨を擴充するために書かれた。

一、マルキストは何故に、また如何に、 現段階を分析するか

(1) 分析の目的と「主體」

「マルクス主義的政策は、唯一の、科學的に基礎づけられた、労働者階級の政策である。従てそれは、全歴史的時期の注意深き科學的分析、並びに與へられた具體的な經濟的及び政治的狀況のいち／＼それによつてそれ相應な、労働者諸政黨の方策が規定される——の注意深き科學的分析に基づかねばならぬ。だから、現在に特徴的な、特種の資本主義的發展の時期を如何に評價するかの問題が、最も重要な意義を有つのは當然である。」

かゝる言葉をもつて、ブハーリンは、彼れの『資本主義の安定と無産階級革命』——第三インタナショナル第七回擴大執行委員會で彼れの發表せる長文の書面報告——の冒頭を起してゐる。茲に問題となつてゐるのは、先づ、國際無産階級の×××闘争であり、特に考察の對象とされてゐるのは、かゝる闘争の戦術を決定するところの、現在の資本主義的發展の特殊の特質である。此の考察において彼れは、言ふ迄でもなく、闘争の「主體」としての無産階級、その前衛の國際的結成と

しての第三インターナショナルの存在と活動とを前提し、國際無産階級の「意識的」、組織的、闘争力的「成熟」の程度を、一應、與へられたものとして許してゐる。だが、彼が客觀的條件を考察し、分析し、究明する目的は、「主體」たる無産階級の闘争を更に押進め、「主體」そのものを更に意識化し、強大化さんが爲めに捉えねばならぬ諸契機を明かならしめることにある。そして彼は更に、「主體」たる無産階級もまた、その同盟者たる諸階級、諸層、並びにその對立物たる諸階級、諸層と共に、全情勢における能動的要素として、しかも客觀化されて、彼れのさうした考察、分析の過程のうちへ必然に入込んで来ることを知つてゐる。能動的要素として、無産階級は、政治的要素である。政治的要素としても、特殊の意味、しかも最も重要な意味における政治的要素である。政治は、一般的には、特定の社會秩序——茲では資本主義的社會秩序をば、その支配的地位に立つ諸階級、諸層が、組織に固有にして絶えず展開する諸矛盾を克服することによつて維持し擴張し行かんが爲めに、國家權力を樞軸として行ふところの、支配的活動と解される。が、組織に固有にして絶えず展開する諸矛盾の必然的なる深化、増大は、支配される、諸階級、諸層を、反抗と抗争に導き、政治的對立物につくり上げて行く。資本主義社會にあつては、かゝる諸階級、諸層のうち獨り無産階級のみが、本質的な對立物となることが出來、根本的な對立をその揚棄にまで、即ち社會の××にまで、齎らすことが出来る。かゝる歴史的使命の意識において、かゝる歴史的使命を遂行せんとす

る全的闘争、それが無産階級の××××政治闘争である。かゝる闘争の擔ひ手として無産階級は、特殊な、最も重要な意義における政治的要素でなければならぬ。

(2) 分析の對象としての政治と經濟

ブハーリンは、『全歴史的時期』と、『與へられた具體的な經濟的及び政治的状況 (Konjunktur) のいち／＼』とが、注意深く、科學的に分析されねばならぬといふ。無産階級の階級闘争は必然に政治闘争である。しかるに、彼が、政治的狀況と併せて、經濟的狀況が分析されねばならぬといふのは何故か？ 政治は經濟の集中的表現である。集中的表現であり、従つてそれに全的重要性が宿りはするが、しかも尙ほ政治は、畢竟、經濟の表現である。アナーキーを本質とする資本主義經濟は、社會的には、主體なき經濟である。資本主義社會の經濟現象は、従つて、自然現象的な現象である。此の特質は、經濟の發展に、明白な法則性をもたらしめる。吾々は、經濟の發展において普遍性を見出すことが出來、それ故にまた特殊性を捉えることが出来る。一口に言へば、科學的分析は經濟において可能である。かくして吾々はまた、政治をも、——全的重要性ある政治をも、客觀的に、しかも科學的に、分析し得るのである。けだし、政治は經濟の表現であるから。で、マルクスが、『人間は彼等自身の歴史をつくる』といふ時には、政治が強調されてゐる。『だが、彼等は、そ

れを随意につくるのでも、自ら選んだ事情の下につくるのでもなくて、直接に見出され、與へられ、交付されたる事情の下で之をつくるのである』といふ時、強調は、經濟に、社會の物質的基礎に置かれてゐる。これが、「戰闘的唯物辯證法」の創始者その人の言葉である。彼をして、無産階級の××××政治闘争に、現歴史時代の全的重要性を認め得しめたのは、彼れの唯物辯證法的、客觀的、歴史的、社會—經濟的方法であつた。

(3) 問題の始まりと分析の始まり

政治的に闘ふ無産階級は、其闘争の全體的及部分的勝利の爲に、常に正しき戰略及び戰術を見出さねばならぬ。さればこそ、「マルクス主義は、歴史的過程、歴史的瞬間のいち／＼における、階級の諸關係の普遍性並びに具體的な特殊性の、最も正確にして客觀的な分析を要求する」のである。政治的に闘ふ者は、先づ、現時代の、現時期の政治的情勢の特殊の特質は何かと問はなくてはならない。そこに問題は始まらねばならぬ。問題の提起は、分析の方向と對象とを決定する。だが、それはまだ、所要の分析の始まりを意味しない。政治的情勢の特殊の特質の究明は、「階級間の諸關係の、普遍性並びに具體的特殊性の、最も正確にして客觀的な分析」を要求する。では、かゝる分析は何によつて可能であるか。マルクス主義は答へて、それは社會階級の基礎たる經濟を、その

發展において把握し、分析することによつてのみ可能であると言ふ。けだし、經濟の發展のみが、その固有の法則性の故に、(一)階級關係に「普遍性」を與へ、普遍性の認識の下に吾々をしてその具體的な特殊性を把握し得しめるからであり、また、(二)吾々の階級關係の分析をして、「正確にして客觀的」なるを得しめるからである。即ち、吾々は、吾々の「注意深き」分析を、經濟にまで掘り下げる時のみ、——すくなくとも、此の一條件が充たされる時のみ、それは科學的性質をもち來たるのである。マルキスト・ブハーリンはそれ故に、彼れの「資本主義の安定と無産階級革命」なる論篇を、經濟の分析——安定の分析——から始めてゐる。政治的情勢の分析は、經濟の分析に始まらねばならぬ。

(4) 「交互作用」における經濟と政治

だが、謂ふところの、「經濟を、その發展において把握し、分析する」とは、與へられた時期の經濟的情勢に含まれる諸矛盾と、従つて生ずる諸對立との特質を究明するの謂ひである。「發展は對立の闘争である」からである。資本主義社會における一の經濟的情勢より他の經濟的情勢への發展は、前者のうちに含まれる諸矛盾を克服せんとする資本家的努力と共に必然的に生ずる特定の諸對立——資本家對資本家、資本家對地主、地主對小作人、有産者對無産者、等、等——の特定の闘

争によつて、新たにしてヨリ深大なる諸矛盾が、後者のうちにつくり出されて行く過程に外ならない。吾々は、既に、經濟に於ける諸矛盾、諸對立が不可避的に、政治的對立、鬭争に展開されることを見た。かくして、經濟的情勢のマルキスト的分析は、直ちに、政治的情勢の分析に進み入ることが出来、また、後者の特殊の重要性の故に、飽くまでも進み入らねばならない。

いかなる場合でも、經濟は政治の基礎であり、後者は前者の表現である。だから、經濟は常に政治を規定する、これは、基本的な關係として動かない。だが、經濟の發展が、經濟的對立の鬭争であり、かゝるものとして必然にまた政治的對立の鬭争をも展開する以上、政治に影響されざる經濟はあり得ない。一定時の政治的情勢を規定する一の經濟的情勢は、政治的影響の下にのみ、他の經濟的情勢へと發展する。そして後者が更にその時の政治的情勢を規定する。經濟と政治とは、その「交互作用」において、同格ではないが、交互作用的な關係にあることは明かである。政治が經濟に及ぼす作用の形態、影響の程度は、資本主義發展の歴史的段階によつて異ならねばならぬ。また、一定の歴史的段階における資本主義世界體系の構成部分によつて異ならねばならぬ。帝國主義の段階にあつては、政治は、資本の擴張再生産の直接的な不可缺手段として現はれ、ブルジョア學者をしてしばしば、政治が決定的であるかの如き錯覺に陥らしめた。經濟上の自由競争主義、政治上の自由放任主義の時代にあつてさへも、後進資本主義國の資本は、その蓄積過程において、政治に依

存する所が多い。この事實は、例へば獨逸において、經濟的發展を政治によつて説明する「歴史派」を生ぜしめ、「國民經濟學」の體系の中に「政策學」を編み込ましめた。獨逸よりも更に後進なる資本主義日本の經濟學が、長く獨逸のそれに追隨し來たれることは周知のことである。

で、經濟の分析から、政治の分析へ進み入ることが出来るといふだけではない。更に對象が、具體的な經濟的情勢である限り、その分析のうちには、影響的要因として、政治が取入れられねばならない。かやうに全面的な經濟的情勢の分析に基礎づけられる時にのみ、かの、經濟によつて規定されつゝ、その集中的表现たられねばならないところの政治の、具體的な特殊的情勢の分析は、科學的分析の名に相應しきものであるであらう。

が、もちろん、一定の政治的情勢を究明せる論篇のすべてが、いちく、その物質的基礎をも明示してをらねばならぬといふのではない。默示に止めるのもよからう。また、既に與へられたものとして許すのもよからう。たゞ、その基底的な情勢が、事實、究明するところとなつてをれば足るのである。反對に、正しく經濟的情勢を究明せる論篇なら、人をして不當な政治的結論をそれから引出させない限り、それは一定限度内の價值をもつ。特定の經濟的情勢が有する政治的意義のすべてを、卒直に述べつくすことは、周知の政治的理由によつて、しばしばマルキストの能くせざる所である。レーニンの小冊子「資本主義最後の段階としての帝國主義」が、著者自らの述ぶるが如き

理由によつて、主として經濟の分析に限られてあることは、毫もその名著たるを失はしめないものである。

二、究明さるべき「現段階」は何か—— 戦略及び戦術との關係

(1) 世界と日本

プーハトリンの前記の論文において考察の對象とされてゐるのは、一體系としての世界資本主義の現状であつて、その構成部分としての各國資本主義の差別相、個別態は、單に、全體の究明にとつて必要な限りにおいて取扱はれてあるに過ぎない。しかるに、吾々が問題としなければならぬのは、我國資本主義の「現段階」である。日本資本主義は、一體系としての世界資本主義の一構成部分であるから、飽くまでもかゝるものとして扱はねばならない。が、同時に、その「現段階」を究明することの目的が、我國無産階級の政策を、「マルクス主義的政策」たらしむるべく、「科學的に基礎づける」ことに存する以上、そしてかゝる基礎づけが、マルクス主義的には常に具體的な諸關係の分析を要求する以上、吾々の分析にあつては、世界資本主義の一環としての我國の資本主義的發展の、現在における特殊性が昂揚されなくてはならぬ。

(2) 戦略、戦術の科學的基礎づけ

資本主義の「(一) 全歴史的時期の注意深き科學的分析、(二) 並びに與へられた具體的な經濟的及び政治的状況のいち／＼の……注意深き科學的分析」——それによつて、無産階級の政策は基礎づけられねばならないとプーハトリンは言つてゐる。概言すれば、右の(一)は、謂はゆる一般戦術を基礎づけ、(二)は、一般戦術を成功的に遂行すべき諸戦術を基礎づける。國際無産階級は、(一)に基つて夙に没落期資本主義における一般戦術を打立て、(二)に基つて都度々々の戦術を規定し來たつた。しかるに、國際無産階級運動の重要な一戦線を受持つ我國の無産階級運動は、今や漸く、××××政治闘争の「主體的條件の一應の確立」を語り得るほどの段階に進出し、運動のかゝる發展段階が當然に要求するところの、一般戦術の樹立と、その科學的基礎づけとに、異常の注意を集注し始めたのである。かゝる事態の意識的表現は、各種の左翼文献の隨所に之れを見ることが出來やう。いま、その典型的なもの、最も尖鋭に表出されたもの二三を挙げれば——

「これ、實に、……我々のとるべき一般戦術と戦術との基本的基準の一たる「我國における形勢の——客觀的條件の——現實的進行の過程」の究明の問題でもある。かくて、我々は、これが

分析、規定の爲めに、一旦、經濟的過程——資本の現實的運動形態——所謂「我國資本主義没落期の現段階」——の分析にまで下降しなければならぬ。」¹⁾

また、他の箇所では、

「……かくして今や「吾々は政治的曝露を重ね始めなければならぬ」、また已に始めつゝある。

だが、それは眞實の闘争、所謂全線的展開の爲のもの、吾々の全戦略、戦術に適應し、統一されたものでなければならぬ。かくてかゝる戦略、戦術の嚴密正確なる規定、この基準たるべき客觀世界——所謂現段階の嚴密正確なる分析が吾々の當面緊急なる任務でなければならぬ。

この分析によつてのみプロレタリアートの當面の闘争目標と、この闘争における同盟者、豫備軍とを規定することが出来るのである。」²⁾

右にあつては、規定さるべき「戦略、戦術」と、その規定の爲めに分析究明されねばならぬ「現段階」との関係が必ずしも正確に把握されてゐるとは見えず、従つてまたその謂はゆる「現段階」なるものが何を意味するかも必ずしも明瞭であるとは言へない。だが、理論的究明をば常に實踐への案内たらしめんと欲するマルキストは、あらゆる概念を機能的に把握することを忘れず、問題の「現段階」を現在の我國の無産階級運動の一般戦略、並びに若干の重要戦術を科學的に基礎づける爲めに分析究明されねばならないところの、我國資本主義——世界資本主義の一環としての——

1) 「マルクス主義」32號、56頁。
2) 「マルクス主義」35號、3頁。

現在の發展段階の特殊の特質を形づくる客觀的諸條件に外ならずと解するであらう、分析究明の對象たるべき客觀的諸條件の範圍は、一般戦略のみならずまた若干の重要戦術の科學的基礎づけに必要な範圍にまで及ばねばならない。實踐がそれを要求するからである。

(3) 戦略と現段階

或は、「戦略決定のための現段階はかくてわれわれの一般的には究明し得たところであらねばならぬ」と言ひ、また、「一般戦略は既に我々の一應規定し得たところである」とも言ひ得るかも知れない。例へば、

「かくして吾が無産階級運動の戦略は、次ぎの如く規定されるのでなければならぬ。

一、闘争目標——ブルジョア民主主義

二、闘争のための同盟軍——一切の被壓迫民衆

三、闘争のための組織——自からを指導勢力とするところの一切の被壓迫民衆の利益を代表すべき大衆的協同戦線黨。」³⁾

だが、右の規定は、マルクス主義三十七號所載の論文「労働農民黨及び請願運動について」に於て早くも批判の對象とされてゐるのである。一方、スターリンは、一九〇三年——一九一七年二月

1) 「マルクス主義」36號、108頁。
2) 「マルクス主義」36號、62頁。

におけるロシア・プロレタリアートの戦略を要約して、

- 一、目的——ツァーリスムスのXX、中世的殘物の完全なる清算
 - 二、XXの基本勢力——プロレタリアート
 - 三、第二豫備軍——農民
 - 四、主要攻撃の方向——自由主義XX主義的ブルジョアジーの孤立
 - 五、勢力配備の計畫——労働者と農民との同盟
- となしてゐる。³⁾そして周知の如く、此の戦略は、ロシア資本主義の當該發展段階の、レーニン等による「嚴密正確なる分析究明」によつて科學的に基礎づけられてゐた。今や我國の左翼によりて、一應規定されたとされる所の戦略なるものが、單なる歴史的類推以上の科學的基礎を有すべきこと勿論としても、如何なる程度の科學性を有するかの點に問題がないではない。一應の規定は、實踐の要求するところとして是非ともなされねばならない。だが、規定の科學性は、更に大なる實踐の要求である。

(4) 戰術の問題

では、一般戰略と共に、此の際、科學的に基礎づけられねばならない若干の重要戰術とは何か？

3) 「レニニスムス」の諸問題(獨逸本) 133頁。

國內的には、それは例へば、一般戰略を遂行すべく、次ぎの如き諸目的を達成せんが爲めの、一般方針でなければなるまい。

大衆的、政治的、協同戰線
XXの結成、強
大衆動員
大化、影響圏の
労働組合、農民組合の統一
による
擴大
未組織の労働者農民の組織
勢力集合

これらの目的を圖ひとらしむる諸戰術は、言ふ迄もなく、互に密接に關聯し、相互制約的であると同時に相互補足的である。今ま、そのおの／＼を、それ／＼に、成功的に遂行し得んが爲めに捉えねばならぬ機軸は何々か、だが力點は就中どの戰線に置かれねばならぬか、何づれに主力を傾注することによつて吾々は事件の歴史的連鎖の「かの一環」を掴むことが出来、それを掴むことによつて全連鎖を我物となすことが出来るか、例へば今ま、至難なる恐慌克服の爲めに闘ひつゝある帝國主義ブルジョアジーの、労働者農民に對する攻勢が熾烈を極むる時、吾々は、まだ決してブルジョアジーに屈服しないところの「組合主義的政治闘争主義」を克服することに全力を盡すべきであるか、それとも、先づ、労働者農民を改良主義と反動主義とに導かんとするところの「意識的指導勢力」に極度の打撃を與へ得る如き勢力集合、大衆動員を敢行することを當面の任務とすべきであるか、その何づれが今ま眞に帝國主義ブルジョアジーに對する闘争を意味し、何づれの闘争が眞に

「政治的」であり、また何づれによつて今ま、ヨリ確實に「歴史的使命意識」を闘ひとることが出来るか、更にまた、かゝる勢力集合、大衆動員の手段、一形態としての政治的經濟的協同戦線の範圍は、××分子の機械的統制、絶對的指導力の及ぶ程度に局限すべきであるか、乃至はまた、遙かにその程度を超えて擴大し、従つて暫くは、××の直接指導下に立つ大衆をして全協同戦線體内のマイノリテイたらしめしつゝ、従つてまた彼等による、爾余のマジヨリテへの働きかけが、イデオロギヅシユな、影響力的な統制、指導であることに満足しつゝ、しかも××分子に獨自なる犧牲的實踐性と、その戰術の科學的適正との故に必然に大衆を獲得し得べき斯かる働きかけをば、有效に、直接的に、眞に、對大衆的ならしめることにより、闘争の發展の各段階において常に××それ自身の絶對的且つ相對的なる増大、強化の實現を期すべきであるか、——これらに對するマルキスト的解答は、「現段階」の分析究明によつてのみ決定的に與へられるであらう。

私は、與へられた材料の許す範圍内において現段階のうへに下し得た全面的な考察の總果を、いま、一つの著作に纏めやうと試みつゝあるが、取敢えず茲では、さうした考察の比較的一般的な成果にしてしかも最近より現在に亘つてしばしば論争の焦點となれるものゝ一二に關説しつゝ、現段階の問題の闡明に資する所ありたいと思ふ。

三、日本帝國主義の新階段の問題

(1) 初等的諸概念の不明確——高橋龜吉氏等の問題提起

問題の一つは、日本の帝國主義の新段階の特質である。此の特質の如何によつて、吾が無産階級の政治闘争の闘争目的の重心と、同盟軍の主力と、主要攻撃の方向とが決定され、更に、重要戦術の基線が決定されるであらう。かくしてそれは、極めて多面的な問題であり、各面からの攻究を要するものであるのに、我國の無産階級運動にあつては、今や漸く問題の提起を見たと止どまり、しかも、問題の解決に當つて驅使されねばならぬ二三の初等的な概念が明確化されない爲めに、問題の進展は阻止されてゐるかに見られる。

問題は、先づ「社會思想」(昨年十二月號)所載の論文、「世界及日本資本主義の情勢と我國社會運動」において、丸岡重堯氏によつて提起され、更に、高橋龜吉氏の論文「日本資本主義の帝國主義的地位地」(「太陽」四月號)において一層明白な形態をとつて現はれて來た。これらの論文に見らるる兩氏の分析の一般特徴が、問題の把握における非マルキスト的方法に存することは、淺野晃氏「マルクス主義」(二月號)、濱田徹三氏(同上、四、五、六月號)、野呂榮太郎氏(「太陽」四月號)、

薄茂人氏（『大衆』四月號）、成瀬光雄氏（同上五月號）等の指摘し批判した通りである。だが、かゝる問題の、さうした把握によれる兩氏の見解に對する批判は、兩氏の見解が必然的に包藏する誤謬を摘發するだけの消極的な批判に止どまつてはならない。マルキストは、それらに對立せしむるに、自身の正しき見解をもつてし、日本帝國主義の新段階に關する見解そのものをもつてし、正しきをして誤れるを克服せしめねばならないからである。妥當なる積極的見解のみが、正しき戰略、戰術の樹立を可能ならしめ、實踐を通じての眞の克服、マルキスト的克服に導き得るからである。私は、最近に發表した數篇の論稿において、その性質、構成の許す限り、問題の新段階の特質を積極的に展示しようと努めた¹⁾。此の機會において私は更に、それらの論文の擴充を兼ね、前言せる「二三の初等的な概念」の明確化を試み、問題の進展に寄與する所あらうとする。

(2) 資本主義の崩壊と帝國主義

高橋龜吉氏の言説に見らるゝ雜多の概念の亂舞の狂態は、まさに一箇の奇觀である。例へば氏は言つてゐる――

『所謂「資本主義最後の段階としての帝國主義」と云ふ場合の「帝國主義」は、資本主義が「自由競争」から「獨占」に轉じた場合に起る、一定の型を備へた「侵略」であつて、（獨占を基

1) 「改造」六月號、「世界」六月號、「中央公論」七月號。

礎とする侵略といふ意味であらう、猪俣）、單なる「侵略」でない……然り、この一定の型を備へてゐるが故に、而してその「型」は資本主義の最後の發展形態であつて、その形態それ自身、資本主義を破毀（？）して、社會主義經濟への萌芽を已に生長せしめつゝあるが故に（ただそれ故にのみ?! 猪俣）「資本主義最後の段階として、帝國主義」といふ事が結論される（一）のである。（猪俣曰ふ、これこそが典型的な、資本主義の自動的崩壊の概念、社會主義經濟の自然生長の概念として、レーニンが常に痛罵してゐるものではないか）

右の一節は、資本主義全般、世界體系としての資本主義について述べてゐるものと解すれば、讀みこなせないこともない。だが、氏は續けて言ふ――

『我が國における多くの左翼理論は、右の「帝國主義」論（一）からして、直ちに（!!）次ぎの如き結論（一）を引出すのが常である。曰く「日本は帝國主義國である。日本の資本主義は已に帝國主義時代に這入つてゐる。（猪俣曰ふ、二つの事柄は同じなのか、違ふのか？）であるから日本資本主義は已に崩壊（!!）の過程を過程しつゝある」と、（猪俣曰ふ、誰れが何時そんなことを言つたといふのか！）、なる程、私（高橋氏）は日本の資本主義が已に行詰り、崩壊しつゝある（一）ことは、いち早くこれ迄幾度か實證（一）して來た。しかし乍ら、左翼理論（猪俣曰ふ、氏によつては全然理解されざる「左翼理論」）の云ふが如く、現に日本の資本主義が「資